

續いて陸上交通機間の計畫をなし、市内を捜査せしめ、九月十日根岸町セールフレ
ザー自動車會社から乗用自動車一臺を徵發し、水陸交通の便を與へたのは、顯著なる活
動であつた。

第十八節 神奈川縣測候所

第一冊八九頁以下を見よ。

第十七節 震災直後に於ける市内

官衛公署の立退場所

横濱市内の諸官衛は、震災後の應急執務を左記に假設した。(九月以降十一月まで)

- 神奈川縣廳 櫻木町海外渡航検査所内
- 市役所 櫻木町中央職業紹介所内
- 横濱地方區裁判所 海外渡航検査所内
- 横濱税關 西戸部山王山税關長官舎内
- 生絲検査所 従前通り
- 航路標識管理所 同前
- 横濱刑務所 同前
- 神奈川縣港務部 コレア丸
- 横濱稅務署 西戸部町池坂一六〇四
- 横濱郵便局 高島町社會館
- 長者町郵便局 従前通り

市内官衛公署立退場所

- 神奈川郵便局 青木小學校
- 横濱驛前郵便局 從前通り
- 市水道瓦斯局 中央職業紹介所内
- 市電氣局 從前通り
- 伊勢佐木警察署 太田小學校内
- 戸部警察署 縣立第一中學校内
- 加賀町警察署 三井物産内
- 壽警察署 中村町
- 山手警察署 根岸町成和商會内
- 神奈川警察署 舊廳舎
- 水上警察署 舊廳舎前
- 植物検査所 根岸町三一三〇（所長青木町桑名伊之吉方）
- 絹業試験場 西戸部町九六三税關官舎芳賀方

第三章 教育

第一節 官立諸學校

横濱高等工業學校

市内大岡町なる横濱高等工業學校は、大正九年一月の設立に係り、震災前に在つては、市内及縣下に於ける唯一の直轄専門學校であつた。今次の激震では、煉瓦造の書庫及鐵筋ブロック構造の動力室が倒潰し、他の建物も半潰乃至大破し、破損を見なかつたのは講堂及印刷所だけであつた。當時學校は暑休中で、生徒は一名も居合はさなかつたけれども、授業開始も遠からぬので、校長以下職員、備人等二十餘名登校し、夫々準備中であつたが、何れも逸早く校庭に避難し、輕傷者一名を出だしたに過ぎなかつた。然るに震後數分にして、電氣化學科實驗室内の蓄電池及應用化學實驗室的藥品より發火したので、一同は直に消防に著手したが、水道が悉く斷水してゐたので寸效なく、已むなく、破壊消防に努むるの一方、辛うじて重要書類の幾部を校庭に搬出したに過ぎなかつた。其うち火は折柄の強風に勢を得て、見る／＼各建物に延焼し、遂に應用化學科實驗室事

務室・講堂・書庫・普通教室・生徒控所・機械工學科教室を灰燼となして、僅に機械工學科の一部即ち實驗工場の一隅・水力實驗室・職工控所等を半潰乃至破損の儘残存せしめたに止まり、全校の八分通りを擧げて烏有に歸せしめた事は、洵に遺憾の至りであつた。以上の損害見積額は、建物で約百五十萬圓、備品・標本・器械・圖書等で約四十五萬圓、計百九十五萬圓に達した。然し乍ら生徒職員より雇傭人に至るまで、一人も犠牲を出ださなかつたことは、實に不幸中の幸で、後の調査に據れば、京濱其の他に散居せる卒業生にも亦一人の死傷を見なかつたのであつた。職員中で類焼に遭つた者八名、倒潰に遭つた者十名を算した如きは、他と一列一齊の損害であつたのである。

僅に焼残つた校舎は、災後暫く罹災民の避難所として提供し、收容者日々二百人内外を算したが、二十日頃には全部退散した。

授業開始に就ては、困難の多大なるものがあつた。他校に併合されるとか、市外に移轉されるとかの聲もあつたが、教職員は一致協力、百難を排して焦土に蹈止まり、罹災市民と具さに苦痛を共にし、相響應して復興の第一聲を擧げんことを期し、九月十五日には既に市内の要所に木札を樹て、十一月一日を以て授業を開始すべき旨の宣傳を爲し、茲に背水の陣を布くに至つた。爾來努力奮闘の結果、計畫は順調に進捗し、應用化學

及電氣化學兩科の第三學年は、神奈川なる横濱含密研究所に於て、他の各學年は、本校焼残りの校舎及急造掘立バラックに於て、何れも豫定通り十一月一日を以て始業することを得た。此間、暑休歸省中の學生達は、交通機關の不便にも、物資缺乏の脅威にも怖れず、續々歸校して、焼跡の整理、授業の準備等に助力したことは、眞に愛校心の流露として感服に堪へない所である。其の後、本省よりは工費三十四萬五千を以て假校舎の建設に着手された。十二月中旬起工し、十三年三月上旬には略落成を告げ、更に各科の設備は十三年度三十萬圓の豫算を以て大體完整せらるることとなつた。尙、震災記念獎學資金六千圓の募集に着手し、之に依つて震災の爲に學資支給の困難を訴ふる學生に對し、補給の途を開くこととなつた。

第二節 中等學校

イ 縣立横濱第一中學校

一七六

九月一日の激震に因り、本校建物の中武道場圖書庫物置廊下等は全壊し、其他は悉く半壊の状態と爲つた。中に就き本館二箇所にて有つた高二丈餘の煉瓦作の防火壁が崩壊して、其前後に在つた校長室事務室圖書室教員室及び教室は大破を受けた。斯く被害は甚大なりしも、幸に火災を免かれたので、罹災者の本校に避難した者が夥しく、校舎内は勿論、校庭の隅々まで殺到し、一時は其數二萬に達した。是等避難者の中には、物理實驗室化學實驗室博物館標本室圖書閱覽室參考館等場所を擇ばず闖入したが、學校では之を如何とも制することが出来無かつた。震災で大破損を被つた器具器械・圖書標本類は是等闖入者の爲めに一層破損せられ、且つ亂雜にせられた。

災後間も無く、戸部警察署は校内に移轉し來て、管内の警戒救護に任じ、本縣救護班の一部及び日本赤十字社奈良縣支部の救護班も、本校を詰所として、罹災者の救護醫療に従事した。續いて市内の警衛架橋工事道路應急工事等の任務を帯びて來濱した水戸工兵第十四大隊の一部は、本校を宿舍としたので、戸部・西戸部方面の救護復舊に關する

事務の中心は、一時本校に萃つたかの如き觀が有つた。

十月中旬に至り、校内運動場に罹災者收容のバラック八棟を建設せられ、校舎内に假寓せる避難者を悉く之に收容し、戸部警察署も舊警察署跡に假舎を建てて復歸し、救護班も亦池之坂バラックに移轉したので、此頃から校舎の應急修繕は工事急速に行はれた。

震災當時は暑中休暇で有つたので、生徒はまだ登校し無かつたが、職員は毎日登校して、各其部署に就き、銳意一面は生徒及び生徒家庭の安否を探り、一面は器具器械圖書標本書類等の整理復舊に努め、只管授業開始の準備に没頭したので有つた。斯くて十月十五日に四五兩學年を召集して、組編成を行ひ、十八日より授業を開始し、二十五日に一・二・三學年を召集して、諸般の注意を與へ、十一月より授業を開始した。

職員の中には不幸にして住宅類焼の厄に遇ふた者十名ありしも、死傷一名も出さ無つた事は、幸甚と言ふ可きで有る。八百の生徒中には、不幸壓死者十五名を出し、住宅類焼倒壊等の厄に遇つた者約半數にも及んだ。

斯くして十三年三月迄には、校舎の應急修繕工事も竣り、十四年下旬には運動場のバラックも悉く撤退せられたので、同年四月には全く常態に復した譯である。今後十六

年度に至れば、講堂及び校舎の大部分を改築する豫定であるから、其時に成つて外觀が始めて整備する筈である。

□ 縣立横濱第二中學校

大震火災の當日は、學校はまだ休暇中であつたが爲め、生徒は登校せる者無く、只學校長及書記二名と、外に宿直員一名、小使二名のみ出勤して居たので、随つて學校内に於て死傷者一名も出さなかつた。加之、校舎、校具も、屋根瓦の墜落、四壁の龜裂決潰、其他の小破損と器械標本類に於て相當被害があつた位で濟んだ。御眞影の奉遷と化學藥品室の安全處置を爲し得たるは、最も幸福なることであつた。

避難者の本校に避難し來たのは、僅に百名内外で、夫等の人々も鮮人來襲の噂を耳にし、漸次他方面に引揚げた爲め、九月末日に於ては、一名の避難者の宿泊せし者もない様になつた。但し此間に於て學校保管の物品中、バケツ、瀬戸物類、窓掛、卓子掛等、衣食に必要なるものは皆避難者の使用に委せたのであつたが、學校所在地有志者が多數の銃器を借り出して返却せず、これが回收には多大の苦心を重ねたのであつた。

九月初旬から生徒並に父兄の來訪漸次多きを加へ、一時他府縣に轉學を願出づるも

の多く、且つ本校の授業開始の豫定を知らんとするもの相次ぐの狀況に鑑み、兎に角十月一日生徒召集、引續き授業開始の方針を確定し、職員及附近の生徒を召集して、右準備の作業に従事し、應急工事、瓦壁の整理、器械標本の整頓を爲し、雨天の際の防水工事は未だ完成せなかつたが、豫定の如く十月一日に生徒を召集した。然るに在籍生徒六百五十七名中、四百三十一名の出席を見、十一月一日に至りては、四百七十九名となり、更に十二月一日には五百二十三名に増加した。

此の大震火災の爲め、職員二十七名中全焼四、全潰一、半潰七、合計十二名、小使六名中全焼三、全潰一、計四名、在籍生徒六百五十七名中全焼百三十八名、全潰四十名、半潰七十八名、合計二百五十八名に及んだ。而して死傷者としては、生徒中死亡者十三名、傷者十七名、計三十名を出した。此に於て十一月十七日をトし、在校生の死亡者十三名と卒業生の死亡者六名の爲めに、本校講堂に於て追悼會を舉行し、避難者の家族をも招待した。

時の神奈川縣知事安河内麻吉氏は、本校を巡視すること二回、殊に本校が化學藥品室の處理の宜しきを得たる爲め、火災を免れ得、これによりて獨り本校生徒の爲め逸早く授業開始をなしたるのみならず、縣立第三中學校生徒をも收容して、授業に差支なからしめたるの功績を認められ、本校教諭須藤九郎に對し、表彰狀を授與せられた。

八 縣立横濱第三中學校

一八〇

本校は大正十二年四月七日を以て始めて開校せられ、大岡町なる縣立商工業實習學校の一部を假教室に充てられて居たので在つたが、八月に同建物が火災に罹り、止むを得ず第一中學校内に移つて居たのである。然るに九月一日の震災に依り、同校建物は大破に至りしを以て、同月二十八日に第二中學校内に移つて、十月一日から第二學期の授業開始したのであるが、大正十三年十二月に本校舎建築が落成したので、直に之に移轉した。

二 神奈川縣女子師範學校 神奈川縣立高等女學校

九月一日大震と同時に、本校は本館理化室を除き、全部崩潰し、附屬小學校は焼失した。職員家屋の全焼は二十四、全潰は十四、半潰は九の多數に及び、難を免かれ得たものは、僅に郊外在住の者のみで、生徒の家屋の全焼せし者三百餘戸、壓死者二十四名に及んだ。初め大震の起るや、校長は早速學校に駆付け、數名の教諭と共に餘震を犯して本館に入り、扉を破つて、御眞影の箱を取出し、一先づ中庭に安置し、次いで重要書類を取出し、

御眞影は懸て淺間山下の輕井澤なる結城教諭の宅に奉移した。三日に教諭二名壓死の事が知れた。六日は第二學期始業の日に相當するので、本校附屬の職員十數名、藤棚の下にて臨時職員會議を開いた。十四日に理化室は終に倒潰した。生徒召集の宣傳を爲した結果、十月一日、第一回の召集には、女子師範・高女生合せて四百六十名應じ來つたので、各學級分擔して、震災調査取調を爲す事とした。其後尙二回の召集を經、假校舍が出來たので、高女は十一月十二日、女子は同月十九日、各開校式を舉げた。

(同校報告及花たらばな震災記念號)

ホ 神奈川縣立工業學校

九月一日の大震と同時に、生徒食堂は倒壊し、既に食事に就いて居た生徒十四五名は下敷となつたのを、心付いた者が四五人駆付けて、砂煙の中から救ひ出した。次いで物理室から出火したのを、大勢駆け付けて、大事に至らず消し止めた。一體校舍は其初水田を埋め、盛土をして、校舍を建てたので在つたが、倒潰校舍の少なかつたのは、一の奇蹟と云つても良い位である。損害の程度を云へば、圖案部及び中の教室二棟は使用に堪えぬ大破損である。本館は事務部・當直室・玄關・第一教室に掛けて、最も甚しく、今一寸で

神奈川縣女子師範學校

神奈川縣立高等女學校

神奈川縣立工業學校

一八一

土臺から迂り落つる處であつた。玄關のセメントポーチには、幅五六寸もある龜裂が二三筋出来た。この邊一體に地盤が低下したらしく、階段は地中に減込んだ形で崩れ、庇の柱は四五寸も宙に浮上つて居る有様である。又長い廊下も大蛇の轉頭廻るに似て、教室とは一尺以上も裂切れて弓形に垂れ下り、窓全部は一帶に内側に二三十度ほど倒れ、所々天井の落かゝつたのが發條の様に彎曲して居た。職員室、事務室、其他の書棚、机は大方轉倒し、書類、書籍の散亂せるも物凄く加ふるに餘震に窓ガラスが破れ落ちた。門柱は一本轉倒し、敷地を周つて下水は悉く埋没れて、道路一面に濁水が膝を没する程度に瀾満して居た。

仕上工場は幸にして機械類の損害なかつたが、地盤は機械の基礎より三四寸も低下したのが多く、柱は孰れも皆二三寸も梁より抜け出して居た。鍛冶工々場は火床の煉瓦積悉く振落され、蒸汽釜の蒸汽管は捻ぢ切られ、鑄造工場との間仕切に大穴が開いた。鑄造工場の屋外のキウボラは、建築科の渡廊下の屋根を打破つて倒れた。眞鍮爐のコンクリート煙突も、屋根を破つて十五度許傾斜した。中央の起重機は翌年一月十五日の再震に、終に轉覆した。原型工場の隣接タンクは、根元から傾斜し、蓋は二間餘附近に飛んで居た。

變事突發と同時に寮生六十餘名夫れ／＼手分して、急救藥品携帯、學校附近住人一帶の慰問に努め、之が救護に當り、不逞鮮人襲來の報一度傳はるや、直に武裝して徹霄校舍内外の警備に寢食を忘れて盡した。斯くして五六日目に陸續と軍隊が到着し、本校は炊事班の駐屯する所と爲り、一個小隊の警備隊が配置せられて、附近一帶の警戒に當り、次いで甲府其他の聯隊區から召集を受けた在郷軍人數百名、寄宿舎を始め教室工場に假泊して、燒跡の整理に奔走して呉れたので、十日に寮生は漸くに歸省した。

(神工震災記念號)

〽 縣立商工實習學校

當校は大正九年三月設立認可せられ、校地約三千六百坪にして、校舍建坪約千八百坪を有したのであるが、大正十二年八月十六日午前五時、二階建校舎二棟を燒失し、ここに收納してあつた理化學器械を始め、教具の全部及圖書の大部を烏有に歸せしめ、僅に工場一棟、倉庫二棟、ポイラー室一棟、便所一棟が災を免かれたのみであつた。然るに猶又十數日にして、今回の大震災に因り、殘存校舍四百二十二坪は、殆んど全部倒潰した。但し機械器具類の一部は、半潰舎ポイラー室に搬入收納し、散逸竝に汚損を避け得た。震

災當日は、職員一同出勤して、第二學期授業準備執務中であつたが、すは地震よとの叫聲に驚き、一同校庭に飛出し、些々たる負傷もなくして脱出するを得た。其後避難者十名、鑄工場、倉庫、校庭に居住して居たが、十月末引揚た。九月十日には授業開始の準備、又は生徒召集、家庭訪問等をなし、十一月一日より縣立横濱第一中學校に生徒を召集し、始業式を行ふた。震災前には四百七十九名であつた在學生徒が、今回は四百四十九名に減つた。而して翌日から残存校舎、物置、ボイラー室、石鹼の一部、鍛工場等を教室に充て、猶不足の分は野外授業を爲した。其後應急建築物七十六坪のバラックが竣工したので、十一月十九日から二部教授を開始した。十二月から建築中の假校舎が、翌十三年一月十六日完成したので、漸く平常の授業をなすに至つた。然し設備尙不足で、實驗實習をなすに至らなかつた。年度も更まり、第五學年を生じ、生徒總數五百四十六名と爲り、假工場も竣成し、教室共總建坪千八百八十三坪と爲り、先づザツト教授に差支へ無く爲つた譯である。(神奈川縣立商工實習學校報告)

第三節 市立諸學校

第一項 横濱市立商業學校

九月一日は同校の昇格問題で、實行委員が活動する最終の日であつたので、私は唯一人學校に来て、委員に送る通知狀を謄寫版で刷つてゐた。そこへ私の次男の眞男がやつて来て、手傳つてくれたので、豫定より早く出來上つた。で、私は――昇格運動のことに就いて、若尾氏等に電話をかけてから、家に歸つた。もう少し遅くゐたなら、私は倒潰家屋の下敷にされるところでつた。歸ると直ぐ、電話だと小使が迎へに來たので、玄關まで出ると、あの恐ろしい大地震が起つたのである。何より先に學校のことが心配になつたので、學校の方を見ると、大空には砂煙が上つてゐたので、學校の姿は見えなかつた。そこで、私は逸散に駆け出して、學校へ行つて見ると、千三百六十坪の建物の中、僅に雨天體操場八十坪、柔道場四十坪、記念圖書館二階建四十坪、倉庫四棟を残して、他は全部無残にも倒潰してゐた。その他備へつけの器物等は、大破壊して、使用に堪へる物は僅かであつた。

私は火を恐れて、第一に 御眞影をお出し申上げなければならぬと思つたので、直

に破壊した校長室の屋根に飛び上つた。幸に屋根に漸く這入れる位の穴があいてゐたので、何より好都合であつた。そこへ訓導淺野峰次郎君も駆けつけて来た。書記及び小使五名も手傳ひに来た。

「さあ、這入れ」と言つたが、誰一人入る者がないので、私が先に入つた。淺野訓導に續いて、皆入つて来た。奉安所の扉を打ち破つて、中から無事安全に御眞影を取り出すことが出来た。外へ出て見ると、避難民が帽子を盗んで行つたのは驚いた。忽のうち、避難民が約三千人餘り集合して来た。その中には負傷者も澤山あつたので、手當をしてやりたかつたが、御眞影を安全地に奉遷することに焦慮してゐたので、直に美澤校長の宅に走つて、同宅に遷し奉つた。

斯くて再び學校に戻つて、避難者の手當にかかつた。倒潰家屋の中から藥品を取り出し、窓掛を細帶の代りにして、負傷者の手當にかかつた。ところが負傷者たちは、私を醫者だと間違へて、引つぱり紙鷲のありさまであつた。氣絶してゐる者などには、つねつてやれと言つて、刺戟を與へて蘇生させたものもあつた。手當をしてゐる傍から、避難民が来て、醫療器を掠奪して行くのには呆氣に取られた。尙倒潰家屋の屋根板、木材、バラック材料になるものを始め、疊、寝具、机等を掠奪された。掠奪が激しかつたから、重

要書類は全部一日に宅へ持ち歸つた。二日は書類の整理と、掘出しに従事した。職員並に生徒の安否を調べ、救済の方法を講じた。

來ないやうにと止めたが、校長は責任感の強い人だから、老體にも構はず、五日に學校に來た。校長が來たので、五日は渡邊市長を訪ねて、學校の善後策に就いて、種々相談し、一日も早く復興させるやうに意見を述べて歸つた。

學校のことを餘り心配したために、校長は十一日の午後から病氣になられた。人を輕井澤にやつて漸く氷を買つて來た。醫師はないので、困つてゐる時、岡山縣から紡績會社の救護班が來たので、手當を受けたが、効なく十六日、四十二年の間學校のために身を捧げた校長は、傷ましくも永眠された。葬儀は九月本校假教室に於て、校葬で執行された。

校長は腦溢血で死んだのであるが、人事不省になつてからも、在外卒業生が多額の金を送つて來るから、それで學校を建てよと言つてゐた。瀕死の状態に在つても、學校のことは、校長の頭から去らなかつたのである。

私は教員、職員等を集めて、軍司令官が倒れたからつて、意氣を消沈しては駄目であると、鼓舞督勵して、十月半までには、授業が出来るやうにするから、諸君は十分活動してく

れろと頼んだ。

一八八

先づ第一に、工兵五大隊に教室を建ててくれと頼んだところが、餘力がないから駄目だといふのを、無理に頼んで、十月二日より著手し、同月十日バラック教室一棟の完成を見た。工事の材料は總て市の建築課から供給された。人夫は毎日市役所から供給された。大工若干名は職員督勵の下に、總ての掃除並に工兵工事の助手に服せしめ、大工は専ら生徒用机、その他教室備へつけの教具の新調と、修繕とをさせた。

豫定の通り十月十五日から、七教室で授業を開始した。當時在籍生徒六百八十五名の内、登校した生徒は四百三十名であつた。而して全教室は震災前四千坪であつたのが、千六百に減じたので、生徒を入れるのに、すいぶん苦心した。二十六坪五合の一教室に、一年生を百二十人入れ、上級生の方は八十人宛、工兵バラックと、柔道場に入れたが、狭いので、教壇の傍に生徒があるといふ始末であつた。登校した生徒は四年生と、五年生が一番多かつた。尙、避難民が倒潰家の中へ掠奪に入つて、薬品瓶をひつくりかへした爲めに、火を發したが、淺野訓導と、小使とが協力して砂をふりかけて消しとめた。

(教頭唯野眞琴氏談)

第一項 各 小 學 校

震災前の學校數は、三十六校であつた。その内十九校は全焼し、十五校は倒潰した。残つた二校だけは、大修繕さへすれば使用出來た。教室數は震災以前に七百九十九室あつた。而し震災後僅の修繕で、直に使用し得るものは三十九室に過ぎなかつた。しかし幸にも六箇の雨天體操場が、少しの被害もなかつたので、之を區劃して、普通教育に使用することにした。且つ其他大修繕によつて、使用出來るものは百二十六で、兩方を合すれば、都合百六十五室を使用し得ることになつた。

震災前の教員數は、九百九十七名であつた。内死亡十五名、負傷者八十九名、行衛不明七名、住宅を焼失せるものが四百六十四名、全潰せるものが百九十六名、半潰せるものが三百四十四名といふ被害であつた。

震災前の兒童數は、五萬四千三百九十六人であつた。このうち横死したものが七百九十五人、負傷者が八百九十七名、行衛不明が百二十一名であつた。幸に當日は第二期始業式の當日で、生徒が歸つた後だったので、教師や生徒の死傷が少なかつたのである。

斯の如く学校の被害も大きく、教員の家は六百五十五戸焼失、倒潰したのである。故に教員の數九百九十七名の中、六百六十名が著のみ著のまゝの慘狀に落ちたのであつた。これ等に對する應急策は全く困難であつたが、此際校長並に教員等は協議の結果、取敢へず被害調査救濟事務に従事することの方策を樹て、教育課はその中心となつて、活動を開始したのであつた。交通機關の絶滅した時に際し、よく地方區域の事情に精通した教育家が、實際調査に當つたことは、當を得た方法であつたので、事務の敏速と、利便とを得た。其調査事項中、應急處理の基礎とすべき有益な資料を二十餘種も得ることが出來たが、最も有益なものは九月十八、十九、二十日の三日に亘つて行つた人口並に學齡兒童の調査であつた。

學校の善後策を三つに分けて述べると、前記の殘存教室を利用し、一刻も早く授業を開始する準備は、第一の應急策である。それ故に殘存三十九教室を修理し、雨天體操場を區別して、三十八教室を設け、尙急設バラック七十九室を新造し、二部三部の教授により、國語、算術等主要な學科を教授することとした。漸く十月十五日に決行したが、併し木材の供給、工事の進行が思ふやうにならなかつた爲め、教室數は豫定の如く出來なかつた。しかし兎に角十九校の開校をすることが出來た。次に第二の計畫は、各方面の

兒童數に應じて、所要のバラックを建設して、數年間を支持することが出來るやうに、七十九の新バラックと、修繕せる教室二百四十九の外に、百七十四室を築造して、合計五百二室を得た。雨天體操場は共同的に使用すべき特別教室等に専用した。尙ほ兒童數の増加地方には、必要に應じて増設せんとする方針であるが、材料が不足の爲め、其完成は遅いので、これが缺陷を補はん爲めに、罹災民のバラックを使用したものであり、又震災事務局から天幕を借用などして、父兄の熱心を無にしないやうに、兒童には勉強させるやうに、極力努めた次第であるが、幸に此種の計畫が良き結果を得た。又教科書を十分に得たのは、震災後直に文部省が各十都市に向つて教科書の寄附を依頼してくれたお蔭と、教員連が亦熱心寄附を募つた努力の賜である。これに依つて三十六校を開校することが出來たのである。十三年十二月は二萬九千餘の兒童を算するに至つた。第三期の計畫は所謂都市計畫に基いて建設すべき理想案で、其の復興案である。この理想案こそ、最も慎重なる計畫を要することはいふまでもない。

(大正十四年三月發行震災と教育)

一 横濱尋常小學校

一九二

その日は始業式當日であつたので、例の如く午前十一時から職員會を兼ねて、會食を二階の講堂で開いた。十一時五十分頃には食事も済んで、茶を啜りながら種々の雑談に耽つて居た。其時突如大地を覆へすやうな大激動が起つた。百餘坪の大講堂は今にも破壊しさうに思はれたが、一同は逃げ出す餘裕もなく、多くの者は卓子の下に這ひ込んで、運を天に任してゐた。併し幸に事無く、第一震は静まつた。一同は階段を駆け下つて、職員室に行つて見ると、本箱や衝立や、其他總ての物は倒れ、棚に載せてあつたものは皆落ちてゐた。壁は碎けて砂煙が、四邊を鎖してゐた。間もなく火が本町方面に起つたので、すは一大事と教員小使一同は協力して、御眞影初め、重要品を運動場の砂地附近へ運び出した。砂地は運動場の西北隅にあつて、校舎かち六十間離れ、北は海岸に近く、東西は裁判所と、蠶絲俱樂部との建物があつた。空地は可なり廣いので、安全な地として、火災の際には此處に、御眞影を御移し申す處と、平素から定めてあつたのである。教員小使等は我を忘れて、懸命に働いたので、約十分もして、大抵のものはもう出せた頃、火は早くも雨天體操場に延焼した。一同驚いて運動場へ出て見れば、石塀は倒

れ、大きな地割れには、水が出てゐる。隣の裁判所は全部崩壊してゐた。四邊は悲鳴を擧げて逃げ迷ふ人々で混亂を極めてゐた。二階緑ペンキ塗の校舎は、少しも破壊はしなかつたが見る内に講堂の一角露臺の邊から火煙は起つて、忽ち校舎は火に包まれてしまつた。これ等の凄惨な光景を眺めつゝ、學校と一町程を離れてゐる所へ、重い荷物を持つて、三四回も往き來をして、職員使丁、殊に女までが一人残らず、懸命な活動をしてくれたことは、實に感すべきことである。

火勢は一層加つて、愈、危険は迫つたので、御眞影は足立訓導が捧持し、二三職員は重要品を携へて、岸壁さして避難した。一二時間後には、再び歸つて來られようと、吞氣なことを考へて、大部分の重要品を置いて行つたので、いふまでもなく焼失してしまつた。校長以下十四名の職員使丁は岸壁に逃げて、大阪商船バリー丸に救助された。足立訓導以下四名の職員使丁は、運動場裏手の入江、其の他に避難して、とにかく一同無事なるを得た。

商船内の職員使丁中、男子は二日夕景、本牧、神奈川方面へ二人上陸したので、初めとして、漸次上陸する様にしたが、船内に宣傳された陸上の不安と危険とは、事實以上であつた。校長は家族の安否も全く分らなかつたが、頭上にかゝつて居る重大責任は、御眞

影を安らかに安置することと、女子職員とを安全に保護することに力を盡した。

斯くて漸く七日朝、校長は御眞影を捧持し、女子職員の多數を伴つて上陸、海軍下士、水兵保護の下に、御眞影を無事に假市役所に安置することが出来た。

尙、當時大阪商船ロンドン丸の船長神足竹次郎氏と、同商船の船長今井三二氏とが、御眞影の擁護に限りなき誠意を捧げられたることは、吾々の深く感謝するところである。

二 老松尋常小學校

始業式や職員會が終つて、十一時頃には、職員室に自分の外、鷗養、大塚、大矢、伊東の五人と、別に幼稚園階下室に辻、西城、岩田、大森の四人の教員が残つて居た。地震と同時に、職員室のものは直ちに運動場に出た。見る間に運動場は龜裂を生じて、大波の様に揺れた。茂木邸との境の所にある煉瓦の大土藏が物凄い音を立てて、一たまりもなく崩潰した。急に南の烈風が砂塵を揚げて吹きつける。眼も口も明いて居られない。市中を見下すと、物凄い音を立て、家屋が崩潰してゐる。黒い砂煙が全市を蔽ふて、天忽ち晦暝、今思ふさへ恐ろしい光景であつた。第一震が終ると、幼稚園室にゐた四人が續い

て出て来て、互に無事を喜んだ。幼稚園室では壁が落ち、重戸棚が飛び、床は波の様に動いて、立つことが出来なかつたので、四人とも突伏して、机の脚をしつかりと握つて居て、激震が少し鎮まつた時、やつと逃げ出して來たのであつた。二階の藥品戸棚が倒れたので、四人とも硫酸を浴びて居た。

風は益、吹きつので、早くも宮川町と、野毛二丁目に火の手が上つてゐるので、萬一を慮つて、御眞影を奉遷すべく、大塚訓導は屋内へとつて返した。屋内は混亂して足の入れ場がなかつたが、大塚訓導は危険を冒して、御眞影を持ち出した。伊東訓導が責任を以て、安全の地に奉遷すると云ふので、鈴木使丁を伴はし、西戸部の實家に避難させた。

建物は、小使室が崩潰したのみで、其の他は瓦一つ落ちなかつた。而し舎内は壁が落ち、戸障子や器具が散亂して、到底這入ることが出来なかつた。只僅かに玄關から運動場に廊下が通れた。取敢へず使丁に爐を消さした。校門に沿ふた石垣と土堤は、全部崩れて居た。小使室の倒れたのは此の爲である。

學校は高臺でもあり、道路大邸宅の庭で圍まれてゐて、殊に樹木が多いので、火は大丈夫と見たので、職員は一先づ自宅の安否を確めて、再び學校に集合する事にした。

午後一時半頃、木村邸の崖を攀ち登つて、避難者が續々校庭に入り込む。然し半僧坊の方面から、火が市長公舎の前通りを筒の様にして、熱い煙と火の子を吹きつけるので、熱さに耐へられず、遂に學校を出た。前の平沼邸は避難者で一杯であつた。二時頃になつて、西校舎の屋根が一時に燃え上つた。この附近で第一に燃えたのは學校であつた。

野澤の森から水道山に出て見ると、中村邸や増田邸が盛んに焼けて居るが、市長公舎はまだ安全であつた。四時頃學校の様子を見に戻ると、校舎は全く焼け落ちて居た。學校の焼跡に来て見た時、校舎は跡方もなく、敷地は焦土と化してゐた。残るものは只肋木と鐵棒だけであつた。焼け残りの掲示板をさがして、假事務所を辻訓導の宅に置くことを揭示して引上げた。

三 南吉田第二尋常小學校

此の日、我が校は授業も濟み、仕事の了へた者は、任意に退散した。後には二階に二三の職員と、事務室には校長と、内田尾形の三人がゐた。折しも大地震が襲來したので、一同は驚いて、入口迄轉び出し、柱に絶つてゐた。校舎は二階の一室が落ちただけで、幸ひ

其處には誰も居なかつたので、校長以下二階に居た人は、皆無事に逃れた。校長は内田尾形の兩訓導と協力して、御眞影を運動場に奉遷した。内田訓導は使丁と共に劇薬の始末に掛つたが、戸が明かないのでどうすることも出来なかつた。やがて、火の手はひろがり、危険は愈、迫つて來たので、校長は、御眞影を小林前田山口市川井上關の各職員に警衛させて、石川の山に避難した。内田訓導は學校に留つて、警戒をさせられた。時は午後一時、分校の運動場は安全地帯と見られて、避難民や荷物で塞つた。併し火の手は愈、接近し、學校は所詮助かるべき見込みがないので、内田訓導は校園に重要書類を埋めんとしたが、鍬がないので、止むなく運動場に立ち退いた。眞金町方面から風に逆つて來た火焰は、南部から來た火と合して、學校を包圍した。南の校舎は忽ち燃え始め、使丁室に延焼した。應接室の一角は黒煙を擧げて、棟さへ認められなくなつた。時は午後二時。内田訓導は中村使丁を督して、學籍簿丈け携へ、中村町の崖に逃れた。そして、兒童の迷へるものを導いて頂上に登らした。御眞影は校長及職員に衛られて、久良岐郡日下村の校長宅に奉遷せられた。

四 日枝第一尋常小學校

一九八

當日は午前八時、第二學期の始業式舉行の後、各教室に於て暑中休業中の課題成績品の取纏め、第二學期開始に對する諸般の訓話をして兒童を退散せしめた。職員は事務の整理を終へて、十一時半頃迄にそれ〴〵退出した。

大地震が襲來すると同時に、校舎は大音響と共に全部倒壊した。當直員は身を以て辛うじて校庭にのがれ、四方を見るに、人家は倒壊し、火煙の擧るのを見受けたので、危険を冒して倒潰した校舎に潜り込んで、漸く奉安所より御眞影をとり出して、お三の宮に避難した。しかしここも又危険になつたので、堀内町加藤訓導住宅の一室に遷し奉つた。爾後六日間、職員交互に護衛の任に當つた。當局からの命至るに及んで市役所へ奉遷した。

五 南太田尋常高等小學校

午前に第二學期の始業式を終へ、職員は休暇中の整理をしてから、晝食を認めやうとする刹那、大震動が起つて、書棚は倒れ、机は轉び、戸外に逃げやうとしても、動搖の激しさ

に歩行することは出来なかつた。その瞬間二年前新築した堅牢の大校舎は、雨天體操場丈けを残して、他は悉く南面の道路へ倒潰した。階下に在つた十數名の職員使丁の内五名は、逃げる暇もなく、打ち伏せられて、柱に敷かれ、硝子戸に傷けられなどしたが、壓死したもの一人もなかつた。階上には執務中の數名の職員は、生命を賭して階段を飛び下りたが、出口の扉が堅く鎖されて、動かないので、全く絶對絶命であつたが、再び來た震動で、戸が偶然に開いたので、一同は戸外に飛び出す事が出來た。又不思議に助かつた一女教師があつた。その人は下駄置場で梁の下敷となつたが、梁が石段の爲めに支へられて、空隙が出來たので、微傷も受けずに逃げる事が出來た。當校兒童千三百餘名の内、只一人自宅で焼死した。職員中鵜飼訓導が自宅で壓死を遂げた丈けで、他には一人も死者を出さなかつたのは、幸であつた。

當校の職員は、此の恐るべき生死の間に在つて、各自重要書類の保管、殘存校具の整理に克く意を致し、一方に於ては、互に其の家族を慰め合つて、更に兒童の安否を氣遣つて、それ〴〵手配を怠らなかつたことなどは、良く行届いてゐた。同校附近には、一も避難すべき場所がなく、唯僅かに當校の殘存した雨天體操場だけが、唯一の避難所であつたが、極度に恐怖心かられた避難民は、此の屋内に入らうとする者が一名もなかつたの

である。そこで同校々長は、市民の健康を害してはならぬと考へ、懇ろに諭して、校舎を開放し、收容に力を竭した結果、此所に三十八家族二百餘名の避難民を收容したのである。更に部下職員、使丁を激勵して、極力、教具、校具の整理、残存品の保管等に努力した。病氣の避難民は特に手厚い世話をした。

九月五日、初めて報知新聞の號外を見て、内外の情勢、各地からの同情、救護の狀況等が判つたので、それ等のことを、ことわけて話したので、只今まで恐怖と不安とに極度に昂奮して居た人の心も、漸く安らかにされたのであつた。それ以來、校長は、復興その他人心を勵ます講演をして、人々の覺醒を喚起した。配給品の分配にも、心力を凝らしたので、非常に秩序のある自治的な生活をするやうになつたのである。

斯やうに、非常の場合に採つた周到なる注意と、精神的に人心を鼓舞した事の結果は、避難民の衛生状態を比較的良好にし、唯一名の腸窒扶斯患者があつた丈で、他に傳染することなく全治した。勿論幾分健康を害したことは言ふまでもなかつた。現に校長自身も體重七百目を減じたのであるから、部下職員の疲労衰弱もひどかつたのであらうと思ふ。其後は唯だ今後如何にして復興を観るべきかが、念頭から去らなかつたのであつた。

六 平樂尋常小學校

第一震で、凹字形の大校舎は、右側の部分を殘しただけで、平家建の使丁室と、其他の二階、建教室の全部とは倒潰した。直ぐ近くの自宅にゐた私が駆けつけて見ると、首席の輕部雅太郎君と當直の秋山陽雄君とが運動場の一部に、御眞影を安置してゐた。一度歸つた輕部君は、豫て病氣で近所に住んでゐる友達を見舞ふべく、使丁室から裏木戸へ出るところで地震に遇つた。そして校舎が倒潰したのを知り、生命がけで廊下に飛び込み、御眞影奉安室に向つたが、倒潰した物が四邊を塞いでゐて、進むことは困難であつた。然かも室内は一面の土煙で、息もつけない苦しみの中に、夢中になつて探し廻はると、外れ落ちてゐた、御眞影棚に探り當つたので、そのまゝ箱を抱へて、僅の隙間から這ひ出して、運動場に出たのである。同君が破壊した校舎の中に潜り込む時は、第二震の眞最中だつたので、君の勇敢決死の振舞は、眞に賞すべきものであつた。

次に六人の使丁の一人も見えなかつたので、壓死したものと思はれたが、皆助つて附近の空地に避難してゐた。其内に火は共潰れになつた隣接の民家から發火し、忽ち校舎に燃え移つて、間もなく燒失した。鎮火後、恐れ多けれども取敢へず、御眞影は危く

類焼を免れた自宅に奉遷する事として、輕部・秋山兩君の勞を謝して、歸宅して貰つた。

七 江吾田尋常小學校

大地震のため、屋根瓦は殆んど剝げ落ちた。第三號から第五號までの教室の柱が折れ、階上の二室は危険であつた。運動場には龜裂が出来た。當日居残つたのは校長井上節・井上永・松本喜・金子訓導などで、兒童は一人も居なかつた。使丁は井上才次郎・中村角藏・清水松五郎・井上アサ・中塚チヨ等で、皆掃除中であつた。中塚チヨは壁の下敷とならうとしたが、漸く机の下にのがれ、僅に打撲傷を負つただけで助つた。井上才次郎は使丁室の炭火を消し、又職員室の火鉢が倒れて、大事に至らんとしたのを消し止めた。校長は居残つた前記訓導と使丁等と協力して、火の元を警戒して、萬全を期した。

御眞影奉安所には、まだ 御眞影の御下附がなく、勅語の謄本もなかつたが、綴帳と御眞影奉安所に要する額縁を藏せる函があつたので、之れを検べた所、異狀がなかつたので、再び奉安所に納めた。校舎の北側はだん／＼傾いたので、職員室・宿直室・第一號教室等の階下の五室だけは、稍、安全であつたが、階上は危険であつた。職員室には、重要書類・圖書重要備品を收め、鍵をかけて、絶対に他人の出入を禁じ、他の

備品も同様保管の手配をした。使丁室は危険であつたから、應接室を充てた。そして宿直室にゐた教員と聯絡を取らして、非常時の警戒をさせた。且つ避難者の慰撫監督に當らせた。宿直日直に關しては、緊急を必要と思つて、即日訓導松本次郎・使丁井上才次郎兩名へ委嘱して、混亂に乗ずる暴漢の襲來を警戒した。

本校に避難したものは、午後六時までに約百二十名に達した。當日は多くは運動場で雨露を凌いだ、後には屋内に入つた。依つて校内に自警班を組織して警備させたが、蠟燭の缺乏には困難した。

校具室に整理した理化學用藥品類は、全部倒れて破潰したので、黄色燐・アルコール・鹽酸・加里・強酸類の發火し易い藥品三十五種を、備品戸棚中から取り出して、一箱に納め、更に之を運動場の一隅の砂中に二尺餘の穴を掘つて埋没した。

居残つてゐた職員は、午後二時頃、夫々歸宅したが、午後三時頃になつて、近隣に一二箇所、火を發したが、本校舎は安全であつた。

八 戸部尋常高等小學校

九月一日、第二學期の始業式を擧げ、二時間の授業を終へて、兒童は全部歸つた。職員

も職員會の後翌日の準備をすまして、職員の過半も歸路に就いた。時將に十二時に垂んとするに當り、突如大音響と共に大地は激震し、校舍は恰も怒濤の中に翻弄せらるゝ小舟の如く倒潰せんとしては、又立直り、屋根瓦は雪崩をなして落ち、其の音響さながら地球の破滅、現世の終局かと思はれて、當時の物凄じいことは、實に名狀しがたかつた。職員は倉皇校庭へ飛出した。附近の避難者は忽に校庭へ集つて來た。僅かに九死を免がれて來たものもあつた。

校長は最先に御眞影の奉遷を計り、強震の眞最中、御眞影室に駆け入つた。逸早く御眞影と御勅語を捧持して、運動場へ出で、三四の訓導をして、奉遷の任に當らしめ、自ら職員を董督し、大聲を擧げて「御眞影は既に安全の地に奉遷し、扈從の職員死を以て護衛することになつて居る。最早安心である。残る所は重要書類の搬出である。火の用心をせよ。理科の藥品に注意せよ。學校から火を出しては責任上濟まないぞ。夫れ之を出せ。あれを運べ。」と激勵し、續々起るすさまじい震動の中で、用意周到に指揮するのであつた。當時居残つた職員と、使丁とは、實に一身一家を忘れて、最善の努力を盡したのである。重要な書類や、器具機械は、山の如く校庭に積まれた。之れに加ふる避難者の運べる衣類、其他のものも、校庭に充ち／＼して、足の踏み場もなかつた。職

員使丁は飛火を防ぎつゝ、庭隅の器械體操場の下なる砂場を掘つて、重要書類を埋め、之れが焼失を免がれんことを計つた。その時一訓導が大急ぎで走つて來て、「隣家の火は既に南校舎屋上の一角に延焼して來た。火勢は激しく、最早や防ぐに道はない。一刻も早く此處を逃れなければ、逃路が杜絶する。」と報告したので、見上ぐれば、南校舎は一面に火となつてゐた。時に一警官が馳せ來つて、「危険だ、早く逃げないと活路がなくなる。」と急き立つた。一同は最早是れまでと斷念し、心を残して離散した。時に午後三時頃であつた。猛火は東西南の三方から迫つて來た。嗚呼午前までは二千二百有餘の兒童、共に學び共に遊んだこの楽しき學び家も、今や猛火の爲に灰燼となつたのである。

横濱全市は忽ち廢墟と化して、全く一毫を止めざるものが多かつた。然るに我校では、職員の機智と活動とに依つて、砂場に埋めたる學籍簿の大部、訓練簿、沿革誌、獎勵旗、青年修養團旗、其他の數種は幸に無事なるを得た。是等は當時残つてゐた職員の犠牲的精神と、能く職責を重んじ、其本分を盡されたるによるので、永く感謝に値するのである。尙本校兒二千二百有餘人中、壓死せる者男女二十四人、父を喪へる者、家族を喪つた者、總計百十名であつた。

九 西戸部尋常小學校

九月一日は第二學期の始業式當日であつたので、児童の歸つた後で職員會を開いて、終つたのが十一時五十分であつた。それから間もなく、大地震が起つた。けれども我々は建築の基礎工事がよかつたので、硝子一枚こわれなかつた。教室はそれが爲めに、明日から大掃除をしようなどと呑氣な事を考へながら、運動場に出て、四邊の慘狀に初めて驚いた。職員等は直に重要書類を校庭に持出し、御眞影は職員三名で逸早く神中校庭に御遷し申し上げ、萬遺算無きを期した。

校長として當日取りたる處置を述べ、火は午後零時半頃學校の四方に起つたので、職員使丁共力、重要書類とピアノとを地下に埋めやうとした。警察からの注意には「西平沼瓦斯タンク爆發の憂あり」との事で、家族ある男教員は歸宅せしめ、女教員は全部神中に避難せしめた。

魔の火は三時十五分、校舎の北西から炎焼し始め、四時全く焼きつくされてしまつた。折角備へたピアノは無論のこと、土中の重要書類も、何一つ残らず影を失つてしまつた。而し、御眞影の安泰は何よりの幸とよろこびであつた。又職員の一人も微傷だも負

はなかつたことは何よりの欣びであつた。

一〇 西平沼尋常高等小學校

例により九月一日午前七時三十分、児童は各教室に入つて、始業式を行ひ、同九時退散、十一時には職員も大部分退出したのであつた。十一時五十八分、大震動大鳴動が一時に起つた。職員一同は運動場や、街路に夢中で逃げ出したのであつた。この時早く運動場は一面の泥海と化してゐた。引續く大震動にタークレーはビチ／＼と音して破れる。裂れ目からは盛に泥水を噴出する。日除の鐵骨は形なしに曲りくねつて、鐵柱はボキ／＼と折れた。隣の瓦斯タンクからは凄い唸りを揚げて、黒煙を捲き起した。唸は瓦斯局で應急タンクの瓦斯をぬいたため、黒煙は附近のコールターの燃えたためだと、後になつて判つた。その時校舎は倒れなかつたが、柱はゆがみ壁は落ちた。

御眞影は荒波、佐藤、遠藤、角田、石塚、訓導は挺身、御眞影室に飛び込んだ。校長が玄關に駆けつけた時、御眞影は安全に玄關から奉遷された。同時に猛烈な第二震は來た。轟然たる大音響とともに、向校舎は倒壊したのである。流石に堅固に築かれた、御眞影室も倒れたのであつた。校長は上記五名の職員と協力して、倒壊校舎を探し、人

なきを確め得たので、全員 御眞影を奉じて、校舎前の安全地帯に避難した。それから震動の合間／＼に、辛うじて学籍簿及重要書類を取り出した。うねりの如くに大地は揺いて、熄みさうにもない。其の中を只一人玄關から飛び込む者があつた。暫くして出て来たのを見れば、志村訓導であつた。彼は夢中で下宿から駆けつけて、御眞影を出すためにとび込んだものと分つた。互に無事を喜んで、見ると志村君は箸一膳を腰にさして居た。

折から「瓦斯タンク爆発せんとす。市民は早く立ち退くべし」との報しきりに来る。火は八方に起つた。近くは平沼町數箇所^所に火の手揚り、岡野町は今火焰に包まれる。戸部西戸部方面も盛んに延焼しつゝある。一同は荒波訓導の家の危険に迫れるを思ひ、すゝめて歸らせたのであつた。

これより五人の職員は、逃路を東海道線路に取るべく相談を定め、御眞影を奉じ、学籍簿類を負ひ、線路に避難した。線路は各方面の避難者を以て充滿されて居る。各方面の火は益々猛威を逞うし、一同は全く火焰の包圍中に陥つたのであつた。斯る中に又もや流言あり、「瓦斯タンクは今將に破裂せんとす」と。かくなりては、一刻後るれば逃路のなくなる恐れがある。否生命も心許ないのである。更に相談の結果、角田・佐藤・

遠藤・石塚・志村訓導は「吾等死を以て 御眞影を守護し、安全の地に避難すべし。校長は今一應學校の前途を見届けられよ。明朝は如何にもして 御眞影を校長の許にまで奉安せん」とて、ここに夫れ／＼分擔を定め、直ちに東海道路を保土ヶ谷方面に向つて駆け出した。避難者も亦これに従つて行くもの、二百名許りであつた。校長は唯一人學校に取つて返したが、火は既に校門前一帶の家屋を舐めて、物凄く、瓦斯局方面よりの黒煙は校舎全部を覆ひて、運動場さへ定かに見透せなかつたのである。窓を透して職員室内を見れば、戸棚・本箱机の類顛倒散亂して、形容すべからざる有様であつた。黒煙は全校を包み、火は門前より迫り来る。時方に三時三十分、校長はここに校舎と分れ去つたのである。平戸橋方面は一面の火であつたので、岡野町^{既に焼け落ちて餘を淺間町に避難したのであつた。}

かくて五訓導は 御眞影を奉じ、後についた一般避難者と共に、保土ヶ谷に走り、山中に夜を明し、翌二日午前九時、御眞影安らかに校長宅に奉遷したのであつた。

人々は全く灰燼に歸したものとあきらめてゐたわが西平沼小學校は、奇蹟的にも附近五十戸の民家と共に、類焼を免かれたのであつた。二日に校長はじめ職員が學校に參集したときは、罹災者續々と學校に集りつつあつた。かくて 御眞影の御無事なる

を祝し、学校の焼け残つたのを喜び、職員児童の上を案じながらも、學校で一名の怪我さへなかつたことを感謝したのであつた。

一一 宮谷尋常小學校

九月一日、震災の襲來に逢うた。第二の強震で、校地の一角は崩壊し、校舎の一部六教室と物置、便所等は忽ちにして倒潰した。三教室は半ば倒れ、其他職員室、使丁室等は舊態を存するも、壁は破れ、天井は墜落して、室内に入ることは至難であつた。當時児童は既に歸つて、職員の大部分も歸宅の途に就いて居た。居残つた職員室に三名、學校長も其一人であつた。直に職員、使丁を督勵し、共に應急の處置を採つた。須くにして職員二名、登校して助力した。市役所へ此慘狀を報告しやうとした。電話は不通で、使丁は市役所へ急いだ。然し中途市中の慘狀を目撃し、驚いて歸つて來た。

それも校舍倒潰の刹那、學校附近には倒潰家屋も見えず、初めは斯る大事變とは思はなかつたからである。刻々襲ふ強震の間に、職員室、使丁室の火氣を見廻つた。職員室は今しも火鉢が顛倒し、炭火は散亂して居た。最初に之に氣付いたのは幸であつた。職員室、理科室の藥品も散亂して居たが、發火の憂はなかつた。然し危険な藥品は他に取纏め

て保管した。

忽ち學校より南方に當つて火災を認めた。御眞影と、勅語謄本とを運動場の廣場に奉遷し、當直員をして警衛せしめた。夜に入つては避難者の喧鬧が甚しかつたから、更に指揮壇上に奉遷し、高張提燈を點じて、當直員二名不寝番を命じた。

火災の延焼を氣遣ひ、一旦散亂した書類の中、最も重要なものを取纏め、運搬し得る用意と手配をしておいた。

強震頻々として襲來し、避難者が門前を通過するを認めた。直に運動場を開放し、有合せの筵百數十枚を敷き、天幕も張つて暑熱を防がしめた。避難者の多くは素足であつたから、草履を與へた。平沼町、岡野町、南幸町方面が劫火に襲はれた頃には、避難者益々増加し、混雜も一層甚しかつた。少時にして青年修養團員の有志も來校して、幹旋してくれた。避難者中渴を訴へるものもあつたから、團員をして飲料水を汲み來つて、一般に與へた。夜に入つて高島町の石油タンクの燃える頃は、紅焰天に沖し、附近の山林に映じて、悽愴の狀何とも形容が出来ない。其都度避難者は附近に延焼し來りしものと誤認して、三澤方面に避難せんと焦るものも多かつた。職員は交互町内の狀勢を視察し來つて、報導し、其安全地帯たるを知らせ、人々の安堵に努力した。又附近路傍に進退

の窮せるものを認められた時は、學校に伴ひ避難せしめた事もあつた。深夜北河視學も來校して、此現狀を視て歸られた。教員屢、學區内を巡視し、兒童の避難せる様子と刻々の慘狀とを視察し來りて、避難者に報導した。二日の晩を告ぐる頃、破損した校舍内に潜む者も生じたから、其危険を訓した。又一方には備品の散亂を憂ひて、一切室内の出入を差止めた。然し翌日校具の保管に細心な用意をなし、比較的安全な教室を開くことが出來た。斯くして震災當時の一日は経過したのである。

一一一 青木尋常小學校

大正十二年九月一日午前八時、第二學期の始業式を終へ、兒童退出後、各職員は新學期の準備を了へ、順次退出して、居残つたのは本職の外、落合明石、富田、垣迫、中山、大川の六訓導と使丁六名とで、それ〴〵執務中であつた。午前十一時五十八分、俄然彼の大震災に襲はれて、いづれも運動場に避難したが、繼續しての激震で、校舍は恰も怒濤に弄ばるる船舶の如く、今にも倒壊せんばかりであつた。本校は若し校舍の倒壊した場合、火災の突發せん事を憂ひ、先づ使丁に、湯呑所の消火を命じた。そして、直に 御眞影を奉遷せんと、奉安所の前に立つと、裏壁のスジカヒは突然折れて、御眞影は不思議にも本職の

掌上に落ちたので、其儘捧持して、再び運動場に出た。此時既に一旦歸宅した理科研究主任藤井訓導は、再び出校して、垣迫、中山、兩訓導と共に、激震中の危険を冒し、階上の理科教材室に入つて見た所、貯藏して置いた赤燐より、濛々たる白煙の昇るを認められたので、他の職員、使丁と協力して、運動場から砂場の砂を運び、燃えたてる焰に浴せかけ、辛うじて失火の危険を防いだが、尙他藥品の發火をも憂ひ、總ての藥品は全く之れを運動場の中央に搬出した。

かくて激震の漸く靜まるのを待つて、校舍の内外を巡視したるに、各所の壁は壞れ、スヂカヒは折れ、窓硝子の破損多く、校地北側の石垣は崩壊して、地盤低下したために使丁室と北側校舍とは大傾斜をなし、頗る危険の状態を呈してゐた。が、最早や燒失の憂はないので、避難所に充つ可く示した。

午後二時頃から避難者は續々と集まつて、其數實に六百名に達した。そこで、最も危険の少ない屋内體操場と、兒童昇降所とに收容することとし、爾後男教員半數づつ晝夜交代して、當直警護の任に當ることとした。

一三 二谷尋常高等小學校

二一四

震災に因りて、校舍全部は地盤と共に、稍、東方に傾いたが、割合に損害は少い方であつた。而かし、屋根瓦は殆んど全部を振ひ落した。又壁の崩壊したもの約三十坪餘あつた。其の他柱と梁又は土臺との間に喰違を生じた箇所が三四程あつた。物置と男兒便所とは、稍、半潰の程度であつた。當時居残つた數人の職員は、協力して、御眞影を校庭安全の位置に奉安して、護衛の任に就いた。又一方藥品室の危険を想ひ、發火の惧ある藥品全部を取出して、安全な場所に埋藏した。夜に到るまでに約二十世帯の避難民が來たから、それ等に對する便宜等も取計らつた。學校長として當日取りたる處置は、當時居残つて居た職員を督勵して、危険藥品を取り出して、安全なる處置を爲し、避難民を收容し、出來る範圍に於て便宜を與へた。當夜は數人の職員と共に校庭に夜を明して、御眞影を護衛し奉つた。奉安所には翌二日に至つて、漸く天幕を張ることが出來て、稍、完全に設備を爲し得た。此夜十二時過ぎ、南吉田第一尋常高等小學校校長石黒保義氏、同校の御眞影を奉戴して當校に來られ、奉安方を依頼せられた。此時校庭には避難民等の爲めに甚だ混雜してゐたから、恐れ多いことと思つたが、切なる依頼でもあり、

又あの際誠に已むを得ないことであつたから、本校の奉安所に共に奉安する事にした。

一四 子安尋常小學校

震災の爲め本校舎の大部分は破壊されて、殆んど使用に堪へない様になつた。二階建校舎は倒壊し、平家建瓦葺校舍は龜裂し、廊下は墜落したが、幸にも屋根瓦が大部分振落された爲、僅に顛覆の厄を免れた。又平家建亞鉛葺校舍は、被害が稍、輕かつたけれども、土臺の動搖を來し、校舍は東北部に向つて八寸移動し、従つて床は安定を缺き、人數の收容には甚しく危険であつた。其他各校舎とも窓硝子は過半破損し、壁は脱落して、殆んど教室の用をなさない。校具・備品類は半破損し、消耗品類は大部分使用に堪へない様になつた。尙運動場の日除は大半潰滅し、校地の兩側には大龜裂を生じて、陷落四尺乃至六尺に至り、横に樹木が倒れた。

震災當時は偶、鎮守一ノ宮神社の祭典で、學校は休業であつた。職員のみ全部出勤して、明日よりの授業開始の準備をなし、それが済み次第、随意に退散する事となつて居た。校長は兒童總代を引率して、鎮守を參拜し、丁度式が済んで兒童を歸し、學校の職員と残つて居た所時にあゝの激震、幸に本校は倒壊を免れたけれども、戸棚類の顛覆したものが

多いから、校長は理化藥品中火災を生じ易いものは、清田訓導、西山訓導、並に野本教員をして、之を箱の中に整理させて、運動場の一週に移し、特に燐及ナトリウムは、土中に埋没して、保管させた。一方校長は、御眞影及勅語謄本を、奉安所より運動場に移し奉りて警護し、其の間馳せ著けたる附近の職員は、學籍簿、考査訓練簿、其他重要書類を一括して、運動場に出し、以て非常の用意をした。使丁室の練瓦竈は破壊したが、釜の水が散亂して、燼中の火を消すには、却つて好都合であつた。斯くして發火の憂なき様になつて、一同運動場に集まり、附近の避難民と共に一夜を明した。

一五 本牧尋常小學校

大正十二年九月一日は、我が國史の上に、永久に忘れることの出来ない日であつた。此の校も其の災に罹り、校舎の大部分は倒潰し、其の少部分及び使丁室の一部分のみ、倒れんばかりに傾斜して、僅に名残を止めた。机、腰掛等の器具類を始め、理化標本類も殆んど破損し、運動場の日除の鐵柱の如きも、或は折れ、或は曲り、全く用をなさない様になつてしまつた。併し當日兒童は全部歸宅後であつた爲、學校から一人の負傷者をも出さなかつた事は不幸中の幸であつた。

校長及職員が夫々手わけをして、御眞影及び勅語謄本の御奉遷、其の他重要書類の取出し、重傷者池田訓導の手當等に努め居る中、東南に近く黒煙上り、猛火は忽にして附近一帯を焔め盡し、將に校舎に迫らうとした。職員、使丁は學校附近の人々と共に、數町隔たれる井戸より水を運搬し來り、必死となつて、防火に努め、辛うじて火災の難を免れた。一方使丁室其他の火氣に注意し、理化室内の危険藥品の處置をなし、やうやく火災の憂を除いた。そこで全職員は、再び、御眞影並に勅語謄本を安全な場所へ御奉安申上げやうと努力したるが、當時は、一挺の鋸、一箇の鐵槌さへもなく、剩さへ堅牢に出來た二階建倒潰校舎の下敷となつたために、十二分の努力も其の効を奏せず、遂に日は暮れて手の盡し様もなかつた。其所で遺憾ながら職員全部で御警衛申上げること、に努めて、遂に夜を徹した。明くれば二日、萬難を排しても御奉遷申上げべく、警察署を始め、青年團等の援助を乞ふたが、當時は全市を舉げて混亂の状態であつたので、其の力を藉りることは、到底出來なかつた。併し職員引續いての苦心努力により、遂に長くも御眞影は勿論、御額縁に至るまで、少しも御異狀なく安らげ、御奉遷申上げることが出來た。職員一同恭しく、御眞影を拜し奉つた時、其の喜びは譬へんにも、なく、感極まつて思はず萬歳を叫んだ。

斯くして六日、市内の秩序稍、整へるを幸、市役所へ御奉遷申上げることにした。即ち同日午後五時、人見校長は堤首席訓導と共に、御眞影及勅語謄本を奉戴し、山手本町警察署勤務巡查秋澤武氏御警衛、全職員奉送の裡に校門を出で、午後六時半、無事櫻木町假市役所に奉遷することが出来た。

一六 北方尋常小學校

始業式を終へ、一同は十一時退散した。當日の日直平松訓導は、轉倒した椅子、テーブル、破壊された戸棚を乗り越え、轉がる様にして窓から運動場に飛び出た。震動は一先づ止んだ。運動場には大きな龜裂が出来てゐた。それは西から東へ、幅は約一尺位もあつたであらう。瓦葺の校舎（新校舎）は恰度上部から押し潰されたやうに壊れ、トタン葺の舊校舎は全潰こそ免かれたが、古いだけに軒は落ちて、奉安室兼應接室の方へ寄りかかつて居た。職員室から逃れ出た日直員は、唯自然の偉大さを驚歎するばかりで、手をつけかねて茫然としてゐる所へ、石原訓導が駆けつけて、應援によつて、力を得た日直員は、半潰した窓から這入つて、轉倒した戸棚の棧、テーブルの脚を辿つて、之れも半潰した奉安所から、御眞影と勅語謄本を取り出し、石原訓導に手渡して、窓から飛び下りた。

校長は當夜の宿直員である北村訓導と、日直員に、御眞影と、勅語謄本との奉遷を托してから、部下職員と共に書類を運動場の真中に出した。午後二時頃、校舎の東南隅から火が燃えて来て、諸所に延焼した。水もなく、消防に従事することも出来なかつたので、どうする事も出来ない。かくて遂に午後三時半、全く焼失してしまつた。

御眞影及勅語謄本は、北村平松二訓導により大鳥泉と轉々數度に亘り、奉遷して、泉なる吉田政太郎氏宅に奉安した。

願ふに校舎校具は、全く烏有に歸して、何一つ残すものは無かつたのに、御眞影及勅語謄本だけは幸に安泰なるを得たのは、衷心喜ばざるを得ない。

一七 大岡尋常小學校

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如として起れる未曾有の激震に因り、瞬間に本校の建物、木造瓦葺三棟三百五十坪の建物は全部倒潰した。其時西北隅の便所の柱數本と東隅の兒童出入口約三坪を残して、あたり一面に砂煙は濛々として舞上つた。

此の日は恒例の職員會を開く筈であつたが都合によつて延期して、職員等は概ね退散し、唯近藤善太郎氏と、兵藤仁之助氏とが居残つたが、身を以て逃れ、幸に微傷だに負はなかつた。倒れた家の屋根上を走つて、自宅に歸り、家族の無事を確めた近藤訓導は、引返して、直に兵藤訓導と共に、御眞影を掘出すべく、校舎の屋根に上つた。先に屋外に通れ出た兵藤訓導は、使丁を指揮して、埋没した御眞影其他を掘出すべく努力しつゝあつたが、此時近藤訓導の來合せたるを幸ひ、俱に力を併せて、瓦を除き、屋根板を破り、天井を剥いだ。けれども厚い壁土に壓され、更に戸棚の下積となつた御眞影は、容易に掘出せなかつた。二人が疲勞困憊して居る所へ、訓導菊地原助一氏が駆け付けた。同氏は本年四月、一箇年の兵役を卒り就職せるもの、學校を距る數町の下宿に居たが、地震と同時に下座敷が潰れて、二階が平家になり、下宿の妻女は壓死した。天井を破り、屋根上に抜出た同氏は、梁の下から妻女の死體を引出し、狼狽せる家族を裏の畑に避難せしめた。又前の寫眞館から人の悲鳴をきいてこれを救助した時には、火は既に下宿に延焼せんとしてゐた。それを眺めながら、單衣一枚のまま學校に馳付けたのである。二訓導に協力し、丸太を以て壁を打破り、御眞影及勅語を安全に取出すと共に、三學年以上の學籍簿と、校長の卓上戸棚を搬出した。此の時火は屢、倒潰校舎に飛火して黒煙

をあげた。附近住民は自家に延焼するを恐れて、必死と鎮火に力めた。依つて一刻も猶豫すべき場合にあらすと、直に校舎裏の田圃中に天幕を張り、御眞影及び重要書類を移し終つた。時既に校舎の一部は高工方面の火に延焼し、烏有に歸し、他の一棟は附近住民の力によつて火災を免れた。其の夜は附近一帯に飢ゑたる人、子を探す母、傷者のうめき、喧々囂々たる中に、遙に天に冲する火焰を見入りながら、菊池原兵藤二氏が御眞影を擁護申上げた。

翌二日拂曉、山本校長、矢野保谷、菊池原秋本訓導等により、運動場東隅に、今も残れる約三坪の兒童出入口を整理して、學校の本部とし、ここに田圃中の御眞影其他を移した。

一八 本町尋常高等小學校

大正十二年九月一日は、午前七時半から第二學期の始業式と、鳥居訓導の新任式を行ひ、引續き第二學期の行事、其他につき職員會議を開き、同十一時終了後、或者は同學年打合せ會を開き、或者は分掌事務の整理等に從事中、午前十一時五十八分、突如大震が襲來した折柄、職員室に居合せたのは、校長森河瀬、長崎鳥居の五名であつた。忽ち轟然たる音響の裡に、運動場の鐵骨は倒潰し、職員室に砂塵を煽り、室内は濛々として、他人の姿さ

へ見えなくなつた。續いて同室内にあつた數臺の重ね戸棚・机椅子等算を亂して倒れ出した。すは一大事と不安の絶頂に達した刹那、室外に出た森訓導から「理科室が火事だ」との叫び聲が聞えた。校長は直ちに御眞影の取り出し、消火の手配を命じた。長崎訓導は逸早く奉安室に馳せつけて、御眞影、勅語謄本を取り出して、校長に渡した。講堂でオーケストラの練習中であつた關屋訓導は、馳けつけて理科室に飛び込み、半ば焼けつつある藥品小戸棚を引き出して、窓外に投げ出した。森・長崎・鳥居訓導、笹川使丁等は、消火器とホースを巻きつけてあつた車とを引き出して、水道の口に取りつけた。水道は破裂して、一滴の水も出なかつた。校長は更に校側の大岡川からバケツで水を運んで消火すべく命じた。河瀬・關屋・鳥居・石綿・三浦等の各訓導と、片倉・荻野・笹川使丁は、全速力で干潮の大岡川から何回となく水を運んで必死となつて消火に努めたが、火は壁と壁との間から階上に燃え上つた。一部の者は階上から數回壁間に投水した。第二震第三震と續けざまに來る激震中を、無我無中で運んで來た水は、半ば途中でこぼれてしまつて、水が足りない。火勢は見る／＼暴威を逞しうして、手の付けやうがない。今は萬事休すだ。出火の通知をしやうと思つて、電話を廻して見たが、電話は通じない。辨天橋側の交番に出火を報ずると共に、一同は消火を断念して、書類・器物の搬出に移つ

た。此の時既に池澤・鳥居兩訓導は重要書類箱の内から最重要の書類をよりわけて、校庭へ運んで居た。坪内訓導は庶務に關する諸帳簿と、参考書中の得がたいものを區別して運び出して居た。河瀬・長崎・本莊の三訓導は、原籍簿・訓練簿等を運んで、階段下約三寸傾斜せる中で、汗みどろとなつて働いた。關屋・中島・三浦訓導は、應接室へ飛んで行つて、管絃樂器を運び出して、大岡川に繋いであつた船に積み込んだ。約四十分間に室内の重要なものはあらかた出してしまつた。

校長は御眞影を奉持して、傍を見ると、中村女使丁が校側の煉瓦塀の倒潰に打たれて、顔一面血だらけであるから、左手に御眞影を奉じ、右手に同使丁の手を引いて、玄關前に出た。折節、大岡川に繋留せる船上に田邊訓導の姿が見えたので、御眞影を同訓導に奉持させ、固く警衛を命じ、直ちに引き返して職員使丁の活動を指揮した。校庭に出した書類は、戸板に載せて、大岡川の船内へ運んだが、三度目に運び出した時は、もう黒煙が渦まいて、川へ行くことが出来なかつた。止むなく航路標識所の煉瓦塀の内側に戸板に載せたまま置いた。此の時には市中は悉く火に包まれてしまつた。校長は是以上校内に入るのは危険と見たので、一同に解散を宣し、各教員は思ひ思ひの方向に離散した。そこで校長は松山・赤地・上田・井上・鈴木の各教員と、時澤・中村女使丁とを率ゐて、

東横濱驛構内へ避難し、對岸から猛火に包まれた校舎を見たときは、感慨無量、實に斷腸の思ひがした。

三浦訓導は、田邊訓導の船危険と見るや、ボートを操つて御眞影と、同訓導とをボートに移し、自ら御眞影を奉持して上陸し、校長に渡した。校長は如何にして御眞影と女教員、女使丁とを安全地帯に移すべきかと苦慮した結果、萬難を排して、省電高架線を越え、紅葉坂を経て野毛山貯水池に避難した。

此日職員、使丁は、自身自家の危害を顧みるに暇なく、猛火の中に身命を賭したる活動によつて、御眞影を無事に奉遷することが出来、六十餘冊の重要書類と十餘點の管絃樂器類とを残すことを得たのは、まことに不幸中の幸福であつた。この半面に各自が拂はれた犠牲については、言ふに忍びざるものが多かつたと思ふ。

一九 吉田尋常高等小學校

災禍の中央にあつて、最も悲慘を極めた我が吉田小學校の震災當時に於ける有様は、どんなであつたらう。今、それを語るに先だつて、附近の状況を一言して推測せられるよすがとしたい。

市内に於ける最も悲慘の場所といへば何人も梅ヶ枝町本願寺前を指すであらう。此所こそ我が校舎の直ぐ前で、數百の黒死體を出した所である。

伊勢佐木町方面の火は、若竹町羽衣町を姑め盡して、次第に電車道の方へ向つて來た。東から南にかけては河岸を境に、蓬萊町方面の火に圍まれてしまつた。南西の方が、僅かに長者町郵便局の建物に遮ぎられていたので、附近の人たちは、此所を目がけて集つて來たが、そこも東の間、忽ちにして猛火に包圍され、數百の人々は全く逃げ場を失つてしまつたのである。

大正十年増築したばかりの我が校舎は、新築された部分を残して、他は悉く倒潰した。内部には多數の職員が執務して居た。幸ひに早く飛び出した二三名と、他の室に居た數名とが、漸く運動場へ出た。運動場には數條の大龜裂を生じ、水道鐵管は破裂して、四邊は水が一面に溢れてゐた。校舎の中では、盛んに助けを呼んで居る。どうなることであらうか、全く夢に夢みる心地だ。校長は逸早く潰れた校舎の屋根へ上つて、大音聲に「みんな集まれ、一人も歸つてはならない」ととなつた。全身血塗れ、泥まみれになつて、龜裂部に打斃れて呻吟してゐる者もあれば、腰部を挫折して苦悶の情を訴へつつ人の背に負さつて出る者もある。女の先生などは、校長に固くつかまつて、震へてゐるのも

あつた。職員室の火鉢から白煙が上る。さあ大變、十有餘名下敷となつてゐる者を助け出すことが出来なくなると、一同は大騒をした。心ばかりは焦るが、障害物を取除く道具がないので、羽目板をはがしたり、柱をとつたり、瓦をはいだりしたが、中々出すことが出来なかつた。全く各自、中から這ひ出すより外に仕方がなかつた。その中一人出で、二人現はれ、それ〴〵屋根裏の小孔や、縁の下から首を出す。「誰は」「誰は」と順次にしらべて行く。腰や足を壓せられた者は、出ることが出来なかつた。幸ひにその時、隣家から鋸を一挺探して來たので、これを持つて中へ這いつて行くことになつた。一度搖れば共に出ることは出来ない、くづ〴〵してゐれば、共に焼死するのだ。鋸を手に後の事をよろしく頼むと云つて、小さい孔へ入つて行く者、外で見張する者、全く生きた心地もしなかつた。斯くの如く生命がけの努力をして、全職員を救ひ出したのであつた。中には逃るゝに途なく、焼死するよりは自殺して終らうとさへしたのもあつた。

火は眼の前に迫つて來た。残されてゐるのは畏れ多くも 御眞影であつた。しかし奉安所は階下の中央にあつて、二重張の二階の天井と屋根に押し潰されてゐたので、屋根を破壊して、そこへ達することは到底出来ないことであつた。しかし一同は一度は取かかつて見たが、全く絶望で詮方なく、恐れ多いことながら、校庭から立ち退いたの

であつた。職員達は火の中を逃げて、辛うじて助かることが出来た。危険の中に倒潰した家屋の中へもぐり込んで、同僚を助け出した教員達の行爲は、實に褒むべきものである。悲しいことには、當時下敷にされた教員達を助け、學校の爲めに盡された校長川井氏は、大正十三年二月十五日逝去された。當時校長が云はれたことをここに記す。

何とも語るべき言葉がない、周囲の状況から推して、我校の當日状態を忍んで戴きたいのだ。人力を以て如何ともすることが出来なかつたのは、かへす〴〵も遺憾である。唯恐懼措く所を知らない。地震後約一時間餘に涉つて、部下職員を督勵して、悉く救助するに至つたが、惜しい哉、御眞影奉遷までには力が及ばなかつた。せめて自分だけなりと、御眞影に殉じ、校舎と運命を共にしようと思つたが、他の者に促されて、やむなく火中を突破して、半町程距りたる蓬萊町の河岸にて徹宵泥水をあびて、辛うじて生を全うした。

思へば天殃である。何事も夢だ。骨を碎き肉を裂いて、惡戰苦闘を續けたが、其効は少なかつた。其後進退伺を提出して、其責任を謝したが、聖恩宏大にして仁慈洽く、加ふるに當局の寛大なる庇護によつて、辱くも不問の恩恵に浴することを得たのは、かへす〴〵も有りがたき極みである。

二〇 壽尋常高等小學校

激震襲來の一刹那、校舎の本館は約八寸地中にめり込んで、二箇所は大龜裂を生じ、六本の柱は大損傷を受けた。屋内體操場の柱は、地盤上三分の二の箇處で鐵筋が曲つて、鳥居形に開き、床面は約二尺五寸持上げられた。物置と、便所二棟とは、約一尺持上げられて、幾分破損した。女兒昇降口と、湯沸場とは、約一尺の浸水があつた。運動場は平均二尺五寸程持上げられて、數多の龜裂を生じた。當時學校には當直の淺岡訓導と、女教員四名住込みの林使丁一家族があつた。歸宅の途にあつた校長は、直に學校に引かへした。校長外職員一同は、先づ御眞影と、勅語謄本とを捧持して、避難の用意をした。校舎南なる扇町の一廓の火が、男兒昇降口に延焼するのを恐れて、其の中の可燃質のものを片づけて、防火の用意をした。

午後三時頃、學校は全く猛火に包まれ、三時十分には南棟第二階第六號教室の窓から、校舎を粘め始めたが、消防の術がなかつた。職員使丁の一團は、三時二十分に御眞影と、勅語謄本とを捧持して裏口から出たが、熱さに堪へ得ず、一同日出川に入つて、水を浴びて、火の熱さをやうやくしのいでゐた。

午後六時三十分頃になつて、火熱もやや衰へたので、河岸に上つて、職員使丁の一團は御眞影を守護し、參らせつつ一夜を明した。此の間に火は校舎北棟第二階の西方の窓に燃え移つたが、それは林使丁の奮闘によつて消止め、又屋内體操場の内部に燃え擴ろがつた火は、我等の一團と、避難者との力をかりて、場の中程までを焼いただけで、消し止めたが、南棟の十一教室と、其の所屬の内部、便所一棟、物置一棟、渡廊下は全く燒盡された。

翌九月二日午前五時三十分、我等の一團は校舎内に入つて、第三階の餘燼を消し止め、御眞影と、勅語謄本とを奉安室にをさめ奉つた。午前六時、避難者のために職員室、又其附屬室と、使丁室とを除く外、校舎全部を避難者のために開放した。

二一 石川尋常高等小學校

震災當初、本校々舎は、倒壊だけは免れたが、傾斜した部分もあつた。石垣は崩れ、瓦は落ち、壁・天井は破損し、器物は多く倒壊した。校長は職員と共に、先づ御眞影と、勅語謄本とを校内の最も安全な所へ一時奉遷して、暫く形勢を見てゐた。激しい餘震は頻繁に襲つて來る。附近の家屋は所々に火を發して、漸次校舎の近くに延焼しやうとする

ので、校長は重要な書類や、校具などの始末方を、職員に傳へて置き、職員の一部と共に御眞影、及勅語謄本を奉護して、校舎外の安全地帯を選んで避難した。一方校舎内に留つた他の一部の職員は、使丁と共に重要な書類や、校具などを取りまとめ、其の中最も必要なものは、餘震の稍、鎮まるを待つて、校外の安全な所へ搬出して、災害を免れしめた。又校長は職員及使丁を指揮して、附近住民の避難し来るものを、なるべく多く收容した。初めは避難者を運動場に收容したが、日暮になつて避難して来るものが益、多くなつたので、教室に入れた。夜の八時頃には三四百名に達した。夜になつて、附近に起つた火災は、校舎に延焼しやうとしたが、職員、使丁及校舎内にあつた避難者の大部は、協力して、防火に努め、又一方運動場内に植ゑてあつた櫻樹が、火焰を遮つたので、辛くも延焼を免かれたのであつた。

二二二 元街尋常高等小學校

九月一日午前七時半より八時半迄に、始業式を終つて、児童を歸宅させた。同九時職員會開催、二學期に於ける教授上、事務上の協議をなし、十一時五十分終了し、四十三名の職員は夫々事務を處理して、歸宅の準備をしてゐた。校長は應接室で衛生上のことで

來校された繁田校醫と會談中で、其處に若干の職員も來合せてゐた。時は正に十一時五十八分、大震は突如として襲來し、校舎は激しく動搖し、硝子は碎け、壁は崩れ落ちて、恐しき噪音と塵埃とは校内を暗憺たらしめた。一同は殆んど無意識に机側に蹲まつて居たが、隙を覘ひ、思い／＼に一號或は二號運動場に避難した。矢口首席訓導は玄關を出て、五六歩の所で女子部校舎の倒壊にあつて之に打たれ、同僚に助けられて、一號運動場に運ばれ、青木訓導は打撲をうけて重傷を負ふた。間もなく職員、使丁同じ所に集合した。女子部校舎附屬使丁室にあつた小笠原訓導と、使丁二名とは、隙間から這ひ出た。女子部使丁室に在つた使丁二名も、使丁室倒潰と共に下敷となつたが、辛くも免がれ、いづれも怪我はなかつた。職員中の一名所在不明な者があつたので、一同は心配したが、後日無事避難と分つた。矢口訓導は繁田校醫の應急手當を受けたが、藥品も用具もないので、同校醫は急ぎ持ち來るべく歸られたが、此時早や元町、石川方面に黒煙が見えた。雨天體操場、物置、手工室、便所等は悉く倒壊し、運動場には所々に大龜裂を生じた。此の間校長は職員を督して、御眞影と御勅語とを出した。一方矢口訓導を山手公園に連れて行つた。再度校舎に入つて、重要書類を取出さうとしたが、女子部校舎も餘震に倒れさうで、非常に危険なので中止した。中村町の某洋館庭上竹村醫師の避難所に、御

眞影と、御勅語とを奉遷し、負傷者も此處に移して、屈強の男職員五名と、附近居住者と共に其の守備を命じ、女職員三名には矢口訓導の看護を囑した。校舎は午後三時頃になつて全焼した。

二三 立野尋常高等小學校

震災當日は、始業式で、今日は朝から天候が宜くなかつた。児童は休暇前の注意をよく守つてか、時刻を違へず午前七時に千三百餘名の児童が、何れも元氣よくやつて來た。運動場は雨に濡れて、一齊に始業式を行ふことが出来なかつた。直に各級の教室に入れて、休暇中に起つた出來事を話したり、此學期に必要なことを極めたり、其の他學課に關することに注意をして、午前十時には児童、残らず歸宅させた。

引續いて職員會議を開いた後、食事を済まし、一同上衣を脱いで一休みしてゐると、大地震が襲來した。若い教員は眞つ先に運動場へ飛出した。二三の教員は辛うじて教員室を飛出した。其瞬間第五、六、七號の教室と奉安所二階の教室とが、往來の方へと向けて倒潰した。堅固な鐵骨の日除柱は、悉く根抜きにされて、而も中途から残らず折れた。職員等は崖下へ逃れて、肋木の支柱に捉つて居た。三人の職員が下敷になつたが、

三人とも明き間から這ひ出して助つた。

本校の校舎は道路に沿うて鉤の形になつて居た。それが入口の處から倒れたので、殆んど外へは出られなかつた。外から中へ入ることも出来なかつた。職員は一同運動場の片隅に圓まつて居たが、いくら御互に沈著にしようとしても、さうすることは出来なかつた。而し何としても、御眞影を奉安せねばならないので、數名の勇者は校長に従つて、奉安所の前へと向つた。梁はぶら下つて柱は倒れかかつて居た。硝子戸は鴨居に壓されて、とても開かなかつた。戸を破つて無事に、御眞影は運動場の安全箇所へ奉遷された。

鐵砲場通りは家は倒潰したが、火災は免れた。稻荷湯から火が燃え出したが、幸に水があつたので、近人が協力して消止めた。使丁室は幸に火の氣がなかつた。二三の職員が恐るゝ職員室を覗くと、危険薬瓶棚は上から壓され、酒精瓶は倒れて居る。側に硫酸の瓶がある。小さい瓶が重なり合つて戸に挟まれて居る。其中には恐ろしい黄燐の瓶もあつたので、大に驚き硝子戸を打破して、危険物を他に移し、發火の難を免れた。鐵砲場の通りは悉く風下なので、若し學校から火を出したら、それこそ大變であつた。職員達は當直者を残して、それ〴〵歸つて行つたが、既に遅く途中は一面の火で歸るこ

とも出来なかつた。五名の者は空しく立戻つて、校長や、當直者と共に恐ろしい空を睥めながら、校庭に一夜を明した。職員中には家屋全潰、全焼、家族全滅の者もあつた。軍隊に召集を受けて、留守中に細君が産氣づいて、途方に暮れてゐる者もあつた。

二四 大鳥尋常高等小學校

當日我校では、職員室で職員會議の最真中、只ならぬ音響と共に強き振動を感ずると同時に、校舎が搖ぎ出してたので、すは大地震よと、各自外に飛び出した。併し全員が出終らない中に、西側の棟は倒潰して、屋根は地に著いた。これと前後して、東側の棟は倒潰したが、屋根は地に著くまでには至らなかつた。西側の棟は運動場の方面に倒れ、東側の棟は正面の棟と接合せる部、陥没した状態で倒潰した。正面の棟は甚しく北方に傾き、倒れさうで頗る危険であつた。幸にしてスレート葺の講堂兼雨天體操場と、トタシ葺の物置と、便所だけは安全であつた。

學校長は職員及使丁を運動場中央に集め、人員を點呼したが、幸全員無事であつた。但し使丁只野庄之助のみは、避難のため東部兒童昇降口を出づる際、鐵筋コンクリートで作つた左側の門柱が倒れかかり、これに押し飛ばされて、道路に轉倒すると共に、齋藤

文房具店の軒の下敷となつて、腰部を打たれた。尙校長は學校から火の出ることを氣遣つて、火氣を消し、藥品等の始末をした。餘震にゆられつつ約一時間學校を警戒したが、幸火災は起らずに済んだ。

本校には、御眞影と勅語謄本は拜戴して居なかつた。此の時既に市の中央部は大震災であり、學區内にも所々に火の手が擧つた。そこで學校附近に住める木村首席訓導を自宅に派し、其安否を窺はしめた。幸無事であつたので、同訓導を當直として、一旦各職員を歸宅せしめた。此際左の如く申合した。

- 一、一旦家に歸り家族の安否を確かむること。
- 二、家族に死亡又は負傷者あらば、相當の處置をして、急ぎ學校に歸り來ること。
- 三、家族が安全ならば家は焼けても、倒潰して居ても、直に學校に歸り來ること。

二五 根岸尋常高等小學校

當地方は市街の中心から遠く離れて、至つて閑靜なる郊外地であり、且つ幸火災が發しなかつたから、其の慘害の程度も市内の他の夫れよりも比較的輕かつたと思ふ。左に校舎被害の狀況の概略を述べる。

最近(大正七年)建築に係る瓦葺二階建二教室の棟は全潰。最古建築に係る亞鉛板葺平屋根建二教室の棟は殆んど半潰。其の他の建物は屋根瓦は崩れ、壁は落ち大破損。御眞影奉安所から奉安の御函は落ちたが、異状がなかつた。此際に當つて職員一同は、皆々沈著に活動し、最善の處置を盡した。

當日は、第二學期の初であつたから、児童は既に全部退散した後で、残れる職員は皆屋外に逃げ出した。校長は校庭に職員使丁一同を集めて、諸事を打合せ、指示し、鈴木訓導と共に校内に入り、御眞影の御安泰を確め、之を警固した。他の職員は夫々各室を巡檢し、使丁は火の元の用心をなす等、一切の處理を完結した。校長は今後の突發事項に處する臨機の方策につき、豫め宿直員に指示を與へて、職員一同一先づ自家に歸宅を命じた。

二二六 磯子尋常高等小學校

午前八時、鐘の合圖で、一千二百の児童は一同屋内體操場を集つて、第二學期の始業式を舉げた。蒸暑い式場であつたが、生徒達は一心に校長の訓話を聞いた。式がすむと、一同は受持教師に伴はれて、各自の教室に入り、教師から訓話を聞いてから、家に歸つた。

職員一同は職員室に集つて、第二學期初回の會合を開き、教授訓育並に事務上の打合等、議事を終つた。之と同時に、俄然恐ろしい大地震は襲來したのである。一同は驚いて運動場へ逃げ出した。屋外の動搖も甚しく、しつかりと歩くことさへ出来なかつた。學校の附近の住宅は全部倒潰し、眞照寺裏手の斷崖は崩壊した。校舍階下の窓硝子は盡く碎けて四方の壁は落ちてゐた。校舍の中部は今にも倒れさうに傾いてゐた。階下の柱は十數本折れ、玄關の庇は全く倒れて僅に門柱に支へられてゐたので、中へ入ることは頗る危険であつた。而し幸にも雨天體操場だけは何等の損害をも被らなかつた。運動場は各所に龜裂を生じ、場の一隅にあつたコンクリート製の児童水呑場の塔までが倒れてしまつた。

午後一時頃、火は磯子埋立地方面に發し、折柄の烈風に煽られて、火勢益加はり、火焰は刻一刻學校の方へと近付いて來る。最早逡巡すべき時ではないので、其々職員の一部署を定め、重要書類、其他大切な物品の持ち出しにかかつた。當校は未だ御眞影を奉戴してゐないが、教育勅語の謄本と、戊申詔書の謄本とが、下賜されてあつた。餘震は尙引續き止まないが、險を冒して、半倒潰の屋内に入り、奉安所から勅語、並に詔書を奉持して、運動場の安全地に避難した。

男職員は屋内に闖入し、懸命に物品を提げて、窓口から屋外に抛り出し、女職員は屋外でそれ等を安全地に運び、窓掛布で包んだ。敏捷で勇敢な活動振りは一時間ばかりで重要な物件の殆ど全部を持出すことが出来た。理科室に在つた發火性の藥品も、氣懸りになつて居たが、幸ひ休暇前何れも砂埋にしてあつたため、何の事もなかつた。これ全く當該係の周到な注意の賜である。息つく暇もなく、學校から東南の方僅に二町ばかりの所で、又もや火災が起つた。其附近には同僚木村訓導の住宅があるので、男職員等は一齊に駆けつけた。そして火元の家の消火と、木村訓導宅の防火、家財の持出しとに努めた。而して火元は全焼したが、木村訓導の宅は塀が焼けただけで、辛うじて災厄を免れた。若しこれが延焼したとすれば、學校は到庭焼失を免れなかつたであらう。埋地方面の火災も、宮下方面に延焼し、五十有餘戸を焼失して、川境で漸く終熄し、學校附近も全く鎮火し、最早火難の虞れはなくなつたので、運動場に職員、使丁を集め、左の件を打ち合せて、各自自宅へ歸ることにした。

一 全校は不幸大破壊を受けたが、出來得る限りの程度で、戸締に留意すること。

一 火に留意すること。

一 當分の間當直員を二名に増員すること。但し學校附近居住の者で、成る可く都合して勤務に

當ること。

一 當直室は當分の内雨天體操場の一部に設けること。

一 持退物品は雨天體操場内に收容すること。

一 家屋焼失、住宅倒壊等の罹災者は、申込に依り雨天體操場に收容すること。但し當直員これを

監督し、諸事の斡旋を掌ること。

一 收容の避難者には、希望により家事科用器を貸與するも差支へなきこと。但し立退く際は必

返還せしむること。

一 避難者收容に關する記録を設けること。

校長は校舎の破損状況を、教育課に報告するため、午後三時校を出發した。學校は市場末にあつたので、校長は横濱市が全滅しやうとは思はなかつたのである。

二七 南吉田第一尋常高等小學校

九月一日一大激震襲來と共に、鉤型二階建校舎の十六箇教室は、脆くも北西に四五尺跳り出て倒潰し、残八箇教室、職員室等の短き棟は、瓦一枚の残りもなく落ち、壁は碎れ、土臺は外れて、床は甚だしく傾斜し、處々柱が折れた。殊に御眞影室附近の慘狀は、目も

あてられなかつた。平家建の四箇教室と使丁室下駄傘置場便所等の各室は辛くも倒潰を免れた。運動場には二尺ばかりの高低起伏が出来て、所々に龜裂を生じ、泥水を噴き出して、廣い八百餘坪の運動場は泥海と化してゐた。

御眞影は幸にも無事奉遷が出来た。児童は既に歸宅させた後であつた。校舎校具の全部類焼したのは、午後の二時頃であつた。

此日各級教室で、始業式を行ひ、第二學期の學課に就いての話をして、一千六百三十七名の児童は、一人残らず歸へした。午前十時から教員會を開き、學制頒布五十年記念事業である児童遊園地寄附金募集情況の報告、秋季運動會並に第二學期の行事等に就いて協議を遂げ、十一時から始業準備として、學年打合せ、教具其の他の整理をしてゐた利那、大震は襲來した。教員使丁は期せずして運動場の中央に遁れ、同僚及使丁の安否を氣遣ふのであつた。學校にゐた職員は石黒校長以下十九名、使丁四名であつた。

即時男教員は數組に別れて、校長組は御眞影勸語謄本と、詔書等の奉遷に従ひ、砂川訓導組は學籍簿其の他の重要書類の搬出、火氣の始末をなし、他の組は萬一同僚の中に下敷になつたものはないかと、聲を擧げて、倒潰した校舎の下を探し廻つた。又學校附近の倒潰家屋に行つて救助に努めた。訓導府川勝藏氏は左手頭を負傷した。各は其

焦眉の任務は果したので、運動場の中央に山積した搬出物を何うしやうかと愁ふ間もなく、學校の一方から火を發して、到底校舎は火を免れる見込はなかつたので、御眞影勸語謄本、詔書は、石黒校長之を捧持し、學籍簿其の他の重要書類は、他教員之を携帶して立退くことになつた。折角持出した書類其他は地下に埋めるには、泥水があつて、どうすることも出来なかつた。詮方なく卓子三四の上に置くより外なかつた。學校を出た職員は、中村町の石油倉庫脇から、稻荷山の絶對安全と認められた地帯に避難した。時に午後一時。「御眞影はいかに奉安し奉るべきか」といふ問題が次に起つた。平樂學校か、江吾田學校か、根岸學校かと、職員を派して窺はしめたが、何れも危険なので、唯礪子學校のみ割合に危険の程度がないので、午後七時、職員護衛の下に奉遷したが、近隣には火事はないが、校舎が倒れさうで、是亦安全とはいはれなかつた。かかる上は最早神奈川方面より外にないと、刑務所前から市電線路を傳ふて、日本橋・久保山・藤棚水道路から、省電線路に出て、平沼町から淺間町・青木臺町を経て、二谷小學校に著いて、茲に漸く奉遷し奉る事が出来た。校長が當日取つた處置は、激震來ると共に、先づ第一に御眞影を捧持した事である。次に火氣の始末をして、重要書類、備品を搬出した。一方職員使丁の點呼をした。御眞影を安置する場所が定まつてから、職員には歸宅を許した。女教

員は能ふ限り其の家庭又は知人の家に送つた。

此の間明二日を期して、焼跡に集合し、應急の小屋を設けて事務所とし、日誌を備へて、職員ノ罹災状況、立退先、罹災兒童の調査等を行ふてこれに記載し置くこと等を約した。

二八 南吉田第三尋常高等小學校

大正十二年九月一日、第二學期の始業日である。夜來の豪雨で運動場へは出られぬから、二回に渡つて講堂で始業式をあげた。式後各教室の整頓をして、十時半に放課した。生徒全部の退散を待つて、十一時から職員會議を開いて、本學期の陣容を整へることにした。

會議が終つて、或は事務に、或は學年打合に餘念なき折しも、俄然大震動が起つて、立てば倒されるので、如何とも出来なかつた。止むのを待つて、運動場へ駆け出した。其校舍には異状はなかつたが、續いて來る第二回目の震動で、校舍本館の兩袖は外側に向つて倒潰し、運動場には大龜裂が出来た。

校長は一大事と思つて、職員、使丁全部を運動場の中央に召集した。時に二階の教室で打合せをして居た三、四の者は、兩袖の倒潰した爲に、降り口がなく倒れなかつた棟の

二階の教室の窓から、軒の排水樋によつて滑り降り、又窓から飛び降りた。幸に何事もなく、三十八名の職員と、八名の使丁全員が無事であつた。

此状態では市内の殆ど全部の建物は倒潰したと思つて、校長は首席訓導と、居附使丁のみ學校に止めて、他の者には歸宅を促し、家庭の安全を問ひて歸校する様に言ひ渡した。其後鳴動猶ほやまず。午後一時頃になつて校舍の東方、中村町北方、南吉田方面の三方に火災が起つたので、校長は居残り、職員と全力をあげて、勅語謄本、及び重要書類を運動場に搬出し、火災の状況を憂慮して居つたが、川を隔てて中村町にある神奈川縣揮發物貯藏倉庫に爆發起り、火煙朦々物凄き状況となつた。時に附近からの避難者續々運動場に集り、約六百名を算するに至つた。

四方よりの猛火は益、烈しく、校舍の危険刻々に迫るを認め、校長は勅語謄本を捧持し、職員に一部の書類を携帯せしめ、一部は校庭の一隅にある池の中に投入して、道場橋を渡つて中村山の斷崖を攀ち、山上に避難し、校舍を瞰視して居たが、遂に周圍より延焼、忽ちの中に全部烏有に歸した。時に二時半、今は、是までと校長は勅語謄本を捧持して、根岸競馬場に避難した。

二九 日枝第一尋常高等小學校

第二學期始業第一日、式と職員會を終り、並木校長は文部省に出頭する爲めに、第一に退出し、其の他の訓導中打合會等諸準備の了つたものは、各前後して退出し、残つた者は十六七名であつた。大震起るや、二階建の我校舍は、異様の大音響と共に、瓦は飛び、校舍は上下に激しく動搖し、共進橋に面した北側の校舍は、北方大通りに倒潰し、續いて東側校舍は南方校舍と共に、運動場側に、西側校舍また續いて、運動場に倒潰した。不幸にも居残の職員、アワヤといふ間に大半は建物の下敷きとなつた。中にも神崎訓導は玄關口から大石石井二訓導は職員室運動場出口から、秦野糸日谷兩使丁は使丁室から飛び出した。其中に職員室運動場出口からは、中田・小橋・北・永田・佐々木・松本・高田・山口・持塚・石垣・小野等の訓導が、相前後して這出し、又使丁室側から糸日谷使丁が這出して來た。どの顔も蒼白の上に、服も頭髮も塵や煤だらけ、中には顔や手に負傷をして、血だらけの者もあつた。特に持塚・小野兩氏は非常に疲勞してゐた。持塚氏は、扶けられ體操教壇上に休息させた。一同はお互ひ無事であつたことを喜び合つた。此時近くは日枝第一小學校附近、遠くは蒔田八反目、廻坪の方面、南吉田町南五ツ目等火の海と化してゐた。

突然松本訓導が「笠間君と高一の石丸・川井とが居ない」と叫んだので、一同は驚いて倒壊した校舍の近くに駆けつけ、三名の名を呼ぶと、笠間訓導は應接室の廊下に近き所で、救ひを呼び、川井等は二十五號教室の廊下に接した方に居る事が分つた。其所で二手に分れて救助にかかつた。其時秦野使丁は「オッ、糸日谷さん、使丁室から煙が出る、火事になる、火事に」といつた。使丁糸日谷は、其煙の出る所から入らうとしたが、第一回は煙にむせて入れない。再び勇を鼓して、潜り込んで見ると、晝食の時起した火の上に、傍らに在つた窓掛布と、置棚が倒れかかり、其布に火がついてゐたのである。火のついた窓掛を地面にすりつけて之を消し、尙火の上には灰をかけ、側にあつたバケツの水で消して出て來た。間もなく又煙が出るので、また這ひ込んで、藥罐に残つてゐた水をかけて、全く消し止めて出て來た。一方松本・永田・佐々木・山口の諸氏は倒壊せる校舍材料の下から潜り込むやら、下見板を外し、壁を破る等して、先づ石丸を出したが、川井誠一郎がまだどこにゐるか分からないので、聲をかけるも、微かな聲で「先生早く助けて下さい。胸を挟まれて痛くて仕様がな」といふ。松本氏等は「おおよし、心配するな。しつかりして居れ。今直ぐに助けてやる」といつて、いろ／＼工夫して、板を破り、横木を折つて、入らうとしたが、大きな梁や柱やいろ／＼な物が縦横に重なつてゐたので、容易に中へ入る

ことが出来なかつた。此方笠間君の方も、漸く近途を發見し、高田訓導が先導で、神崎石井石垣小橋の諸君に、再び登校した松村中澤二氏も加はつて、板を剥ぎ、横木を折つたりして、居る所を見つけたが、矢張り大きな梁や、其他材料が重なり合つて、到底徒手では如何ともする事が出来なかつた。鋸があれば中へ入れるのだがと、一同は探し廻つたが、どこにも見當らなかつた。其中に石井訓導は大急ぎで、自宅に取りに歸つた。一同は詮方なく石井訓導の歸るのを待つばかりであつた。東北西の火勢は容赦なく近づいて来る。氣が氣ではない。其時佐々木訓導は、何か得物はないかと諸所を探し、物置に入つてふと棚を見ると、二三日前まで物置の修繕に来て居た大工が残して行つた鋸、金鋸があつたので、大喜びで持つて行つた。その時小原訓導もかけつけた。而し彼は、大男なので、中へ入る事は出来ない、此所は高田山口石井松村石垣等に頼み、屋上に出て来るさ、丁度松本訓導が出て来て、「オット小原さん此方を加勢してくれ」と頼まれたので、小原氏は二度運動場に下りて来ると、其處に六尺ばかりの鐵棒があつたので、それを引つさげて、松本氏の方に行つた。此所には永田佐々木の兩君が大きな障害物をのけて、段々下へ潜り込んで行く。それは中々の難工事であつた。下に川井が哀れな聲で「先生早く頼む」と叫んでゐる。上では辛うじて遁れ出て、火事見張の役を勤めて

ゐた兒童の石崎が、「先生早くしないと火が來ます。」と叫んでゐる。それを聞いて、中に居る者達は氣が氣でない。松本永田二氏は下に、佐々木石井小原三氏は上に、木と木との間に鐵棒を入れて、こち上げては下の重みを軽くし、下では其を伐りのけ、選りのけ、苦心慘憺、漸くに下の二人から「サアもう一力頼む。上の三人は「よし來た」と持ち上げた。川井が痛いといふ間もなく助け出された。此時彼方で笠間君も已に救ひ出されて、西隣廣場にゐた。思はず一同は萬歳を叫んだ。尙念の爲め下敷になつた者はないかと、大聲でよんで見たが、答へがなかつたので、一同は御眞影奉安所のある所へ駆けつけて、板を剥ぎ、横木を折り、梁木をコヂ上げて中へ潜り込む道を造つた。此時日枝第一學校の御眞影奉遷に力を盡した源波巡查も加勢してくれた。小柄の先生が中へ潜り込み、「アアここだ」と叫んだ。源波巡查は逸早く潜り込んで、兩手で高く奉安箱と、勅語膳本箱とを捧げて、萬歳裡に運動場に出て来て、本校の責任者は誰かと言つたので、小原訓導は小原と云つて、御眞影と勅語箱とを御受取した。同巡查は御眞影の護衛に來た伊勢佐木署勤務の人であつた。小原訓導は一同に向つて、「諸君も各自家庭の様子御心配であらう。教員と生徒の生命は救助し、御眞影は無事奉遷せられた。各其職責を盡されて十分であるから、速く歸つて家庭を省みられよ」と叫ん

だ。一同は互に挨拶して、家に歸つた。残つた者は永田・佐々木・高田・笠間・石垣・持塚等の諸訓導、兒童石崎・川井使丁、糸日谷夫婦と子供一人であつた。小原訓導は比較的家庭に憂ひのない佐々木訓導に、今夜の御眞影の護衛を頼んだ。佐々木訓導はその言葉に感激して、生命を賭けて引受けた。萬一不安の場合は、使丁糸日谷等を連れて、橋を渡り、南堀ノ内町子の神社附近に避難し、尙ほ危き時は、山中何處か安全な地域に避難せよと、小原訓導は言つた。そして永田・高田、其他の諸訓導、使丁等にも頼み、家へ歸つた。其後佐々木訓導等は暫く家に居たが、三方から襲ひ來る猛火迫つて來るので、頗る危険であつたので、相談の結果、高田訓導、御眞影箱を負ひ、永田訓導、勅語箱を捧持して之に従ひ、佐々木訓導は負傷兒童川井を負ひ、笠間訓導、糸日谷使丁母子、竝に兒童石崎之に付き添ひ、堀内町子の神社に避難した。岡視學其他有志から給食、給水を受けた。翌朝四時頃再び家に歸つて、昨夜來東京からかけつけた並木校長と會つて、僅かに焼け残つた物置内の一部所を調べて、其所に奉安し、一同ホット息をついた。之れよりさき糸日谷使丁は、單身學校に踏み止り、防火に盡力し、漸くに使所と物置とを残した。之れは糸日谷使丁と、近隣の鈴木・池田氏等との盡力の賜物であるとのことである。學校南方側附近の延焼を免かれたのは、蓋しこれが爲であらうと思はれる。

三〇 太田尋常高等小學校

九月一日、始業式はすみ、第二學期劈頭の希望多き職員會議も了へ、各學年の打合せ會も終つて、明日からの準備は整つたので、職員の一部は歸り、残り十餘名が職員室に雑談を交はして居た。其時である。強烈なる大震は襲來した。其瞬間はむかれる様に椅子を離れて、様子を見て居たが、益々強震となつたので、皆手近の机の下に潜つた。震動は益々強く繼續して、机は上下三四寸とも思はれる程躍り上つたので、脚をきつく抑へて之を防いだ。何の効もなかつた。壁は落ちて砂煙りが上つた。各員皆息の音をとめて、逃げ出す機會を待つてゐると、轟然たる大音響は我等の耳をつんざいた。東南校舎は倒潰したのである。ああ此次はこの棟かと思へば、生きたる心地もしなかつた。暫くして震動が少し止んだ時、一同は一齊に飛び出した。廣き運動場の中央に逃れ出た十餘名の顔色は、皆土の様であつた。續々と襲來する強き餘震に、残存の中央西北の校舎は左右に搖れて、其度にガラスが雨か霰の様に破れ落ち、今にも全潰しさうである。御眞影が全員の氣遣う所であつた。野澤・江原の兩訓導は、校長指揮の下に、開閉の自由を失つた窓をこぢあけ、奉安所たる應接室に跳り入り、之を捧持して最も安全なる運動場

中央に遷し、三名の訓導によつて御警衛申上げた。

校長は直に火の元に就いての警告を與へ、各員は特に使丁室、職員室、理科室に注意を拂つた。

震災に伴つて必然的に起る火災を懸念しつつ、倒潰校舎の屋上に上つて、附近を望見すると、早くも眼前の崖上に黒烟の上つてゐるのを見た。お三の宮道慶橋の附近にも發火し、風は頻りと此方に吹いてゐた。各員は手分けをして、重要書類の搬出にかかつた。机腰掛、箱戸棚等の顛倒して混亂したる職員室に入り込み、散亂した書類を蒐めて、學校園の一隅に徙した。

第一震で東南校舎一棟八教室は外側に向て倒潰し、階下教室に在つた机で二階の梁を支へたが、階上教室はメチャクに混亂した。殘存校舎は、五寸以内東南に向つて傾斜し、西北校舎は被害殊に大きく、階上階下の接合部はくの字形を呈した。雨天體操場は被害最も少く、壁土落ち、基石が三四寸移動したばかりであつた。校地は外柵約九十間破壊し、土留約九十間崩壊した。備品は八教室分机腰掛、黑板、教卓等破壊、樂器理科教授用具、地理標本、家事科教授用具、食器用土瓶、茶碗等、殆んど全部破壊した。

學校長が當日なされ處置は、先づ第一に御眞影と重要書類とを校舎内外に移した

ことである。校内の火の元を安全にし、校の内外の警戒にあたらした。續々と起る火災に對しては、倒潰校舎の屋上に立つて、十二分の注意を拂はせた。蓋し萬一吾校に延焼した時は、久保山一本松、境谷より、藤棚方面に至る一帯は一嘗めにされるからである。

當夜 御眞影は訓導六名を以て、運動場に警衛せしめた。

續々校庭に集る避難者に對し、夜營の個所方法につき指示した。火傷其他の外傷者に對しては、居合せたる訓導に命じ、救急藥品を以つて能ふ限り手當をなさしめた。

三三二 一本松尋常高等小學校

大震災當日、各職員は明日の授業準備を終へた後、職員會議を開いた。會議は午前十一時に終つたが、校長及び五六名の職員は、猶居残つて居た。午前十一時五十八分、轟然たる大音響と共に、猛烈な大震のために、校舎は使用に堪へざる損害を被つた。校舎の屋根瓦は五分通り振り落され、建物は全部東南に約三度傾斜し、西南に約六七寸移動し、小使室に隣接せる平家建の部分は殆ど倒潰し、其中間の物置は引き割られたるが如く押し潰され、格納品は校地外の道路迄押し出された。男女入口の玄關は全く倒潰した。校舎内部の壁は全部剥げ、室内の戸棚、本箱等は全部顛倒し、中には全く押し潰されたも

のもあつた。

御眞影及び勅語謄本奉安棚は取付の支柱離れ、本箱の顛倒せる上に落下したが、幸に内部は何等の異常はなかつた。校地は各所に龜裂を生じ、運動場の中央に設けたる煉瓦積の號令臺は崩潰した。運動場の前面東南に面した部分は、約三十間程崩潰傾斜し、隣地の庭園内に土砂を押し出した。校地の周囲の石垣は殆ど全部崩れたので、貫打棚は凡て破壊顛倒した。

零時十三分頃の第二震の直後、校長は土屋小川早苗の三訓導と共に、御眞影及び勅語謄本を運動場中央安全の箇所へ奉遷した。又潰れたる物置内からテントを取出し、學校の事務所及び重要書類の置場を作つた。腰掛及マット等を取集め、避難者の露宿所を作つた。學校附近に住んでゐた渡邊訓導の令息と令妹は、崩落した土砂のために生埋めにされたので、掘り出したが、二人とも助らなかつた。此夜は學校備品、重要書類を取まとめ、保管には全く手の付け様もなき困難を感じた。避難者は約二百餘名であつた。

三三二 稻荷臺尋常高等小學校

職員全部執務中、大地震が起つたので、急いで運動場に避難した。早くも理科室の一隅から青白い薄煙の立ち昇るを認め、すは一大事と駆け出して行つて見ると、白煙は室内に濛々と立ち籠め、藥品瓶は破碎して、四方に飛散り、劇薬が流れ出して、床を數箇所焼いてゐた。そこでピアノの覆を掛けたりして、懸命防火に努めたがなかく消えなかつた。ふと砂の有効なのに氣付いて必死となつて運んで来て、漸く消し止めた。而し再び發火する虞があるので、破れた瓶類を運動場に搬出して、漸く安堵することが出来た。此等作業中も、餘震は頻々と襲つて来て、壁土は崩れ、額面は落ち、其の間を見て、飛び入り、遂に事無きを得たのは、一に職員の努力に外ならなかつた。又類焼の恐れがあつたので、重要書類を運動場に持出した。午後六時頃危険が迫つたので、再びそれを數名の職員で、五六町はなれた裏山に運び、一夜を過す決心をした。

而し幸ひ火を免れて、僅か壁の崩壊と、運動場の一部に龜裂を生じただけで、校舎の殆んど全部が完全に残つたのは、天祐とは言へ、多數の職員が一身を犠牲にして働いたお蔭であつた。其の後避難者は續々とやつて来たので、翌二日備品類の保管、自警團の組

二五四
織、部屋の割當、宿直職員の臨時増加等の任に當り、三日始めて家に歸つた。

三三三 西前尋常高等小學校

職員會を終り、大部分は職員室で休憩中、突如大地震に襲はれた。職員は校舎外に逃るるの暇もなく、各事務用の机の下に身を潜め、暫時様子を窺つて居た。此の間に職員室の机、腰掛、本箱等は倒れ、戸棚の戸は外れて、内部の帳簿、書籍等は散亂し、壁は崩れ落ちた。稍、静まつて、一同漸く運動場に逃れた。運動場の西北隅約半坪は、一尺餘り陥落し、八角の水呑所は崩壊して居たので、地震の激烈なことに驚いた。南側校舎は北側に傾き、續々起る餘震に搖られて、今にも倒れやうとして居た。此時他の教室に居た職員も一箇所に集まつて來た。校長は危険を侵して、御眞影室に到り、御眞影を運動場に奉安して、之を警護し、各職員は手を分けて、校舎の内外を巡視し、舎内に一人の残留者もないことを確めた。後使丁室、理科戸棚等から火を發せぬ様、夫々適宜の所置をした。使丁室は第一震に倒潰し、使丁福田鐵之助は腰部を打たれたが、幸輕微の打撲傷を受け、たに過ぎなかつた。

其後再び職員を集め、協議の上、家庭に比較的係累の少い鈴木久我、犬塚の三訓導は校長と共に止まつて、御眞影の警護と、妊娠中の島津訓導の保護に任ずることとし、他の職員は一先づ歸宅の上、適當に家事を處理し、成るべく速かに再び登校することとして解散した。

かかる間に久保町及横枕方面に起つた火は、漸時勢を増し、次第に學校へ近づいて來たので、御眞影を一中校庭に奉安して、暫く様子を見て居たが、各所の火勢は漸次猛烈となる計りで、如何ともすることが出來ないと見たので、止むなく校長は島津訓導を鈴木久我、犬塚の三訓導に托し、自身は保土ヶ谷方面を経て、御眞影を自宅に奉安した。一旦歸宅した職員中、家事の始末を付けて再び登校せんとしたも者少くなかつたが、多くは途中猛火に阻まれて、空しく引返した。既に内田、吉川、平井の諸訓導が學校附近まで來たのみであつた。辛うじて倒壊を免れた校舎は、午後四時半頃、遂に猛火に包まれて、全部焼失の厄に遭つてしまつた。

三三四 岡野尋常高等小學校

九月一日は愈、暑中休暇も終つて、第二學期の授業を開始すべき日である。始業式も無事に済んで、兒童は、八時頃にはすつかり歸つてしまつた。昨日職員會で決めた通り、

從來職員は各教室に散在して居つたのを、今度は又再び職員室に集合することになつて、卓子や本箱などを持運び、舎内の整頓もすつかり出来たから、十時頃になると職員もぼつ／＼退出するものもあつた。居残つてゐたのは田川・牧野・柴山・中村・岡部・北村・長江・鈴木・島津の諸氏で、暑いので上衣を椅子に引掛け、或は事務を執り、或は雑談に耽つてゐると、大地震が襲來した。氣早な者は忽ち外に飛び出したが、遅い者は逃げ場を失つて、校舎の倒れた下から漸く這ひ出した。運動場の真中に出ると、運動場は數十條の龜裂を生じ、泥水を噴出して、四邊は水溜りとなつてゐた。四つ這になつて漸く裏門に近づいた頃、校舎は中央から地煙を立てて倒れた。早くも火は西側の理科室から發した。すは一大事——と消火に努めんとしたが、如何せん水はなし、殆んど手のつけ様がなかつた。折しも二階の理科室の中に新學期の準備に夢中になつてゐた岡部訓導は地震と感づいた時、教室の中央まで来て見たものの、逃げ場がないので、やむなく窓から外に飛び降りた。其飛び降りようとする刹那に、足は既に地面を踏んで居た。其の時は夢中であつたが、後で考へれば、階下が潰れたために二階が低くなつたからである。

本校々舎はもと「コ」の字形の本造二階建の建坪九二六坪で、東の袖が小使室・裁縫室から雨天體操場に連続し、西側の袖の端の二階が理科室になつて居た。大正九年十一月に工費拾五萬壹千九百圓で建て、未だ新らしいもので、敷地は岡野町一、一五六・一、三五六番地に當つた地である。元此は岡野新田といふ埋立地であつたから、地盤は極めて弱く、その爲め校舎は倒潰したのでもあらう。其倒潰した有様は、中央から兩袖は割合に高く残つて居た。殊に雨天體操場はそつくり其儘の様であつたが、床板は波を打つた様に凹凸を生じ、正面に掲げてあつた開校當時の進徳修業と書いた本縣知事井上孝哉氏筆の額面が獨り淋しく架つてゐた。

失火は理科用藥品からで、火の廻り方も風に煽られて、随分早かつた。雨天體操場から運動場に出ようとしても、既に火は西側の數箇教室を粘めてゐるので、熱くてとても出られなかつた。重要書類や、必需品のある中央の各室は、殊に甚しく潰れてゐるから、どうしても中に這入り様がなく、見る／＼總てのものを燃やしてしまつた。新林・横山の兩訓導は、雨天體操場までは這入つたが、如何とも手のつけ様なく、來合せた柴山訓導と共に傍觀してゐただけのものであつた。危きを免れて校舎より逃げ出した職員も、同様の手のつけようなく傍觀してゐた。發火より約三十分間位で、校舎は全く灰燼に歸し、久芳前校長初め二十數名の職員が、開校以來四箇年の間設備の完成と、教育の徹底とに努め、漸く一廉の學校になりかけた矢先、此災厄に遭つて、總てを烏有に歸したのは實に

残念である。久芳前校長は全校焼失については、當日早速教育課長までその旨報告した。本校にはまだ勅語の謄本と御眞影の御下賜がなかつた。校舎内に於ては一名の死傷者を出さず済んだ。しかし、後になつて調べると、職員中には一名の死傷も無かつたが、使丁一名兒童十一名の死者を出したことが分つた。

三五 神奈川尋常高等小學校

校長は椅子を離れて立ち上がり、職員室に入つて行くと同時に、大地震は襲來した。室内の器物は一齊に轉倒した。校長は窓際より數へて三ツ目のテーブルの下に潜つた一刹那、大音響と共に二階建指金型の木造大校舎は脆くも倒潰し、東側は東に、南側は南に豫定の方向に瓦解した。壓死を免れた校長は、意を決し、そろ／＼體を起して、左右にある支障物に兩腕をかけ、渾身の力をこめて躍り出した。此時第二震襲來したが、恐れては居られないので、散々に破壊した校長室へ闖入し、有合した鐵瓶を取るより早く火鉢に傾けた。更に職員室の大火鉢を見ると、大鐵瓶がひっくり返つて、火は消えて居た。横屋北條の兩女訓導は、宿直室の寢臺下に潜つて居て、倒潰の爲めに顔面を壓し付けられたが、蒲團と寢臺の鐵欄に支へられ、負傷は免れた。左右が暗く方角を失ひ、僅か

に一條の光を便りに、掻き廻りながら、漸くの事で匍ふて出て來た。顔色蒼く心神共に疲れ切つて、歩くのもやつとなので、氣絶でもしては一大事だから、いろ／＼勵まして、元氣を取り返へさせた。安仲訓導は背部を打たれたが、急所をはずれ、職員室内を匍ひ廻り、救ひを求めて居た。「若い者は自力に頼れ、横尾も北條も自分で脱け出した。」大聲で叫んで元氣を附けた。やがて彼は難關を突破し、他力に頼らず、遂に活路を開いて出て來た。

並木訓導は窓際に近いテーブルに執務中、一瞬の間に五寸角の大柱が倒れて來て、左腕は無慘にも確かと押へ付けられた。「腕をはさまれてゐる助けてくれ」と悲鳴を擧げて居る。校長は運動場に走り出て、長九尺棒を二本小脇に引抱へ來り、當の棒を挺として持ち上げやうとしても駄目であつた。二度切齒してやつて見たが、矢張甲斐がなかつた。「鋸」と校長が大聲で呼んだので、横尾北條の女訓導は京濱電車の高土手を匍ひ昇り飛び下り、「鋸、鋸」と連呼したが、更に應すべき人がない。「先生が一人助かるのだから」と懇願すると、「なに先生が」と叫んで、大鋸を出して呉れた者があつた。幸來合せたる寒川訓導が活動を始めた。水谷首席訓導は辭去して、歸宅の途中、仲木戸停留場の石段を昇り終つた時、突然大地が震動し始めたので、危く倒れかかつた。左を顧ると、黄塵天

に満ち、神奈川小學校の姿は薄く見えて居たので、家に歸る時ではないと悟つて、再び引つ返して、學校に來た。手と足とで這ふ様にして歸校した。鋸は手に入るし加勢は出來たので、一同力を得た。水谷首席訓導は大活動をした。倒れた柱を真中から切り障碍物を切り除けた。棒を二本重ねて突込んで、滿身の力を入れてこじり上げた。その機勢で並木訓導の右腕は柱から取れた。新井女教員は二階の教室でミシン裁縫中、逃げるも自由ならず、校舎と共に倒れる途端、幸ひ屋根が口を開き、逃路を與へてくれたので無事に裏庭に飛び降りた。袴を鍵裂したるばかりで、負傷もしなかつた。三杉女訓導の生死は、一同より深く憂慮せられたるも、同氏は直覺的の氣轉に、出口に方向變換したるため、危き生命を取り留め、一心不亂に自宅に歸り、老母を慰めることが出來たとの吉報に接して安堵した。

當日は第二學期始業日だったので、式を舉げ、校長の訓話があつて、午前十時迄に兒童は全部退散せしめたことは、何よりの幸であつた。職員二十餘名は午前十一時半迄に歸つたので、災厄に遭つた教員は校長外六名であつた。引返して共力奮闘したる者は、二名である。全市が火の海に化した時には、教員は自由行動を取つたが、校長は只一人居残つた。

校長は獲物を提げて、倒壊校舎の胴腹に入口を截り明けて火災の襲來に注意しつつ、目的に向つて猛進した。御眞影奉置所はいつこかと探したが、思つたより奥深かつた。梁が落ち重なつて書類箱等がちらばつてゐる所に不思議にも奉置所はあつた。漸く奉置所に近づいて、謹しんで奉遷の止むなきを言上し、勅語謄本と共に御眞影を袱紗に包み、捧持して校長の私宅に奉遷した。そのときの校長の心情は、感泣以外何物もなかつた。絶大威力の天災に遭遇して、僅かにテーブルの下に跼まつて、萬死に一生を得、職責を果して最後に妻子の安否を見た校長の行爲は、實に立派なものである。尙校長は日光は如何、東京は如何と御案じ申して居た。

二六六 浦島尋常高等小學校

一生涯に復さない一大悲劇が産み出された一瞬間であつた。此日は鎮守祭のお休み日であつたが、職員は夏休中から著手されてゐた教具の製作のため、四五名が職員室で一心に働いてゐた。そろ／＼食事にするかなと、同僚が言つてゐるのを、聞きながら、私が體をテーブルから離れたその一刹那、グラ／＼／＼と大きな動搖と鳴動とが來た。

「地震、地震」

そこにゐた者達の姿は、いつもの地震とは異ふやうな気がしたのであつた。私は最初ハッと思つた。たいしたことはあるまいと、テールブルの傍で躊躇してゐたが、すぐと外側の窓に飛び上つて。柱につかまつて形勢を窺つてゐた。もつと激しくなつてきたら、柵を乗越して道路に飛下りる積なのである。

その時向側の倉庫裏の空地に、女使丁が泣きわめく子供をかばひながら泣いてゐた。日直の女先生もふるへながら窓際に立つてゐる。二三の人が混つて、何れも青い不安な顔をして語り合つてゐる。乗つてゐる窓がゆらくして六七秒間の後……大音響と共に表玄關の廂が微塵になつて落ちた。一同は窓から飛び下りて道路へ飛び出した。

私は仲間を探すため、使丁室の入口から這ふて運動場へとぬけた。そこで不安な顔と顔とが見較べられて、度膽をぬかれたことを、無言の中にいひかはされてゐた。復もグラ／＼足元の大地が波をうつたと思ふと、大龜裂が生じた。校舎がつぶれでもしたら、此處に居るのは危険だ。何時まで揺りつづけることか。今に大地が抜けるのではないかと、前途甚だ不安を覚えざるを得なかつた。

御眞影も勅語も奉戴されてゐなかつたので、兎に角校具を持出さうといふことにな

つた。せめては重要書類だけでも、職員室へとすすんだ。近よつて見ると廊下側の柱は全部折れて、三四十度に傾斜してゐる。天井は今にも崩れおちさうで有る。天井と床との間は鰐の口のやうにももの凄く見える。勇氣を起して、幾度かはいつたが、小さな餘震にでも脅かされたやうな氣で、すぐ飛出すので、到頭何物をも持出し得なかつた。火さへ出さなければ、品物を急いで持出すこともなからうと考へ直した。それで理科室その他の發火の虞がある要所々々を檢めることにした。

それで一先づ引上げて、踏切まで出ると、背後から「先生々々、學校は焼けます。製綱が火になりました」と、命から／＼ぬけ出した相な職工らしい男が注意してくれた。言はれるまま、つと見ると、黒煙濛々として早くも紅蓮の炎は工場を焔めつつある。一同は再び職員室にとつて返した。今度は道路側から柵を破り、窓から闖入した。

皆々猿渡して取出す手配についた。這入つて見ると戸柵は破れて、中味は八方に散亂して雜然名狀すべからずといふ様である。戸柵を起す勇氣もなければ、品物を鑑別する餘裕も勿論ない。學籍簿を手はじめに、手當次第に持出された。午後三時恨めしくも製綱會社の猛火は校舎を焼きつくしてしまつた。

(以上震災と教育)

公立小學校被害一覽

(校名)	(被害程度)	(損害額)	(職員)	(兒童)	(災前)	(災後)	(災前)	(災後)
橫濱小學校	全部燒	二九〇〇〇	—	八五	三三	三	一一九	四五四
老松小學校	全部燒	一九七〇〇	—	四〇	三〇	三	一三九	五三五
南吉田第二小學校	全部燒	二〇〇七〇〇	—	五〇	三三	三	一七九	八〇〇
日枝第一小學校	全部燒	一七七八〇〇	—	二五	三三	三	一七九	六八〇
南太田小學校	全部燒	一八二〇〇〇	—	二	三三	三	一七九	六八〇
平樂小學校	全部燒	一六一〇〇〇	—	二	三三	三	一七九	六八〇
江吾田小學校	全部燒	八二五〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
戶部小學校	全部燒	二五五〇〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
西戶部小學校	全部燒	一四八〇〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
西平沼小學校	全部燒	一八四九〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
宮谷小學校	全部燒	六五〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
青木小學校	全部燒	六五九〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
二谷小學校	全部燒	二二〇〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
子安小學校	全部燒	九五五〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
本方小學校	全部燒	一四九七〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
北岡小學校	全部燒	一四九七〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇
大岡小學校	全部燒	一四九七〇〇	—	一	三三	三	一七九	六八〇

公立小學校被害一覽

(校名)	(被害程度)	(損害額)	(職員)	(兒童)	(災前)	(災後)	(災前)	(災後)
本町小學校	全部燒	三三三二〇〇	—	八四	二四	三	一二六	五〇〇
吉田小學校	全部燒	二六六〇〇〇	—	三七	三六	三	一二六	五〇〇
壽川小學校	全部燒	七五〇〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
石川小學校	全部燒	二八〇〇〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
元街小學校	全部燒	二七、六〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
立野小學校	全部燒	二四、二〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
大鳥小學校	全部燒	一八、七〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
根岸小學校	全部燒	一〇、〇〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
磯子小學校	全部燒	一七、八〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
南吉田第一小學校	全部燒	一九、八〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
南吉田第三小學校	全部燒	二九、〇〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
日枝第二小學校	全部燒	二七、九〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
太田小學校	全部燒	一九、五〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
一本松小學校	全部燒	八七、〇〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
稻荷臺小學校	全部燒	四一、六〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
西前小學校	全部燒	一六、五〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
岡野小學校	全部燒	二〇、七〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
神奈川小學校	全部燒	一九、五〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
浦島小學校	全部燒	二四、三九〇〇	—	三三	三五	三	一二六	五〇〇
(計)		五九二、六〇〇	—	九〇三	九九七	二六五	五四、九〇二	三、七五二

第三節 私立學校

(災前は八月末、災後は十二月一日調とす)

(校名)	(程度)	(災害)	(災前)級	(災後)級	(災前)生徒	(災後)生徒	(授業開始月日)	(摘要)
本牧中學校	半	潰	八	四	三六九	二八三	十、十五	
中學關東學院	全	潰	三	〇	五四六	三七三	十、十五	
淺野綜合中學校	全	潰	二	〇	四三	三〇四	十、十五	
神奈川高等女學校	傾	斜	二	〇	四三	三〇四	十、十五	
橫濱高等女學校	全	燒	一	〇	八四	七五	十、十一	
橫濱英和女學校	半	潰	一	〇	八〇	三九	十一、十二	卒業すべき組は十一、十五授業開始
フェリス英和女學校	全	燒	二	〇	三〇六	二四〇	十一、十二	
共立女學校	同	上	二	〇	三〇三	四〇	十一、十二	
紅蘭女學校	同	上	二	〇	三〇三	四〇	十一、十二	
搜真女學校	傾	斜	九	一	三三	三六	十一、十二	
日之出女學校	全	燒	四	二	二〇	四	十一、十二	
光華女學校	全	損	九	一	二〇	四	十一、十二	
橫濱裁縫女學校	全	燒	〇	〇	二〇	四	十一、十二	
戸部裁縫女學校	同	上	〇	〇	二〇	四	十一、十二	
酒井助産婦學校	同	上	〇	〇	二〇	四	十一、十二	
橫濱英語學校	半	燒	〇	〇	二〇	四	十一、十二	
三留義塾	破	損	〇	〇	二〇	四	十一、十二	
大同學校	全	燒	〇	〇	二〇	四	十一、十二	十三年二月には開校の見込立たざりき

備考 私立校は凡て生徒百名以上を有せる者のみを掲ぐ

中華學校	同	上	二七	二七	同	同	同	十三年二月には未開校の見込立たざりき
華僑學校	同	上	二七	二七	同	同	同	同
志成學校	同	上	二七	二七	同	同	同	同

第四節 橫濱市圖書館

橫濱市圖書館の建設は、市民多年の希望に基き、大正八年十二月中、本市開港六十年及び自治制施行三十年の記念として、久保田前市長が計畫せられしに起原し、本建築出來まで圖書の蒐集、各般の準備に従事する外、兎に角其の側ら公衆に對して讀書の便を興へんと、大正十年六月より、橫濱公園内の圖書館建設事務所を假閱覽所にあてて、内外の閱覽を公開し、同十二年八月には、藏書數既に約一萬四千冊に達し、不日市會に本建築著工の議案提出せられんとした瀬戸ぎはに至り、突然古今未曾有の大震火災に遭遇し、建

私立學校 橫濱市圖書館

設一切の計畫も準備も全然根底より覆滅せられたのは、意外とも遺憾とも、何とも言明のなしやう無き次第である。

當日は曉來蒸暑く、然も強風吹き荒み、驟雨至り、幸に九時頃に雨歇み、青空を見るに至つたが、風は尙ほ穩かならず、午前八時平常の如く閱覽を開始し、閱覽人は陸續入場して、直ちに満員を告げ、館員は夫々分擔の職務に就いて居た。既にして正午間近と思つた刹那、何處よりともなく雷鳴の如き異様の音響が起ると同時に、大地は突然波打つ如くに大震動を始め、次に上下動に數回烈しく激動して、今にも家屋倒壊し、棟梁墜落し來らんかと疑はれ、無意識に閱覽室に向つて、再三「早く逃ろ」と絶叫し、デスクの下に屈みて、こなれば假令へ梁木が落ち來るとも多少安全と、暫時辛棒した。時に正午過ぎであつた。震動少しく止むで回顧すれば、圖書室二室に装置の書架八列は悉く倒壊し、之に整置の圖書は、恰も洪水の氾濫したるが如く、室内に散亂横溢し、閱覽室及び事務室に据付けの貸付臺、新著書架、閱覽用目錄箱、雜誌棚、事務用戸棚等、一として顛倒せぬものはない。然して感心なりしは、此の間に處し圖書を貸付係に返戻して行つた閱覽者もあつたが、多數は卓上に遺したる儘、戸口又は窓より飛び出して逃れ去つた。尙ほ閱覽人及び館員にも一人の怪我人がなかつたのは、寔に不幸中の幸であつた。

激震と同時に、水道の鐵管が破裂したとの事で、建物北東側の周圍及び湯沸所便所に濁流滔々と襲來して、忽ち脛を没する程となつた。又向側市役所裏手と、外に三箇所より火の手揚り、スハ火事との報知に再び喫驚したが、市役所は煉瓦造の大建物なれば、火勢は之に支へられて焼け止まり、殊に道路を隔てて居れば、延焼は多分免かるだらうと推測し、先づ館員を督して、壁間に圖書器具等を取片付けさせ、各室の通路を開き居る中、意外にも豊國橋の發火は擴大し來り、加ふるに南西の風力一層強烈となつて、港橋向ふより火片紛々飛來し、震動で破壊せし戸口竝に窓の透間より舞込み、俄かに危険状態を呈したので、各室を駆け廻はつて銳意之が防禦に努めた際、道路に面した西側、社會課分室内よりいつしか發火し、同時に南側の窓下に何人が持込んだものか、箆筒の抽斗が二個あつて、其の内の衣類に飛火して、炎々燃え上り、其火焰は軒先の破れ目に移つて燃え出した。是に至つて最早一つの消防器具も持たぬ者には、何等施すべき手段なく、且つ煙は既に室内に滿ち、火氣は身に迫ると云ふ有様であるので、無限の憾をいだいて少許の書類と館印等を携帶し、公園の中央さして避難した。

我が假閱覽所はかく不可抗力の火災のために遂に焼失した。其の損害高は建物圖書備品、其他、閱覽用器械器具を合せて、概算五萬圓に上る。建設資金寄附者に對し、將

た圖書寄贈者に對しては、甚だ遺憾の意を表する次第であるが、幸に未だ本建築に著手なき前だけに、其損害の僅少であつたのはせめてもの幸にして、之を以て諒承を請ふの外はない。藏書は前陳の如く三年來蒐集して、漸く一萬數千冊に達した際であつたのに全部燼滅に歸したのは、本市に取つて眞に一大恨事であつた。今更言ふも死兒の齡を數ふるものであるが、この焼失圖書中には和漢書の部では、蒐集に多少苦心せしものがあり、殊に岡野町石川ゆき子夫人の寄贈に係る和装の群書類從六百六十六冊の如きは領收して二十三日目に焼けたのは、洵にお氣の毒に堪へぬのである。又洋書の部には、千八百年より同五十年まで續刊された佛語註釋蘭人ジャン・コッブス氏著のバタヴィア植物史十冊、千八百四十年頃の發刊と思はれた伊太利文の歐洲著名の寺院建築調査書の如き稀觀のものもあつた。

借圖書館の復舊は、片時も忽緒に附すべきに非ざるは勿論にして、然も災後衣食住の救護は行届きたりとしても、耳目を悦はせ又は精神的に慰安を與ふる機關は一つもなく、又二つには荒びたる人心の安定を計るには、此際讀書にしくもの無しと信じ、取り敢ず收容バラック二三箇所、圖書閱覽所の急設を提案し、先づ圖書の蒐集に著手したが、何分京濱間の重なる書店は殆んど悉く慘禍にかかり、圖書の蒐集に非常の困難を極めた

然るに佐賀圖書館、大阪市立圖書館等に於て此の間の事情を洞察し、深甚の同情を寄せられて、本館救援の趣意書、ポスター等を作つて、其地方々々に於て廣く一般公衆より募集し、多數の圖書雜誌を寄贈せられ、又罹災を免かれた縣下及市内の篤志家諸氏よりも寄贈を辱うせしを以て、右の中より閱覽用に適するものを選択して、基礎本となし、之に購入圖書を加へて、十一月下旬、市内中村町石油倉庫跡の收容バラック第十三號内に閱覽所を假設し、十二月十六日より閱覽を開始した他の場所にも開設の見込を以て、多少奔走したが、何れのバラックも使用は既に約束済であつたので、止を得ず中止した。

引續き本年一月、今の假本館が公園内に建築せらるることになつて、直ちに著工され、三月二十日に竣工した。同建物は念入のトタン葺バラック式平家建四十八坪七合五勺にして、内閱覽室十八坪、圖書室兼事務室十八坪、玄關兒童室七坪、閱覽人休憩室三坪其他は使丁室及製本室をかねた物置であつて、あまり廣くはないが、然し採光通風の點には注意を拂ひ、冬季は暖爐を据付け、其他讀書子の出入して差支なき丈の設備は施してある。又閱覽人は兒童を合せて、同時に四十餘人を容ることが出来る。藏書は全部震災後に蒐集したものであつて、十一月末現在にて七千四百餘冊となり、(内寄贈書五千四百餘冊、購入書二千冊)是の閱覽用に備付けたものは四千餘冊である。其他は兒

童圖書分館備付竝に整理未済の和洋書などであるから、經濟の許す限り、時代に順應の新刊書は勿論、閲覧人に必要と認める参考書等の備付けに努めて居る。和漢書の整理が一と通り終れば、洋書も備付けて閲覧に供する見込みであるが、手不足のため、諸事遅延するのは已むを得ぬ次第である。

爰に記事の順序として、閲覧状況を一言すると、客臘より本年三月末に至る、中村町閲覧所に於ける開館日數九十日間の閲覧人員は、二千九百十人、貸付圖書冊數五千四百六十六冊、四月十六日、公園内假本館に移轉より十一月末に至る開館日數は、二百十三日、内外閲覧人一萬五千二百十五人、一日平均七十七人、之に貸付の圖書冊數は五萬二千八百十九冊、一日平均二百四冊、一人平均二冊七分の割合であつて、この中、館外閲覧は九月一日より復舊施行し、日尙ほ淺きため、帶出承認を與へた人員七十餘人で、三箇月間の貸付圖書は千七百七十一冊である。又中村町閲覧所も分館として、其後も引續き開所し、四月以來の閲覧人は累計五千三百五十餘人である。尤も同所は館員の都合が出来ぬので、毎日半日の開館である。

閲覧人に就き震災後特殊の現象と認めらるべき事柄は、普通圖書館には最多數である學生の數に比較して、商工業者、會社員、職工、船員、無職業者等の數が著しく増加し、去る十月十一日の如きは、統計面に學生の數を超過せる事實が現れ來たつた事である。即ち十月は學生二割四分、商工業者二割九分、無職業者三割一分、十一月は學生二割、商工業者三割三分、無職業者三割と云ふ計數を示して居る。是の二箇月は短日となり、學生は來會の餘暇なきに反して、一面商工業者、會社員、勞働者等が、近來智識慾増進し、圖書館の利用を認め來つた結果、是の如く増進したに相違はないが、是等階級の人々にして、僅少の時間を繰合せ、來館するに至るやうになつたのは、圖書館のために、最も悦ぶべき現象にして、社會教育に對する圖書館の効用が一層擴充されたる一つの例證と看らるるのである。

(震災と教育)

第四章 社會救濟事業團體

九月一日の震災に因りて、社會事業施設の如きは殆ど全滅の悲運に遭遇し、斯業關係者をして再び起つ能はざるべしと落膽せしめたが、幸にも事業は全く此豫想に反し、却つて一般事業に先んじ、災厄後一年有餘にして、既に其の大體を復興することを得た。今左の各事業の被害復興に就いて其の概要を述べんとす。

一 横濱孤兒院

南太田町字庚耕地一四五九番地

震災の爲め院舎五棟、百七十九坪全潰し、十三棟二百二十四坪半潰し、其損害見積高は金貳萬千參百圓である。院兒百五十名を收容して居たが、屋舎の倒潰破損に因りて、其大半は一時他に避難せしめて置いたが、其後半潰屋舎の應急修理が出来たので、彼等は歸院せしめ、現在は七十名を算して居る。此外に里預中の者八十名、業務修習の爲め他に委託して有る者九十名ある。

二 堇女學校

山手町 紅蘭女學校内

損害程度は全潰全焼であつて、死者は合計三十六名、負傷者七名であつた。損害見積高は金七萬參千九百五拾圓で、震災直後は焼残りたる山手外人學校の一部を借受け、此處に一時孤兒を收容した。

三 私立尋常惠華學院

中村町中之丸二〇〇番地

震災の爲め校舎二棟(四十坪)半潰したが、其後復興準備中で、未だ事業を開始するに至らない。

四 平沼小學校

南太田町庚耕地一六〇五番地

損害程度は校舎三教室半潰、三教室全潰、其他教員室使丁室大破損をした。其損害見積高は校舎金六千五百八拾圓である。應急施設としては破損せる三教室に兒童百六十七名を收容し、二部教授をしつつある。

五 私立尋常隣德小學校

淺間町字鹿島六七五番地

損害は全潰四棟、其延坪百十九坪、破損二棟、此建坪八十四坪、損害見積高は合計金壹萬

堇女學校

私立尋常惠華學院

平沼小學校

私立尋常隣德小學校

參千四百圓である。校長木村坦平氏が壓死したので、一時授業を中止して居たが、在籍児童の家庭は案外被害少く、従つて他に移轉せるものも極めて少數に過ぎないので、皆一日も早く授業を希望して居たから、震後取敢えず残存せる三教室を修繕して、十月十五日より二部教授を始めた。其後小使室児童室出入口、應接室を建直し、十二月中旬縣社會課より木材及亞鉛板を支給せられ、倒潰校舎の再築及び多年希望であつた。児童浴場をも設置するを得た。震後開港の時は児童數二百五十名であつた所、十三年四月に二百八十二名に達した。

六 警醒學校附屬兒童教育所

中村町二二九〇番地

校舎三分の二即ち幼稚部は全潰し、他の三分の一即ち小學校部は半ば傾斜した。但し倒潰家屋の木材は大半掠奪せられた。損害見込高は金壹萬貳千圓である。震後一時事業を休止したが、其後縣より木材亞鉛板等を給與せられ、板校舎を建設し、十三年二月から開所した。但し小學部は廢止し、託兒事業のみに従事し、名稱を中村愛兒園と改めた。

七 浦島保育院

神奈川町字浦島丘一六〇〇番地之一

損害程度は建物二棟延坪二百三十一坪全焼した。それが復舊費見積高は金壹萬七百七拾參圓參拾貳錢である。應急施設としては本縣の紹介により兵庫縣救護團の寄贈にて、建坪六十七坪の假屋舎を建設することを得、十一月二十日より開所し、日々百三十餘名の児童を收容してゐた。其後救護事務局及び大震災善後會から復興資金を給與せられたので直に、院舎の再築を企圖し大正十三年十月竣工した。

八 明德學園

南太田富士見耕地二一〇三番地

損害程度は敷地一部龜裂、建物全潰、備品類大半使用に堪へない位で、其見積價額は約壹萬圓である。震後一時之を抛棄して在つたが、縣から木材及び亞鉛板を、救護事務局から多數の復興資金を下附せられたので、十三年八月園舎復舊工事に著手し、十一月落成し、同月二十六日より事業を開始した。現在夜學部生徒八十二名、裁縫部生徒十五名で、日曜學校は毎回七十名内外の出席を見るところである。

九 横濱保育院

久保町字大谷七七二

震災前は西戸部町西ノ原に居たのである。被害の程度は建物二棟七十五坪全焼したが、見積額は金壹萬壹千貳百圓である。應急施設としては、本縣の紹介により兵庫縣救援團の寄贈に從來の建物と同坪數のバラックを建築することを得、十一月二十日より開所した。十二年末、出席兒童數僅に三十六名に過ぎなかつたが、十三年度に激増し、日々九十餘名を收容するに至つた。其後救護事務局及び善後會より復興資金を給與されたので、院舎の再築を圖り、渡邊利二郎氏より寄附された現在地に新院舎が出来上つた。時に十三年十月二十六日である。

一〇 相澤託兒園

根岸町三一八八番地

損害程度は二階建木造家屋五十坪全部倒潰し、木材は大半掠奪せられ、復舊工事に使用し得る分は、全體の四分の一に過ぎなかつた。損害見積額は約金壹萬圓である。應急施設としては、附近住民は比較的被害程度少く、従つて皆彼等兒童の委託を希望せるを以て、本縣より支給された材料により近く工を興し、假屋舎を建築し、十三年三月一日

から開所し、兒童を收容すること百十七名である。

一一 神奈川縣佛教少年保護會

大岡町二三二二番地

損害程度は新築中の會館全潰二十八坪、假事務所類焼し、其損害見積高金壹萬貳千五百圓である。それが應急施設としては、震災後一箇月間保護兒童を其家に歸らしめ、或は就職せしめ、病者は一時救護團に預け、事業復活方法に主力を注いだ、十一月下旬再築に着手し、十三年二月落成したので、新に兒童相談部、教化講演部を設置し、各種の講話會等を開催する事となつた。

一二 婦人矯風會横濱支部

蓬萊町一丁目メソヂスト教會内

基督教青年會館階下の一室を借受け業務に充て居たのであるが、十二年の大震災に全焼の厄に遭つたので、現在の處へ移轉した。十二年十月十五日から一箇月間、馬車道に無料休息所を設置し、茶菓子を呈した。十二月山室軍平氏を聘し、復興演說會を開き、十三年二月、基督教聯合會と提携し、基督教青年會館に於て、二日に涉り廢娼運動に關する講演會を開催し、遊廓移轉に就き請願書を知事に提出した。次いで横濱婦人聯合會に

横濱保育院

相澤託兒園

神奈川縣佛教少年保護會

婦人矯風會横濱支部

加盟し、乳兒保健の爲めミルクを配給した。

二八〇

一三 横濱家庭學園

保土ヶ谷町帷子二〇八二番地

損害程度は家屋倒潰せるもの二棟、家屋傾斜甚しきもの一棟、家屋屋根及壁の破損せるもの二棟、外に家屋焼失せるもの一棟、即ち新港税關構外賣店であつた。其損害見積高は合計金壹萬六千八百圓である。應急施設としては、本縣の紹介により大阪府救護團の寄贈にて假屋舎一棟を建築し得たに依り、是を講堂、教室、家族舎に使用し、全潰せる建物は一時取片づけ、半潰家屋は僅に修繕し、其儘使用して居る。十三年六月末現在の園兒は六十五名である。

一四 横濱訓育院

根岸町字竹ノ丸三四一四番地

損害程度は寄宿舎木造平家一棟倒潰、消毒所木造平家一棟倒潰、校舎木造二階建一棟瓦及壁落ち、柱及建具類大破損をした。器具機械等は大半破損又は紛失した。損害見積高は合計金四千七百五拾圓である。災後一時事業を休止して居たが、十月十五日から大型天幕二張を運動場に設置し、一を教室、一を寄宿舎に充用し、十二月一日より授業を開始した。次いで校舎百坪、寄宿舎四十四坪、其他六十一坪の再築工事に著手し、十三年十月竣功した。

一五 横濱盲人學校

根岸町字上四六四番地

震災前までは南吉田町字南五ツ目に居たのであるが、震災に因りて校舎及附屬建物全潰全焼した。其損害見積高合計金壹萬八千圓程である。市内中村町の公設バラック第十三號舎の一部を借用し、十一月二十六日より辛うじて授業を開始した。其後本縣から假校舎建築材料として木材、亜鉛板を支給せられたので、假校舎一棟の建築に着手し、翌十三年三月落成した。次いで更に文部省の恩典に依り、低利資金を借入れ、現在の所へ新築移轉した。四月末日收容の生徒總數は四十名である。

一六 神奈川縣佛教慈德會

根岸町二〇一番地

損害程度は收容場一棟、建坪十六棟は半潰し、事務所一棟、建坪四十五坪は、傾斜大破損をした。其損害高は合計金壹千參百七圓貳拾五錢である。一時其儘に使用し、被保護者其家族及び其他の避難民を收容して居た。其後更に一般救濟事務に従事しつつ事

業を繼續して居たが、後新に授産部を設置し、先づ活版所を經營し、本會の宣傳書其他の印刷を爲すこととなり、特に收容者の就職不能なる者は此處に就職せしむる様にした。

一七 修道保護會

根岸町七三六番地

被害程度は建物二棟總坪數三十九坪が半潰し、傾斜頗る甚しく、屋根周圍の壁總て破壊し、根本的改築するにあらざれば使用に堪へざるものとなつた。其損害見積高は金六千貳百四圓五拾錢である。應急施設としては庭前天幕を張り救護に努力したが、其後救護事務局から木材の配給を受けたので、直に半潰家屋に修理を加へ、事務復舊を圖つた。即ち收容保護一時宿泊職員紹介金品給與等迄百數十件に及んだ。

一八 根岸力行舍

根岸町一六〇番地

損害程度は建物全部四棟全潰し、其損害見積高は金八千八百八拾圓である。應急施設としては、約十坪の假小屋を急設し、事務を繼續した。

一九 横濱基督教青年會

常盤町一丁目公園前

會館損害程度は第四階の一部を除く外窓、漆喰及銃器器具、圖書書類等全部焼失し、其他隣地に所有せる附屬日本建家屋四棟全焼した。其損害見積高は約拾萬圓である。應急施設としては、殘存せる部分を其儘使用し、職員及び臨時委員を設け、罹災市民のため救護事務に従事した。其後は四階に外人宿泊所を設け、次いで會同を失へる教會に禮拜堂に提供し、或は大音樂會、大演藝會等を開いて、市民慰安の道を講じ、或は教育部を復興し、或は市内教會と聯合事業に著手し、警察官、消防員の爲めに慰安會を催し、市民的的向上を圖らんとして、市民大學講座を開設した。

二〇 横濱基督教女子青年會

太田町六丁目一〇四番地

本町六丁目八十四番地に會館を置き、北仲通五丁目日本婦人寄宿舎を設け、山手五十五番に外國婦人寄宿舎を置いて在つたが、震災に因りて皆焼失し、本牧町字原休養所は全潰した。其損害見積高は金參萬圓である。震災後は基督教青年會の焼失殘存せる二階の一部を借受け、事業を繼續し、次いで太田町五丁目の天幕内に假事務所を設け、罹災市民救濟の爲め努力して居たが、又同時に横濱聯合婦人會及び神奈川縣乳兒保護協會事務所を併置し、罹災民救助、乳兒保護の爲め活動した。又新山下町に小規模の婦女子及兒童向の隣保事業を開始した。十三年三月末、現在の地に假會館を建築したの

で、直に教育部及宗教部を開始した。次いで本牧町字八王子に一家を借受け、職業婦人及一般婦人の爲めに休養所及び水泳所に充てしめた。

二二 壽 保 育 園

壽町二丁目八十五番地

横濱パンチスト教會の附屬事業として、初め幼稚園を開く目的にて、階下に之が適當の施設を爲したが、まだ開園に至らず、全焼の厄に遭うた。併し幸に建物の外廊だけ残存したので、内部に修理を加へ、十三年四月更めて此所に託兒所を開いた。

二三 愛國婦人會神奈川支部

兒童健康相談所

伊勢町二丁目一四番地

赤十字社神奈川縣支部事務所内の一部を借用して開いて居たのであるが、震災の爲めに全焼に遭ひ、其後は未だ開所に至らない。

二四 横 濱 社 會 館

表高嶋町甲三五番ノ二

震災の際、館内の一部約三百坪焼失したが、大部分は類焼を免かれたので、其まま全部

を震災救護事務局に貸與した。同局では大阪醫科大學救護班、陸軍警備隊救護班、廣嶋救護班、滿鐵救護班、神奈川縣救護班を配置せられたが、十二月に全部廢止し、十三年一月から平常通りの事業に復した。

二五 神奈川縣動物愛護會

神奈川縣廳内

震災の爲め一時忘却されたかの感があつたが、本年六月から再び事業を開始し、取敢えず水槽十七箇を市内の要所に配置し、牛馬に飲用水を供給し、又日覆千八百枚及蹄油二十五罐を牛馬所有者に分配した。

二六 横濱佛教講話會

野毛町四丁目一八五白石方

宮川町二丁目に佛堂公會堂を有し、會員千餘名を有して居たが、震災に全焼し、創立者加賀美貞悦氏も不幸焼死したので、會堂はまだ再建に至らぬ。然し講話會は災後直に復舊し開催して居る。

第六章 神社佛閣

前古未曾有の天災は、如何に大自然の威力とは云へ、あらゆる人も、物も、風物も、殆ど根底から破壊し去つたのであるから、物質の損害已外に多大の損失を招いたのである。單に神社佛閣の方面から見ても、幾多の箇所は破壊せられ、在りし日の面影を偲び得ぬ悲境となつた。抑も神社は我等祖先に對する崇敬の核心であり、また國民精神の表現であるから、今次の災害も亦單に我々の時代に止まらなると云ふてよい。眞に祖先の遺業も英靈も悉く灰燼に附された心地を以て大に悲しまざるを得ないのである。即ち倒潰焼失した神社佛閣中、建物あるひは彫刻物等の外に、幾星霜を傳來した寶物類の其の厄に遭つたのは甚少くない。今左に神社の被害を述べやう。

市内各所に鎮座する縣鄉村社、其他の内、焼失十六社、崩壊六社に及んだ。中に死亡した神職は、眞金町金比羅宮社掌一人に止まつたが、焼失全潰の災厄に遇つた調査を列擧すれば、焼失縣社は伊勢山太神宮、郷社は洲崎神社(青木町)、村社は杉山神社(西戸部町)、子神社(野毛町)、子神社(日之出町)、稻荷神社(南吉田町)、杉山神社(蒔田町)、殿島神社(羽衣町)、殿島神社(元町)、無格社は皇太神宮(天沼)、諏訪神社(石川町)、水天宮(長者町)、金刀比羅宮(眞金町)、金刀比羅

宮(野毛町)等である。

崩壊せる神社の中で、村社は、根岸町八幡宮(全潰)、瀧頭町神明宮(半潰)、神奈川町稻荷神社(半潰)、神奈川町若宮八幡宮(半潰)、本牧町本牧神社(半潰)、南太田町杉山神社(半潰)である。

無事なりし神社は、青木町村社、金刀比羅宮、南吉田町同日枝神社、淺間町同淺間神社、本牧町同吾妻神社、岡村町同杉山天満宮、磯子町同杉山神社、久保町無格社、天神宮、堀内町同天神宮、久保町同杉山神社等である。

第一節 神社

一 縣社 皇大神宮

横濱市宮崎町

被害建物工作物の類

(名)	(種)	(坪)	(被害狀況)
本殿	檜造銅板葺	七坪五合五勺	燒
拜殿	同	十二坪五合	同
末社	同	二坪	同
明治十年戰役表忠碑	臺、堅石、碯、青銅		全潰

神社 (縣社) 皇大神宮

明治三十八年戰役彰忠碑	內 玉 玉 垣 垣	外 社務所附神饌所	第一社務所	第二社務所	寶 庫	神 樂 殿	能 舞臺及附屬建物	燈 臺	手 水 所	石 垣	石 段	土 崖
臺花崗石銅板葺	檜 堅 木	同 木	同 木	同 木	煉 瓦	木 造	木 造	臺 堅石、銅板葺	花 崗 石	元 名石及堅石	花 崗 石	花 崗 石
四十間	二十六間	二十四坪	八十九坪	五坪	三十八坪	十五坪	五坪	約百坪	三十坪	數百坪		
全燒	全燒	同燒	同燒	同燒	全燒	全燒	同全	同全	同全	同全	同全	同全
潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰

二 鄉社 洲崎大神社

本 (名)	殿 木 造 銅 板 葺	被 害 建 物	四 坪	燒	失
(種)	木 造 銅 板 葺				
(類)	葺				
(坪)					
(數)					
(被害狀況)					

(橫濱市青木町)

(損害) 一八六五〇〇圓餘

三 鄉社 熊野神社

幣 拜 神 社 神 拜 幣	樂 務 倉 庫 所 殿 殿 殿	石 居 舍 與 庫 所 殿 殿 殿	水 居 石 椶 石 玉	花 崗 石 垣
木 造 銅 板 葺	木 造 銅 板 葺	木 造 亞 鉛 葺	木 造 亞 鉛 葺	木 造 亞 鉛 葺
三 坪	十二坪	五坪	十三坪	六坪
同燒	同燒	同燒	同燒	同燒
潰	潰	潰	潰	潰
失	失	失	失	失

被害建物工作物

(橫濱市神奈川町)

(損害) 五萬參千五百五拾圓

(鄉社) 洲崎大神社 熊野神社

末社三

社木造丸葺

三坪

全

燒

(損害) 四萬壹千四百圓

二九四

八幡神社

(横濱市根岸町西芝生)

被害建物

(名)

(種)

(類)

(坪)

(數)

(被害狀況)

土臺石龜裂社前へ三寸移動

同

同

土臺崩潰傾斜

石垣龜裂頭上傾斜

全潰

同

同

同

同

幣拜神石鳥燈獅招

殿殿殿殿殿

殿殿殿殿殿

殿殿殿殿殿

全同三一

潰對所

潰潰潰潰潰

社殿裏山材

約十坪崩

壞

(損害) 四千參百五拾圓

(横濱市岡村町)

九村社 杉山天滿宮

被害建物

(名)

(種)

(類)

(坪)

(數)

被害狀況

大破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

全破

拜神社鳥石墨

樂務

殿殿殿殿殿

殿殿殿殿殿

六坪

十二坪

二十二坪

三十二坪

高サ八尺

高サ二尺

長三十五間位

上部三尺より七尺位まで崩

墨石、全潰、埋立、龜裂

全潰

一〇村社 日枝大神

被害建物及工作物

(名)

(種)

(類)

(坪)

(數)

被害狀況

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

全潰

(村社) 八幡神社 杉山天滿宮 日枝大神

二九五

幣拜神社	鳥神社	玉燈	同燈	手同	水	樂務
殿	殿	居	居	鉢	鉢	殿
木造瓦葺	神明形花崗石	花崗石	伊豆石	伊豆石	伊豆石	木造瓦葺
間口七尺奥行二間	間口五間三尺奥行三間三尺	間口四間三尺奥行二間三尺	間口二間三尺奥行二間	間口二間三尺奥行二間	間口二間三尺奥行二間	間口二間三尺奥行二間
全	全	全	全	全	全	全
破損	破損	破損	破損	破損	破損	破損
(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)	(橫濱市瀧頭町)

二 村社 八幡神社

被害建物及工作物

鳥社 (名)
殿 (稱)
神明形花崗石 (種)
高二丈四尺六寸 (坪)
九坪 (數)
全 (狀況被害)
潰

三 村社 大綱神社

被害建物及工作

玉燈納石	玉燈	渡神	玉燈	鳥	石
垣	籠	屋	堀	大	谷
花崗石造	須加川石造	木造草葺	大谷石造	大谷石造	大谷石造
長五十間高六尺	高一丈二尺	六坪	長五十間高六尺	長五十間高六尺	長五十間高六尺
同	同	同	同	同	同
全	全	全	全	全	全
破損	破損	破損	破損	破損	破損
(橫濱市青木町)	(橫濱市青木町)	(橫濱市青木町)	(橫濱市青木町)	(橫濱市青木町)	(橫濱市青木町)

(村社) 八幡神社 大綱神社

(損害) 貳百六拾五圓

一三 村社 一ノ宮神社

被害建物及工作物

本幣拜鳥燈神敷末石
名 (名)

樂 獅

殿殿居籠殿石社柱子

石 同石

造 造

一坪半 二坪 六坪 一基 同 十坪 五間 三坪 一對

大 傾 同 破 小 破 大 破 右 小
破 破 破 破 破 破 破 破 破 破
損 損 損 損 損 損 損 損 損 損
斜 損 損 損 損 損 損 損 損 損 損

一四 村社 皇太神宮

(損害) 九百圓

(横濱市北方町)

(横濱市子安町)

本社鳥石石
名 (名)

務 玉

殿所居崖

木

造

一坪 二十五坪 一基 (損害) 壹萬貳百圓

傾 燒 同 全 半
斜 失 潰 潰
損 損 損 損 損 損 損 損

一五 村社 杉山神社

被害建物及工作物

本幣拜神社

務 樂

殿殿殿所

四坪 三坪 八坪 五十一坪 九合五勺 十三坪五合

燒 同 同 同 同
失
損 損 損 損 損

(村社) 一ノ宮神社 皇太神宮 杉山神社

(横濱市西戸部)

外手納日雜
玉水露戰
垣舍屋役
念碑玉
置場品

一七 村社子神

被害建物及工作物

本幣神社水鳥
殿殿殿
所舍居
樂務
石
造

二坪 燒 倒
三坪 燒 倒
長五間 同
同五間 倒
七坪 燒 倒
長十五間高十五尺 潰
（損害）拾萬五百餘圓

（橫濱市日ノ出町）

社

（坪數）
間口九尺奥行四尺 燒
間口十五尺奥行十二尺 同
間口四間奥行三間半 同
間口四間奥行五間 同

（被害狀況） 失

外 柵木 造

一八 村社 稻荷神社

被害建物及工作物

本拜社鳥
殿殿殿
所同居
務
甲
石
屋
造

（損害）貳萬壹千圓
燒 失

（橫濱市南吉田町）

（坪數）
間口二間 四坪 燒 失
間口四間 八坪 同
間口五間 十五坪 同
奥行二間 高一丈五尺 倒

（損害）參萬參千圓

（橫濱市本牧町）

一九 村社 吾妻神社

被害建物及工作物

本
殿
木造亞鉛葺神明造
（稱）
（類）

（坪數）
三坪 大 破 損

（被害狀況）

（村社）于神社 稻荷神社 吾妻神社

三〇三

拜幣鳥社

務

殿	木造亞鉛葺神明造
殿	同
居	神明石造
所	木造瓦亞鉛葺

(損害) 參千五百九拾圓

三坪	全	潰
七坪	屋根瓦全部墜落柱四本折、社殿傾斜	
八坪	全	潰
	屋根瓦落ち、壁建具破損	

二〇 村社 諏訪 神社

被害建物及工作物

本拜社鳥燈盥石

務

殿	木造鐵板葺
殿	同
所	同
居	花崗石
籠	同
舍	木造鐵板葺
塀	煉瓦造
垣	元名石造

(損害) 貳萬千五百圓

一坪	燒	失
五坪	同	
六坪	同	潰
一對	同	
一基	同	
七間	全	潰
六十坪	同	

二二 村社 淺間ノ宮

被害建物及工作物

鳥玉塀燈

務

居	造
垣	造
籠	造

(損害) 參千八百圓

五間	崩	壊
八間	同	
一對	同	

二三 村社 若宮八幡神社

被害建物及工作物

本神鳥燈

樂

殿	種
殿	種
居	種
籠	種

(損害) 參千八百圓

一	部	破
全	同	潰
同	同	

(横濱市大岡町)

(横濱市淺間町)

(村社) 諏訪神社 淺間ノ宮 若宮八幡神社

手

舍

全

潰

三〇六

鳥社神拜本

(名)

務輿

被害建物及工作物

二三 村社 杉山神社

(横濱市蒔田町)

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

(被害狀況)

居所殿殿殿

木

造

同同同同燒

失

(損害) 壹萬百圓

二四 村社 住吉神社

(横濱市井土ヶ谷)

被害建物及工作物

鳥燈神本

(名)

輿

居籠殿殿

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

(被害狀況)

一一全一

部破

基對潰壞

(損害) 八百圓

二五 村社 平沼神社

(横濱市平沼町)

被害建物及工作物

燈鳥神社渡拜本

(名)

輿務

籠居殿所殿殿殿

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

(被害狀況)

同全同同同同半

潰

潰

(損害) 四千六百參拾圓

(村社) 杉山神社 住吉神社 平沼神社

三〇七

二六 村社 子ノ神社

被害建物及工作物

居殿殿

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

全同小

(被害狀況)

潰破

三〇八

(横濱市堀内町)

鳥拜本

(名)

二七 村社 日枝神社

被害建物及工作物

殿所殿殿

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

全同改無

(被害狀況)

潰中事

(損害) 八百圓

(横濱市南吉田町)

神社拜本

(名)

與務

(損害) 參千圓

二八 村社 杉山神社

被害建物及工作物

籠所殿垣居置所殿殿殿

(稱)

(種)

(類)

(坪)

(數)

倒半小崩一同同同同傾

(被害狀況)

壞潰破潰落

(横濱市南太田町)

石手石石鳥物社神拜本

(名)

燈洗 務樂

(損害) 千五百圓

(村社) 子ノ神社 日枝神社 杉山神社

三〇九

二九 村社 笠程稻荷神社

被害建物及工作物

本	神	鳥	末	手	玉	燈	記	社
(名)			鳥	末				
殿	殿	居	居	鉢	垣	籠	碑	所
(種)								
木	石	同	同	同	同	同	同	木
(坪)								
造	造	造	造	造	造	造	造	造
(數)								
半	同	全	同	同	半	同	同	同
(被害狀況)								
潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰	潰

(横濱市神奈川新町)

三〇 村社 本牧神社

被害建物及工作物

本	社	鳥	石	燈
(名)				
殿	所	居	垣	籠
(種)				
石	同	同	同	同
(坪)				
造	造	造	造	造
(數)				
半	同	全	半	同
(被害狀況)				
潰	潰	潰	潰	潰

(横濱市本牧町)

三一 無格社 杉山社

被害建物及工作物

本	社	石	石	石
(名)				
殿	所	居	籠	所
(種)				
石	同	同	同	木
(坪)				
造	造	造	造	造
(數)				
半	同	倒	同	倒
(被害狀況)				
潰	潰	潰	潰	潰

(横濱市久保町)

(村社) 笠程稻荷神社 本牧神社 (無格社) 杉山社

三三 村社 天 滿 宮

(橫濱市久保町)

被害建物及工作物

本幣拜石鳥手

殿	殿	垣	居	舍
類	種	種	種	種
水	花	崗	石	

(坪數)

(損害) 五百五拾圓

半同同同同同

(被害狀況) 潰

三三 金刀比羅神社

(橫濱市宮崎町)

被害建物及工作物

本

殿	土藏	造瓦	葺
類	種	類	類

(坪)

(數) 一坪五分

(被害狀況) 燒失

拜末社 稻荷 樂務 神樂務 鳥燈籠 同雜

殿	社	所	居	籠	品
葺	杉	木	花	石	花
八幡	材	造	春	崗	崗
造	瓦	亞鉛	日	造	石
柿	葺	葺	石	造	石

六坪五分

三坪二分五厘

六坪

二十坪五合

高一丈

同九尺

同五尺

燒同同同燒倒

失

潰

潰

(損害) 貳萬參千八百七拾五圓

三四 無格社 諏 訪 神 社

(橫濱市中村町)

被害建物及工作物

本社

殿	所	垣
造	造	造
銅	平屋瓦	葺
葺	葺	葺

(坪)

(數)

二坪五合

二十八坪

延長七間

燒同同

(被害狀況) 失

(村社) 天滿宮

金刀比羅神社

諏訪神社

琴平神社

物防燈燈手

火 洗

置塀籠籠舍
木石小花檜

松崗

造造石石造

(損害) 千四百七拾六圓
一坪
高九尺
高八尺
延長六間高九尺

燒同同倒燒

失 壞 失

三一四

鳥石社拜本

務

居殿所殿殿

(損害) 六千四百圓

全半同同全

潰潰 沒

被害建物及工作物

三五

無格社

琴

平

神 社

(橫濱市本牧町)

燈鳥神拜本

樂

籠居殿殿殿

石

造

(損害) 參千百七拾五圓
同同全同小

潰 破

三六

無格社

第

六

天 社

(橫濱市根岸町)

被害建物及工作物

三七

金刀比羅神社
大鷲神社

被害建物及工作物

神拜本

樂

殿殿殿

(無格社) 琴平神社 第六天社 金刀比羅神社 大鷲神社

(損害) 六千圓

同同全

燒

三一五

三八 無格社 水 天 宮

(横濱市長者町)

被害建物及工作物

本拜社鳥神同	(名)	務	(種)	(坪)	(被害状況)
殿	殿	土	藏	間口九尺奥行九尺	焼
所	土	蔵	造	間口九尺奥行十二尺	同
居	蔵	造	樹	間口廿一尺奥行十二尺	同
木	蔵	造	石	高十二尺	同
松	蔵	造	木	一本	同
花	蔵	造	樹	一本	同
月	蔵	造	樹	一本	同
桂	蔵	造	樹	一本	同
樹	蔵	造	樹	一本	同
(損害)					參千五百圓

第二節 寺 院

一 眞言宗寶積寺

(在根岸)

今時の震災に於て、同寺は建物全潰し、火災は免かれたのであるが、其の損害額は凡そ貳萬八千餘圓。建物の主なるものは本堂庫裡藥師堂拜殿・内陣・不動堂、其の他佛具であつた。同寺は古義派眞言宗で、開山は不詳。源頼朝の幕府を鎌倉に開いた頃、一切藏經中、大寶積經一百二十卷の名を用ひて、寶積寺と名付けた。後ち永正元年に中興し、永祿年中、僧頼順再興。本尊藥師如來は行基菩薩の作と稱し、横濱七藥師の一である。什物中十三佛、佛鏡及鎌倉八幡宮にあつた有名な法華堂文書等は無事であつた。

二 眞言宗藥王寺

(在子安町)

同寺の被害は本堂庫裡其他とも全潰。

三 眞言宗増徳院

(在元町)

同寺被害は最も大きく、建物其他石垣に至るまで、全潰と火災の厄に逢ひ、其の損害額

水天宮 (眞言宗) 寶積寺 藥王寺 増徳院

八拾八萬圓餘の多きに達したのであるが、重なる建物中本堂薬師堂辨天堂位牌堂を初め、表門、倉庫、石垣に至るまで、悉く破滅した。數百年傳來した什寶、什器、佛具、佛像等も同様灰燼となり、倒潰本堂中から救ひ出した本尊と、薬師如來の二體は、好運にも搬出し得たのである。同寺の沿革に依れば、同寺は大同年間の建立で、中興開山は長覺である。震災當時の本堂は、明治十七年の建築。大正三年別格本山となつた。横濱開港上特記すべき由緒は、ベルリ渡來當時異人埋葬等の事もあり、又横濱寺院中第一の伽藍であつた。寺寶には足利氏滿が南院附屬の辨才天へ納めた般若心經、兆殿司筆の羅漢像二軸、弘法大師筆の五大尊像一軸、聖德太子御作と稱する薬師像、嘉吉二年比留間範政市川季氏からの寄進狀等、悉くその跡形もなく灰燼に歸した。

四 眞言宗 玉泉寺

(在中村町字東)

同寺は建物全部全焼。損害全額約五拾萬圓。建物の主なるものとしては本堂、庫裡其他である。本堂は二百餘年前の建築。市内では最古の一つであつた。

五 眞言宗 東漸寺

(在中村町字平樂)

建物は半損。佛像、佛具等は破壊。石垣等は崩壊。主なる建物は本堂、庫裡である。尙同寺は文治年間、賢覺法師の時に、領主杉野筑前守の建立したものと云ふ。慶安二年十月、徳川三代將軍家光の時、四石九斗の御朱印を賜はつた。今回の損害は壹萬貳千六百餘圓。

六 眞言宗 弘誓院

(在中村町字西谷)

同寺の被害は本堂、庫裡等全潰。同寺の開山は順清法師、開基は石川帶刀家重である。本尊は觀音。横濱二十一ヶ所十番の札所である。今回の損害拾五萬圓。

七 眞言宗 多聞院

(在本牧町字牛込)

本堂、鐘樓は全潰し、庫裡、薬師堂、裏門、物置は半潰した。同寺は弘法大師が諸國遍歴の際、此地に堂宇を建立したものと云ひ傳へてある。弘仁二年の開基。横濱二十一ヶ所、十八番の札所、什寶は、弘法大師の眞筆、佛像、掛物、桃山屏風等皆焼失を免れた。今回の損害貳萬七拾五圓。

(眞言宗) 玉泉寺

東漸寺

弘誓院

多聞院

八 眞言宗 天徳寺

(在本牧町)

震災に於て本堂位牌は全潰した。同寺は増徳寺末寺で、文祿十三年、僧榮賢が宮原の地より此の處に堂宇を建立したと傳ひて居る。今回の損害貳萬八百圓。

九 眞言宗 千藏寺

(在本牧字牛込)

建物全部全潰した。其損害壹萬圓

一〇 眞言宗 東福院

(在本牧町)

被害は比較的軽く、半潰程度で在った。損害額貳千六百八拾圓。

一一 眞言宗 眞福寺

(本牧町)

同寺は倒潰を免かれて、傾斜したのみであつた。其損害百貳拾圓。

一二 眞言宗 大聖院

(在西戸部町野毛坂)

建物全部倒潰の上、全焼の厄に遇つた。其の損害額も約四拾萬圓である。建物としては本堂、庫裡、護摩堂等である。震災當時の堂宇は明治二十七年の起工で在った。

一三 古義眞言宗 願成寺

(在西戸部町)

建物全部が全焼の厄に過つた。其損害額は凡拾貳萬圓である。建物の主なる物は本堂、庫裡、地藏堂等であつた。

一四 新義眞言宗 成田山延命院

(在宮崎町)

本堂、庫裡、客殿、大師堂、水行堂等全部焼失した。其の損害は約拾萬餘圓である。

一五 眞言宗 圓福寺

(在久保町字道上)

建物は半潰の程度であつた。損害四千五百圓。

一六 眞言宗 安樂寺

(在久保町字道上)

建物は半潰の程度であつた。損害五千圓

(眞言宗) 天徳寺 千藏寺 東福寺 眞福寺 大聖院 願成寺
成田山延命院 圓福寺 安樂寺

一七 新義眞言宗東光寺

(在神奈川神明町)

本堂は傾斜し、庫裡は全潰の厄に遭つた。現在の堂宇は明治三十四年の再建である。損害高五千貳百圓。

一八 新義眞言宗普門寺

(在神奈川青木町)

建物全部焼失した。其の損害額凡一萬五千餘圓である。同寺は安政六年、神奈川開港條約成立の時、米國使節十數人が館した舊蹟である。今回の損害壹萬五千圓。

一九 眞言宗遍照院

(在子安町)

本堂・庫裡は大破し、其他は半潰程度であつた。損害約壹萬圓。

二〇 眞言宗東福寺

(在南太田町谷原耕地)

建物全部焼失の厄に遭ひ、損害額凡六萬五千餘圓である。同寺は世に赤門寺とて名高く、今を跡る六百八十餘年の古刹である。

天正四年、寶永四年、明治四十五年、大正六年と今次の震災とに焼失した。

二一 眞言宗普門院

(在南太田町)

建物全部烏有に歸し、其の損害額凡參萬五千餘圓である。焼失した建物は本堂・庫裡・歡喜天堂・大師堂である。

二二 眞言宗蓮花院

(在南太田町西中耕地)

本堂・藥師堂・庫裡等全部焼失。其の損害額凡壹萬貳千餘圓である。

二三 眞言宗藥王寺

(在南太田町)

本堂・庫裡等建物全部焼失。其の損害額凡壹萬五千餘圓である。

二四 眞言宗大聖院

(在根岸町)

同寺の被害は表門は全潰、本堂及玄關は半潰、庫裡は傾斜の程度で、損害額は凡貳千九百餘圓である。

二五 眞言宗 海照寺

(在根岸町字坂下)

表門は倒潰し本堂庫裡・玄關等は半潰で、損害額は凡壹萬五千餘圓である。

二六 眞言宗 金藏院

(在磯子町)

建物は半潰或は傾斜の程度で、損害は凡五千圓である。

二七 眞言宗 眞照寺

(在磯子町腰越)

倒潰及火災等は免かれた。損害參千圓。

二八 眞言宗 密藏院

(在瀧頭町)

建物全部倒潰。其の損害額は約參萬圓である。

二九 眞言宗 大光寺

(在南太田町清水耕地)

本堂庫裡・佛堂等半潰した。損害額は約壹萬貳千圓に上る。倒潰した本堂は寶永七

年十月の建築で在った。

三〇 眞言宗 金剛院

(在岡村町)

建物全部倒潰。其の損害額約壹千圓である。

三一 眞言宗 寶生寺

(在堀内町)

多少の損害ありしも、至つて輕微であつた。本堂は延寶八年、靈元天皇の御宇、灌頂堂を以て本堂としたもので、敢て大伽藍と云ふではないが、天文年間再建の灌頂堂を本堂とした建築物である。徳川時代には末寺五十二箇寺、關東三十六箇所、談議所の一であつた。明治八年、元町の増徳院と本末轉倒した。開基は承安五年間、法印覺清の開基である。寺寶には太田道灌の古文書其外數多存して居る。本市内の寺院中でも有名な古刹の一つである。今回の被害の輕かりしは又大に喜ぶべきである。

三二 眞言宗 無量寺

(在蒔田町字山ノ根)

全燒の厄に遭ひ、損害額凡壹萬五千圓である。

(眞言宗) 海照寺 金藏院 眞照寺 密藏院 大光寺 金剛院 寶生寺 無量寺 三二五

三三 眞言宗 弘明寺

(在弘明寺町)

鐘樓・通用門倒壊、其の他は傾斜程度で、損害は至つて少なかつた。楓關門は應永年間
の建立で、横濱最古の建築物で在つたが、倒潰したまま取片付けして仕舞つたのは惜む
べきである。尙本尊觀世音像は行基の作と稱せられ、大正四年七月國寶に定められた。
之れが無事であつた事は幸ひである。損害額壹萬貳千參百圓。

三四 眞言宗 乘蓮寺

(在井土ヶ谷町)

被害至つて輕微で損害額約四千圓である。同寺境内の尼將軍堂は平政子の建立と
云ふが無事なりしは幸ひである。

三五 眞言宗 吉祥寺

(在大岡町)

本堂・庫裡共幸ひに被害輕く、損害額約參千圓である。

三六 眞言宗 萬福寺

(在大岡町)

建物は傾斜程度で、其の損害額も凡一千餘圓に過ぎなかつた。

三七 臨濟宗 林光寺

(在久保町)

建物全部倒潰し、損害額は六萬八千圓に上る。此寺は昔野毛浦の山頂にあつたが、明
治二十二年、地方廳の許可によつて、翌年三月、現在の地に移轉したものである。

三八 臨濟宗 天池菴

(元圓覺寺別院) (在久保山)

本堂・庫裡・書院納骨堂等全潰し、損害額約六萬參千五百餘圓に上る。同菴は明治十九
年三月、本山塔頭天池菴を橋樹郡保土ヶ谷町字久保山に移し、次いで明治二十五年十一
月、再び現地に移轉したものであつた。

三九 臨濟宗 洪福寺

(在淺間町)

本堂・庫裡・納骨堂等全潰し、損害額は凡貳萬壹千五百圓である。同寺は寛永十二年の
創立で、袖摺山に一の薬師堂ありしを當山に移したもので、倒潰した本堂は寛文七年に
再建したものであつた。

(眞言宗) 弘明寺 乘蓮寺 吉祥寺 萬福寺 (臨濟宗) 林光寺 天池菴 洪福寺 三二七

四〇 臨濟宗 正法寺

(在南太田町)

本堂・庫裡・納骨堂位牌堂は全潰の上、全焼。太子堂半潰、半僧堂は半潰した。損害額凡参萬餘圓。同寺は明治三十年六月、静岡縣濱名郡より移轉したもので、横濱有志の勸請によつて、奥山半僧坊本尊とした。俗に太田の半僧坊とて、名高いものであつた。

四一 曹洞宗 萬徳寺

(在宮崎町)

本堂・庫裡・道了殿・秋葉殿の建物全部焼失した。損害額凡四萬五千餘圓である。同寺は天正十二年の創立であつた。

四二 曹洞宗 本覺寺

(在青木町)

本堂・鐘樓堂は全潰し、庫裡・丈室等は傾斜した。其の損害額貳拾萬六千餘圓。同寺は横濱開港史上特記すべき由緒地である。嘉永六年の六月、米國使節ベルリが渡來して、日米修好條約が締結、其後安政三年七月の條約により、米國公使ハルリスが同寺を以て、假公使館に充て、幕府の全權委員井上信濃守・岩瀬肥後守とハルリスとの間に、日米通商

條約が商議せられたのである。條約締結は實に安政五年六月十九日、世に之れを神奈川條約と云ふのである。其の後明治三十二年十二月、祝融の災に罹り、殿堂・寶物等烏有に歸し、三十四年再建したものであつた。又神奈川條約により、外國公使館・領事館が設けられて、外國旗が最初にひるがへつたも此寺であつた。

四三 曹洞宗 宗興寺

(在青木町)

本堂・庫裡・書院等全焼、其の損害額約七萬圓。同寺の創立は天保三年で、嘉永四年に焼失。安政二年再建したのであつた。

四四 曹洞宗 陽光院

(在青木町)

本堂・庫裡共倒潰した。其損害四千百圓。同寺は大正二年、神奈川町から、今の地に移したものであつた。

四五 曹洞宗 西有寺

(在中村町)

本堂・庫裡・地藏堂は全潰、納骨堂位牌堂・僧學堂・寶藏・稻荷堂は半潰した。其の損害額凡

(臨濟宗) 正法寺 (曹洞宗) 萬徳寺 本覺寺 宗興寺 陽光院 西有寺

貳拾九萬圓に達した。同寺は明治三十四年、縣下中郡二宮村の善光寺を移轉して、西有寺と改稱した寺である。善光寺は寛永元年の創立で、大應寺五世洲桐和尚の開基であつたが、明治五年頃より、荒廢に歸し、大應寺の兼務する所となつたので、當山第二世の仁齡師の力に依り、遂に當所に移したものであつた。同寺の境内には暹羅皇太子の御來遊の際、御手植の銀杏樹がある。

四六 曹洞宗 玉寶寺

(在 英町)

建物全部倒潰の上全焼し、其の損害額約參萬餘圓である。

四七 曹洞宗 龍珠院

(在 岡村町)

被害殆んど皆無であつた。

四八 曹洞宗 勝國寺

(在 蒔田町)

本堂は全潰、庫裡・山門は小破した。其の損害額は凡參萬五千圓である。

四九 淨土宗 慈眼院

(在 南太田町)

本堂は傾斜、庫裡鐘樓は全潰した。損害額は凡貳萬八千餘圓である。

五〇 淨土宗 慶運寺

(在 神奈川飯田町)

本堂表門は半潰、庫裡土藏・觀音堂・鐘樓堂等は全潰した。損害額は約貳萬五千圓である。同寺は明治元年、浦島町の觀福寺と合併した。境内にある觀音堂は有名の浦島觀世音である。

五一 淨土宗 成佛寺

(在 神奈川町)

本堂・鐘樓・山門は半潰、庫裡は大破、全寺持説教所は全焼した。其の損害額凡八千餘圓である。

五二 淨土宗 三寶寺

(在 青木町)

本堂客殿は小破、藥師堂は半潰した。損害額凡貳千參百餘圓である。

(曹洞宗) 玉寶寺 龍珠院 勝國寺 (淨土宗) 慈眼院 慶運寺 成佛寺 三寶寺 三三一

五三 浄土宗相應寺

(在子安町)

建物全部倒潰の厄に遭つた。損害額凡參萬參千圓である。建物の主なるものは本堂庫裡・鐘樓・閣魔堂・山門である。

五四 浄土宗大安寺

(在子安町)

本堂は全潰、庫裡・不動堂・山門は半潰した。損害額凡貳萬壹千圓である。

五五 天台宗新善光寺

(在南太田町庚耕地)

本堂納骨堂書院は全潰、庫裡は半潰した。損害額凡六萬貳千八百圓である。

五六 日蓮宗川合寺

(在久保町)

本堂庫裡は全潰、損害額凡貳萬八千圓である。同寺は明治二十七年、地方廳の許可に依つて、縣下高座郡松林寺中の本妙庵を移したのである。

五七 日蓮宗妙音寺

(在南太田町霞耕地)

本堂・浄行堂庫裡等は半潰した。損害額凡參千八百餘圓である。

五八 日蓮宗淨瀧寺

(在青木町)

被害は小破したのみであつて、損害額凡六千五百圓である。

五九 日蓮宗久成寺

(在平沼町)

全部焼失し、損害額凡七萬千貳百餘圓に上る。

六〇 日蓮宗慈雲寺

(在神奈川神明町)

本堂・鬼子母神堂は半潰、庫裡・表門は全潰した。損害額凡壹萬九千五百圓である。

六一 日蓮宗本慶寺

(在子安町)

本堂庫裡・妙見堂・山門其他全部倒潰した損害額凡四萬貳千四百圓である。

(浄土宗)相應寺 大安寺 (天台宗)新善光寺 (日蓮宗)川合寺
妙音寺 淨瀧寺 久成寺 慈雲寺 本慶寺

六二 日蓮宗蓮法寺

(在青木町廣臺)

本堂庫裡七面堂稻荷堂上行堂表門其他全部倒潰の厄に遭つた。損害額凡參萬六百元。本堂は大正元年の新築で、相州小田原在萩窪村より移轉したものである。

六三 日蓮宗妙香寺

(在北方町)

本堂書院七面堂は全潰、大黒堂は全焼し、庫裡其他は大破した。損害額凡七萬壹千五百圓である。

六四 日蓮宗善行寺

(在北方町)

半潰程度で、損害六萬壹千五百圓である。

六五 日蓮宗常清寺

(在長者町)

建物全部焼失、損害額凡參拾萬圓に達した。建物の主なるものは本堂、庫裡清正堂淨行堂、稻荷堂、鐘樓堂等で、本堂は明治三十四年の大火に焼失し、明治四十三年再建したも

のであつた。

六六 日蓮宗圓大院

(在根岸町猿田)

建物の殆んど全部倒潰した。損害額は貳萬四千參百圓である。同寺は明治二十五年十一月、鎌倉郡東鎌倉村小町本覺寺中より移轉したものである。

六七 眞宗西教寺

(在南太田町字庚耕地)

本堂、庫裡共に全潰した。其の損害凡五萬五千圓。同寺は明治三十七年、武藏國葛飾郡權現堂神明内から、現地に移轉したものである。

六八 眞宗寶光寺

(在櫻木町)

本堂庫裡とも全焼、其の損害額凡拾萬圓である。

六九 眞宗良泉寺

(在神奈川字新町)

建物全部全潰の厄に遭つた。其の損害額凡貳拾壹萬貳千五百圓である。當時の本

(日蓮宗) 蓮法寺 妙香寺 善行寺 常清寺 圓大院 (眞宗) 西教寺 寶光寺 良泉寺 三三五

堂は明治十八年の再建である。

七〇 眞宗 甚行寺

(在青木町)

本堂庫裡太子堂等建物全部全焼し、其の損害額凡拾參萬圓である。本堂は明暦元年の創建で、安政五年神奈川開港條約締結後、佛國公使館に充てられた事が在つた。

七一 浄土眞宗長延寺

(在神奈川字新町)

本堂庫裡經藏表門等は半潰、鐘樓其他は全潰の厄に遭つた。損害額凡六萬圓である。

七二 浄土眞宗善龍寺

(在神奈川字齋藤分)

本堂庫裡は半潰、鐘樓は全潰の厄に遭つた。損害額凡五萬六千餘圓である。

七三 眞宗蓮光寺

(在中村町)

本堂庫裡太鼓堂・大門・鐘樓等の建物全部全焼の厄に遭つて。損害額凡貳拾參萬參千

餘圓に上る。同寺は明治五年寺號を得て、蓮光寺と稱したもので、開基は東京市淺草區清島町蓮光寺第十一世興瑛師が、太田屋新田、太田屋新左衛門等の歸依で、太田町八丁目に一草庵を建立したのが始まりで、其後現在の地に移轉したものであつた。

七四 眞宗本願寺別院

(在梅ヶ枝町)

本堂庫裡書院・鐘樓・寶物・什器其他全部全焼した。損害額凡五拾萬圓餘である。

七五 眞宗願西寺

(在末吉町)

本堂庫裡鐘樓等は全部焼失した。損害額凡參萬圓。同寺は明治三十五年一月、岐阜縣海津郡高須町字福岡より現在に移轉したものである。

七六 法華宗豐顯寺

(在青木町字三澤)

本堂庫裡は半潰、番神堂・表門・大講堂・經堂・學堂・圖書館等全潰した。損害額凡貳萬圓。同寺は享保四年に檀林を新設して、伽藍・學寮を建て、同九年に開講式を舉行した。當時

(眞宗) 甚行寺 長延寺 善龍寺 蓮光寺 本願寺別院 願西寺 豐顯寺

は學舎五宇、學寮二十五棟、學生三百人あつた。明治四年、學校から火を失して、學舎一棟焼失した。堂塔は宏壯優美のものである。今回の震災にて、檀林學舎等、舊態を永久に沒したのは惜むべきである。

七七 法華宗 勸行寺

(在青木町東輕井澤)

表門は全潰、其の他は半潰、損害額凡五千餘圓である。

七八 時宗 淨光寺

(在中村町)

本堂、庫裡共に半潰した。損害額凡七千五百圓である。

七九 日蓮宗 大圓寺

(在根岸町)

本堂、庫裡、淨行堂等は全潰、庵室は半潰し、佛像、佛具は大破した。其の損害額凡壹萬八千圓である。

八〇 日眞宗 常照寺

(在南太田町)

本堂は多少破損あつたが、先づ輕微の損害であつた。庫裡書院、玄關は裏山の崩れたために全潰、仁王門は大破したが、倒潰を免かれた。其の損害額は貳萬貳千貳百五拾圓である。

八一 眞言宗 金藏院

(在神奈川十番町)

本堂半潰、庫裡、書院は全焼した。損害額は凡壹萬五千圓である。

八二 新義眞言宗 吉祥寺

(在西白樂)

被害輕微で、小破程度であつた。損害額は僅かに壹千百圓である。

八三 眞言宗 眞福寺

(在本牧町)

殆んど被害は皆無の程度であつた。

八四 眞言宗 能滿寺

(在神奈川神明町)

本堂及表門は全潰、庫裡及佛像、佛具は大破し、其の損害額約五萬圓である。

(法華宗) 勸行寺 (時宗) 淨光寺 (日蓮宗) 大圓寺 常照寺
(眞言宗) 金藏院 吉祥寺 眞福寺 能滿寺

第六章 商工業

第一節 本港貿易

三四〇

我が國に於ける輸出貿易の最初の港として、世界に知られた横濱港は、過去六十年間帝國唯一の輸出港としての使命を果し、年を累ぬる毎にその繁榮と眞價を擧げて、今日に至つたのである。中にも生絲の輸出は、當港の生命であり、帝國經濟上の重要なものである。

本港に年額入荷生絲の數量は實に五十萬梱以上で、一梱とは九貫目を詰めた一箱を云ふ。それに對する價額は年に因つて多少の變化は免かれぬが、約六億圓内外と見るも過言ではない。此の如く、多量の生絲を取扱ふ市場は、世界中僅に紐育と横濱の外になく、紐育にあつては一箇年四十萬俵一俵は百斤内外で、本港市場と對峙して、世界に於ける重要市場の權威を示してゐる。其他東洋では上海、廣東の市場がある。本港市場と同様供給市場ではあるが、その規模も至つて小さく、比較するに足らない。又歐羅巴にも里昂、リヨン美蘭等美蘭の需要市場があるが、是又紐育程の勢力はなく、唯歴史的にその名を認められて居るに過ぎない。

斯の如く横濱港は我が國唯一の輸出港であるのみならず、世界經濟界に最も重要な任務を背負ふておるのである。

さて本港は前述の如く五十萬梱の生絲が入荷され、直に商取引が行はれるのが、原合名會社を初め、神榮株式會社、小野商店、澁澤商店、日米生絲會社、田中商店、その他二十六軒の間屋である。生絲を買收して自己の責任を以て、外國に輸出する者には、三井物産横濱支店、已下八軒の直輸入商と、甲九十番、二百五十四番以下十一軒の外國商館がある。其他輸尙向に不合格となつた生絲を買收して、自己の思惑、又は單なる取次の形式で、福井、金澤、福島、京都、甲州、上州等の機業地に賣捌く營業者、所謂蠶絲仲次業者（通稱地遣絲又は和賣）二十軒の外、吾國唯一の生絲取引所なる横濱取引所は、約五十軒の附屬仲買人を有し、毎日四回の立會を行ひ、生絲清算取引を行ひ、その樹立する公定相場は、横濱現物市場の値段を支配し、同時に各地商相場に對する指針となつて權威を持つて居る。この外に農商務省生絲検査所、絹布倉庫等の主要倉庫及銀行は、何れも生絲貿易上缺くべからざる須要機關として、本市に設けられて居つたのである。本市貿易の一般須要施設の梗概は以上に述べたのであるが、本市輸出貿易沿革概要は震災と、外人の條に譲り、かの九月一日の大震災に於けるこれらの被害と、輸出貿易に及ぼした影響等を述

べ更に復興諸対策運動の経過を辿り、これ等營業者の苦難を記録して見やう。

(横濱税關調査資料、外務省書類、横濱開港五十年史)

第一項 生 絲

一 生 絲 の 被 害

本港生絲の被害に關しては、明確なる調査は得ることが出来なかつたので、取敢ず蠶絲貿易組合に燒残つた一部の帳簿と、關係者の記録に據りて、被害數量の算出に苦心した。その結果、十二年十一月二十六日、現在の概數は次の如くである。

- 問屋保管中の數量
 - 一〇、四九三・五二
 - 六二三、四四四・三五
 - 四一九、九二七
 - 一九七、五一七・七五
- 倉庫會社保管中の數量
 - 一〇、〇〇〇・〇〇

内爲替付

無爲替

六〇三、五二三・五〇

五二九、三一四・二五

七四、二〇九・二五

銀行保管中の數量

九、七三九・二〇

五八四、九二八・二五

輸出商保管中の數量

一〇、一五二・二五

五九八、二八二・四四

三六〇、一四〇・七五

一三八、一四一・六九

引入中

看貫濟

荷爲替未拂中に屬する分

二四五・

一四、七六四・五〇

輸送中にして問屋引渡未済

一、四二四・

(生絲) 生絲の被害

問屋分合計

八五、四〇九.五〇

四二、三二五.一〇〇

二、五一〇、三五二.九四

内外輸出商合計

五、四一六.

六〇八.

總計

計 四二、九三三.一〇〇

外に

五、四一六.

三、〇七五、五三二.九四

右の如くであるが、年に依つて價格に、多少の變化はあり、これ等の數量から推して、約參千貳百拾七萬參千圓内外に達したのである。更に、大正十二年度に於ける月別生絲の差引と同年月別生絲の入荷を示せば次の如し。

大正十二年度月別生絲差引表

(第一表)

月次	科目	(繰越高)	(入荷高)	(以上計)	(賣込高)	(内地行)	(燒失絲)	(以上計)
一月	一月	四七、三六八	一七、七三三	六五、〇〇〇	二五、六七半	二、二五半		二七、九一〇
二月	二月	三〇、一八〇	一六、四三半	四六、六一半	三〇、五五半	六、七一九		三〇、七五半
三月	三月	一六、八四七	三〇、〇八半	四六、九三半	三五、三六半	五、七八四		三二、一四〇半
四月	四月	一九、七九三	四一、八一九	六一、六二二	四三、四〇半	四、八八九		四六、九七半
五月	五月	一四、八六半	三三、二一六	四七、九三半	一九、六三半	四、一九六		三三、八九半
六月	六月	二四、一二三	二九、一七九半	五三、二九二半	二八、二四七	五、一三二半		三三、〇〇〇
七月	七月	一九、九二四	六八、一〇五	八八、〇二九	四八、九三半	三、〇八一半		三三、二二一
八月	八月	三五、九九九	五八、八一	九三、八二八	四七、一八二半	四、九三六半		三三、七五七
九月	九月	四〇、六六七	五、九三八	四六、六五五	五、三六四		三、一七三	三三、〇二半
十月	十月	九、〇九八	五九、九一〇	六八、〇〇八	三六、〇一半			三九、六四半
十一月	十一月	二九、九六半	四九、七三三	七九、七〇半	三九、一一三	八、七半		四六、四〇半
十二月	十二月	三九、七六九	五〇、二〇半	九〇、〇四九半	四四、八七半	一、四四四		四六、四〇半
合計	合計	四三、七〇八	四六〇、六四一	五〇四、三四二	四七、八八半	三八、七三半		四六、四〇半
大正十一年	大正十一年	五七、六九五	五二、〇二〇	一一〇、六七五	四七、六四半	四八、〇三〇		五三、六七半
大正十年	大正十年	五三、〇二〇	三六五、〇〇四	四一八、〇二四	二五、一〇一	八三、二六二半		五四七、三八四半
大正九年	大正九年	三六五、〇〇四	五一、一五六	四一六、一六〇	四九、五二〇	六六、三三半		三九、七九六
大正八年	大正八年	五一、一五六	四六九、三三〇	五二〇、四八六	四〇、一九八	五五、七七半		四四七、七四半
大正七年	大正七年	四六九、三三〇	四六一、四八八	九一〇、八一八	四三、一〇四半	三〇、一〇一		四四七、七四半
大正六年	大正六年	三九五、六三半	三九五、六三半	七九一、二七	三六〇、一五八半	二六、八〇五半		四四七、七四半
大正五年	大正五年	三三三、八六六			三七一、〇一六	二二、〇九半		三三九、〇八九
大正四年	大正四年							

(生絲) 生絲の被害

三四五

大正三年
大正二年

三三、五五半
三五、七〇九
二六、二二三
一八、五四半
一六、二五〇半
三〇四、七六半
三五四、六七一

大正十二年度月別生絲入荷表

(第二表)

月次	科目											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
(器械製絲)	一七、七三三											
(座繰製絲)	一六、八三九半											
(折返造)	三〇、〇四半											
(柞蠶絲)	四一、九九五											
(玉絲其他)	三三、二一六											
(合計)	一七、七三三											
(累計)	一六、九四三半	三三、〇八六半	四一、八八九	三三、二一六	三九、一七九半	六六、〇九三	五七、七九三	五九、九三八	四九、四八六	五〇、二六三半	四九、七五一	四六、〇六一

然しながら一面是らの調査は、數字の上に表はれたものを綜合したのに過ぎない。其後に至つて更に調査を重ね、五萬五千六百七棚の焼失數量が明かになつて、時價五千

五百萬圓以上に達してゐることが知れた。外に前記の店舗輸出機關取引機關検査機關だけで、壹億圓以上の損害額に昇つた。この驚くべき破壊は、一時人心を喪失せしめ、内外生絲の市價に大變動を與へ、その標準を失はしめたので、遠くは紐育市場に半恐慌的の状態を招來し、經濟的見地より重大なる現象を來たした。かくして生絲の中樞を失ひ、輸出も絶望の状態に陥つたのであるが、茲に不思議にも猛火の渦中にあり乍ら、災厄を免れた倉庫は、三井物産支店江商株式會社の二會社と、澁澤小野の二商店と、外に川崎銀行であつた。三井物産には當時一千俵の生絲が在庫し、川崎銀行の倉庫には日米生絲會社の持絲があり、それに小野商店は焼けなかつたので、無傷で助かつた。澁澤商店も同様一つの傷もなく、數量も小野商店に次いで、澁澤小野商店の生絲を合せて約八千五百棚が助かつたのである。これらの焼失を免かれた生絲は、絶望裡に置かれた本市貿易の復興に生氣を與へたのである。

更に市内取引業者と相竝んで、横濱に入荷する生絲生産業者の損害も、莫大なものであつた。が生産方面から見れば、其損害割合は約一パーセント弱に當り、豫想以上に達しなかつた。本港に直接關係ある災害地各府縣工場の損害を述べれば左の如くである。

(生絲) 生絲の被害

東京府 岩淵小口組赤羽製絲場(五三七釜)の繰絲工場四棟、仕上工場二棟が倒潰し、死傷七十二名を出し、西多摩下田工場(一〇〇釜)、能川村森田製絲所(二一〇釜)等も多少損害を被つた。

山梨縣 楸澤町輝國館製絲工場(二四八釜)全部倒潰、作業中止。相興村隆基館製絲場(二〇八釜)の工場が一部倒潰、甲府市矢鳥組第三工場(五六〇釜)及び同市丸茂製絲場(三五〇釜)等も相當の被害があつた。金融方面では若尾第十有信の各銀行がシンジケートを組織し、日本銀行から生絲資金を仰ぐこととし、指定倉庫たる若尾倉庫に入れたるものに對し金融をなし、正金銀行も亦荷爲替を擔保として相當融通した。

千葉縣 被害は殆どなし。小規模工場が多いので、交通杜絶、並に金融梗塞のために、出荷不能に陥り、苦痛を嘗めたが、生産上の打撃は甚大でなかつた。

神奈川縣 被害甚大にして、二千四百七十一釜中、繰業開始の見込あるものは、僅に一割強に過ぎぬ。全潰全焼等に依り、復舊の見込のないものは、中和田村持田工場(二一八釜)、同宮崎工場(三二〇釜)、藤澤町徳増製絲工場(一三八釜)、吉田島村高木工場(五〇〇釜)、澁谷村持田第二工場(二五〇釜)、茅ヶ崎町純水館(二四〇釜)、瀬谷村川口製絲工場(一四四釜)等である。尚藤澤の若尾倉庫全潰のため、同倉庫内に保管中の繭約百八十萬圓方汚損した

ものも大損害であつた。此れに據つて見れば、生絲工場全體の損失は、約二千八百釜で、此中の過半は神奈川縣下の被害であつた。之れを總釜數たる二十九萬釜に比較すると、僅に一パーセント弱の損失で、生産力の方面から見る時は大した損害ではなかつた。

(横濱蠶絲貿易復興會調査資料)

二 生絲燒失と其影響

不慮の大災は重要輸出港を破壊したのであるから、吾國に於ける經濟界にも尠からざる影響を與へたことは論を俟たない。人或は横濱の災害は單なる一地方として看過するかも知れぬが、それは餘りに國家經濟を辨へないからで、前述の如く本邦ばかりでなく、世界的に貿易經濟に大狂ひを起したのである。先づ三千の製絲家は、一時路頭に迷つた。二百萬の養蠶家は、繭を投賣りするの悲運に陥つたのである。信州甲府上總、武藏を初めとし、遠くは四國、九州、朝鮮に至るまでの範圍に及ぼした。その相場も、地震前には一貫拾圓以上を唱へた繭相場も、本港全滅の報に因りて、參四圓の安値でも、人の拾ひ手をも一時は求める者はなかつたと云ふ現状を呈したのである。當時状態は以上の如くであるが、更に遡つて大正十二年度の生絲を含む我國の輸出入貿易狀況

(生絲) 生絲燒失と其影響

を見ると、出超期節に入つた七月・八月の下半期に於ても、依然として入超額となり、七月には四千百七拾參萬七千圓、八月には貳千貳拾參萬八千圓の輸入超過を示したのである。斯くの如き變態の貿易現象を來してゐる矢先にかゝる天災を引起したのであるから、大正十二年、我國輸出入貿易のバランスが根底から覆されて了つた。直接の打撃は取りも直さず、本港の破壊されたこと、生絲等の輸出貨物の焼失したこと、更に間接には金融疏通の不能になつたことで、運輸機關通信機關の杜絶等であつた。同年下半期に於ける、變態的輸入超過の原因は、上期に於て、範圍は小さい乍らも、中間景氣が付いたので、下半期に何等かの好景氣あるべしと見越して、思惑輸入が試みられ、其註文品は七月・八月に亘つて、著荷したのと、米國の景氣が上半期以來稍沈靜の状態にあつたので、生絲の輸出も従つて面白からず、可成りの減少を來たして居たのとに原因するので、多分九月より十月にかけて、輸出貿易が好況に赴くのであらうと一般に像測せられ、生絲の如きも出荷盛りの期に面して來てゐたので、十月には必ず入超を來すものと信せられてゐた。この肝腎な時期に、貿易の中樞地横濱が破壊されたので、全く杜絶の状態に陥つたのであつた。

今試みに災害を受けたる本港と、影響を受けざる港との前年度同期輸出入の比較を

見れば左の如くである。

大正十一年		大正十二年	
八 月	九 月	八 月	九 月
輸 入	輸 出	輸 入	輸 出
八九、一一二	四四、二五〇	七八、九〇七	五四、二一七
九〇、〇五六	五二、九六三	七、九九四	五、二六一
二二、一七五	二、八三八	二二、二八五	二、二八五
二四、一〇九	一〇、一五〇	二六、七二〇	二、二八五
二〇、一六八	六三、二二〇	二八、六八一	一七、一七八
六三、二二〇	二二、〇二一	一七、一七八	二五、六五一
六四、三四六	三五一	一七、八五三	一〇四、四〇四

(生絲) 生絲焼失と其影響

十	十	十	十
月	月	月	月
輸	輸	輸	輸
入	出	入	出
九六、四八八	二八、〇三二	四二、四六九	二四、一五九
七六、五八七	七、九六六	二六、〇三八	四二、七三五
四〇、一五七	一〇、二〇四	一一、二六四	五二、九六八

我が經濟界は斯く震災の影響を受け、一般に不振の域を脱することも得ず、貿易は主として復興材料輸入の爲め、未曾有の入超となり、一方對外爲替相場の暴落を來した。更に震災の善後處置として、解決を要する重大問題もあつた。幸に二月中旬、英米市場に於て五億五千圓の外債が成立し、又困難なる火災保險問題、燒失生絲問題の如きも圓滿に處理されたので、財界も漸次平調に復したのであるが、一般の事業界は、整理尙大にして、益、今後の努力を俟つべきもの甚だ多いのである。

已上は貿易經濟に關し、震災の影響の一端を概記したに過ぎない。(横濱生絲貿易復興會調査書横濱市日報編)

三 生絲貿易の復舊諸對策運動と其成果

横濱市を一夜にして焦土に化し、一切の施設機關は殆んど全滅し、中にも直接生存に

緊切なる經濟機關は悉く灰燼に歸した。市の將來も全く危まるゝ有様であつた。市街は何處を見ても、店舗を初め金融、交通、通信、運輸等の補助機關は影をも止めず、商買は市外に移り、本市唯一の生命たる生絲貿易の前途も危まれ、流言は頻々として起り、生絲貿易は神戸港に移るなどといふ噂もあつた。その結果市内商人は相率ひて活路を他方に求むるものも出で、新横濱市の建設の上にも多大なる障礙を免かれなかつた。

かゝる混亂に市當局及憂郷の士は、これ等の脅威を一掃することに努め、將來多少なりとも惡影響を與ふるやうなことがあつてはならぬと考へ、居所も定まらぬ市會議員に急使を派して、十一日午前十時、災害後最初の緊急市會を召集した。渡邊市長は前言冠頭に

前古未曾有の大災害の結果、我横濱は殆んど全滅した。爲めに或は貿易を東京に引移すべしとか、生絲貿易を神戸に移すべしとか、恰も吾横濱市が消滅せるかの如く不安の感を抱かしむる浮説すら起るのである。然れども我が市民はかゝる殘骸に屈せず、舊に倍したる大横濱市の建設に覺悟と決心とを有するものである。この覺悟決心を今市會に於て發表し、内外に宣明する事は、焦眉の急務と信するに依り、今日市會の召集を煩はした所以である。冀くは充分の審議を致されたい。

と宣べてあることに依つて、明かに當時混亂状態にある本市の貿易前途を憂慮し、如何にして復興せしめやうかと云ふ衷心の叫びであることが伺はれるのである。

而し前途は大なる暗雲に閉ざされてをる。それは貿易施設の爲めに缺くべからざる主力である。金融交通通信運輸等の諸機關は總て杜絶してゐる。これらの機關は實に本市の復興を疑はしむる程に、廢滅の悲運に遭つてゐたから、従つて前述の如く、此の地に利なしと、絶望の嘆を残した絹織物輸出商の如きは、神戸に店舗を構ふると云ふ始末であつた。又一方には通信機關の杜絶によつて、外人の多くは本市の復興を疑ひ、恰も死地の如くに思つた。船舶の出入も、物貨の輸送も、一時は本市以外の地に轉ずると云ふ事になつた。かくの如き一時的の現象は、混亂状態であつた當時には、有り得べきことである。

遡つて九月七日、混亂と絶望とに封せられ、方策も術策も殆んど見當もつかぬ有様の際、小野哲氏、小島氏、小野俊氏、井上定氏、上甲氏、木村氏その他の諸氏は、先づ公園内社交俱樂部跡に相會し、生絲復活に必死を誓つて、その日は別れ、翌八日に小野哲氏は本牧の原氏を訪問し、前日の決心を縷々陳述して、氏の奮起を促した結果、その後、に於ける横濱貿易復興會は成立の端緒を得たのである。明けて十日午前六時、原小野兩氏は本牧に會

して、直に出京を決し、同所から一艘の舢舨に乗つて、水上警察署裏に留まり、同所から、三井物産會社の井上治兵衛氏も加はつて、豊嶋丸で芝浦に上陸したのである。翌十一日、三氏は、重大使命を帯びて、關係各省の大臣を歴訪して、縷々熱涙を含む一大決意を披瀝して、政府の援助を懇望した。その結果、主務大臣は何れも本市回復の爲めには、極度の援助を吝まらずとの力強い言明を得たので、三氏は衷心の勇躍を抑へつつ歸濱した。此一條は正しく貿易都市の前途に一縷の光明を齎らしたと云はねばならぬ。その大要は次の如くである。

各位竝に市民諸君が、此の際一大決心を振り起して、捲土重來的の施設を講ぜんとする意氣込みは、實に賛すべきである。政府も亦進んで極力援助を吝まない。正金銀行が國家の爲め一大飛躍的に貢献するに至つては、寧ろ恰も絶好の機であるに依り、内外爲替を引受け、横濱市復興の爲めに至上の聲援と、便宜を與ふる様に取計はしむるであらう。尙交通機關は陸軍をして速に完成せしめ、其建造物の監視に努めしめ、倉庫は主務局長、税關長と協議の上、保税倉庫の無償利用を爲さしむるべし。又海外市場との通信は數日ならずして回復せしめ、迅速に棧橋の修復をなして、船舶の出入に充分の便を與ふるやうに取計ふべし。

即ち、これ等の各主要事項が、その實現を見るならば、一通りの市場としての體裁を具

備する譯であれば、従つて市の前途に對しては、早くも一道の光明を認め得られたのである。因に海外通信問題は政府としても、現下過激思想の問題から躊躇してをつたので、極力三氏は遞信大臣に具陳した結果、櫻木驛前郵便局を急設し、局舎の材料は本市當局と交渉して、茲に海外通信も可能ならしめ、來る十七日の初生絲輸出の原動力となり、一梱に八百圓の價を見たのである。一方九月八日、蠶絲業救濟方法に就き、本市の營業者五十餘名の協議會を開催して、先づ一應市復活善後策に關する意見を開陳し、實行委員十名を擧げて、左の如き決議に及んだ。

決 議

交通及運輸、倉庫、金融の機關を整備し、地方の蠶絲家をして安心して出荷する様通知すること。これが復活を圖るためには、決死の覺悟を以て當らねばならぬ。故に組合全員を委員として、九日更に三井物産會社に參集し、それらの具體的決議を爲すことに決した。更に當業者はこれらの會合に依つて、生絲貿易の回復方法に關しても、最善の協議を重ねて來たが、何れもこの大勇猛心は、此處數日後には適當なる具體的施設を講ずる意氣込みであつた。一方貿易復興の先決問題たる市場設置地に就ては、過般來横濱蠶絲貿易復興會の大活動により、神鞭稅關長の厚意ある斡旋で、稅關内新港保稅倉庫が無料提

供された。周圍には五百坪の敷地があり、市役所供給の材料を以てバラック式附屬建築物を速に建てるべく、十三日工事に著手したが、これらの建物は生絲取引市場を中心として、各輸出業者、竝に賣込問屋の事務所、荷造場等の設備に充てるもので、保稅倉庫内には生絲約五萬梱を容れ得る能力がある。右準備著手決定と共に、復興會では全市製絲家と、聯絡を圖る爲め、部署を定めて市役所證明書を携帶して、九月十三日、左記の諸氏外百名夫々出發したのである。

- 東京方面 小川・井上。
- 相州方面 若尾・木村。
- 甲府方面 中澤・小川。
- 京都方面 奥村・神榮・原・小島・日米。
- 信州方面 原・澁澤・小野・湧川・日米。
- 福島方面 阿部・渡邊。
- 山形方面 田中・神榮。
- 靜岡方面 小島・渡邊・小川。
- 名古屋方面 井上・小島・湧川。
- 四國方面 日米・中澤・岩倉・數野。

(生絲) 生絲貿易の復興諸對策運動と其成果

中國方面 小野・原・日米・神榮・奥村・小島。
九州方面 原・奥村・日米・澁澤・小野・神榮。
北陸方面 岩倉・山田。

然るにこれらの對策運動に遡つて、震災直後二日來、既に全国各地の製絲組合業代表者は、交通全く杜絶の状態なるにも拘らず、萬難を排し、續々來市し、懇篤なる慰問と、熱情とを表示され、横濱生絲市場の一日も早く復興するやうにとの真情をもらしたのである。更に右代表者は一週間以内に開市の見込も立てば、貴市に出荷すべしと言明され、既に出荷準備も整へたる向も多く、現に六郷川の向ふまで輸送し來たものもあつたのである。

製絲業代表者の來濱に依つて、本市の貿易復活の運動は、大なる刺激を受けたことは事實であつた。引續き十四日には、井坂商業會議所會頭外、議員、竝に取引所重役と會合し、善後策を協議し、其後正金銀行も復興會の要求に應じ、製絲家の取引銀行に對し、信用狀を發行して、荷爲替の取組みを圓滑ならしむる旨、その後二十二日に聲明した。次で市内組合銀行も、二十五日一齊に開業するに至つたのである。かくの如く寢食を忘れての畫策奮闘は、災後約二旬を經過して、即ち忘れ得ぬ九月十

七日震災後第一回の生絲を米國に輸送し、又同日の市況は最優等は貳千百八拾圓、武州格は貳千〇七拾圓であつた。第一回の現物即ち前記燒失を免かれたる小野・澁澤二商店の生絲を以て、商談は本町一丁目復興會事務所に出來したのである。

餘震尙ほ止まず、餘燼未だ消えなかつた九月十七日の超人的行動は、内外國人共々に、その必死の努力と、迅速なる行動とに驚嘆せぬものはなかつた。而もその成績は八月三十日の成行値極めに比し、百斤對百五六拾圓高に振合したのである。翌十八日午後一時より本市假事務所樓上に於て、横濱商業會議所第一回の臨時總會は開催され、井坂會頭を初め十五名の議員出席して、本議に入るや、左の決議を一齊に可決した。

決 議

我横濱市は帝都と共に、振古未曾有の災厄に遇ひ、殊に當市慘狀の激甚なるは殆んど言語に絶す。之が爲に數萬の生靈を失ひ、過去六十年間に亘り、市民の不撓不屈の努力を以て建設したる經濟的及文化的の基礎は根底より覆されて、又其の跡を止めざるに至れり。其の慘狀を目撃するもの、誰か茫然自失せざるを得んや。吾人の見る所を以てすれば、今回の災厄に基く損害は、全般を通じ蓋し五拾億圓を下らず。當市の被る所亦六億に及び、彼の國運を堵して戦ひたる日清日露の兩役を以てしても、其の戦費が之を通計して、今次の損害額の半に過ぎざるを思はば、如何

(生絲) 生絲貿易の復舊對策運動と其成果

に其災害の甚大なるに戰慄せざる能はず。而して其の被害は京濱兩市商工の中心に亘りて、其の全部を破壊したるを以て、生産を杜絶し、貿易を停止し、到底市民の獨力を以てしては之が回復を全ふすること能はず。隨て復舊に對し、未だ何等曙光を認むること能はざるの状態を考ふれば、吾人は切々其の災厄の深甚なるに想到せざるを得ず。

此時に際し吾人は當面の急に處する爲め、縣市當局者を援けて、極力災害の援助と、整理に盡力せざるべからざるは勿論なれども、更に大なる責任として吾人の双肩に懸るものは、當市の復興と、其の經濟的回復とにあり。

惟ふに我横濱は帝都の關門たると同時に、本邦の大半に對する國際貿易の吞吐たり。京濱兩市は經濟的に一單位たり。横濱の復興は獨り我市民の爲めに之を必要とするのみならず、實に帝都の爲め將た我國全般の爲めに絶對に之を必要とす。横濱にして復興せざれば、帝都の復興は全からず。横濱にして其の經濟的回復を見ざれば、災厄に起因せる我國の經濟的破壊は直に恢復せりと言ふことを得ず。政府當局者及一般國民は此の理を了知するが故に、吾人は國家が帝都の復興に關聯して、當市の復興に全力を盡すを疑はずと雖、而かも横濱の復興は横濱市民の絶大なる努力と犠牲とに俟たざるべからず。吾人は斷々乎として確固たる信念の下に、不撓の精神を以て、當市の復興に向つて勇往邁進以て其の目的を達するの覺悟を定めざるべからず。復興の第一は港灣の復興にあり。幸にして今回の震災が其の設備に加へたる損害は、外見の如

く甚しからず。僅々數百萬圓を以て港灣の使用を全からしめ得べしといふ。我國貿易の大半は、勿論災害の復興に要する主要なる物資の陸揚げは、主として我横濱港に俟たざるべからず。幸に國家が此の見地に據り、極めて敏活に其の復舊に著手せられたるは、吾人の感謝に堪へざる所なり。思ふに當港の利用は今後益々大ならんとするに當り、吾人は單に其の復舊を以て、満足すべきにあらず。當港の果すべき使用を全からしむる爲め、適當の擴張計畫に對し、其の調査研究は勿論、進んで其の實現に對する努力を緩ふすべきにあらず。

生絲の輸出は帝國經濟の中樞にして、又當港の生命なり。此の業務は實に我市民が數十年に亘る努力の結晶なるが故に、當市に於て其の既に占めたる地歩を永遠に維持せんとするは、吾人の權利たると同時に、又其の義務なり。我生絲業者が此の最大厄難の日に當り、全般の施設を悉く喪失したるに拘らず、毅然として起ち、災後未だ二句を出ざるに、早く既に其の取引を開始せるは、殆んど人力を超越せるの努力にして、其の元氣の旺盛なる誠に人意を強ふする者と謂ふべし。吾人は其の努力に對し、又政府及横濱正金銀行が、この計畫に對する至大の援助に對し、滿腔の感謝を表すると同時に、吾人市民も亦終局に其の目的を達せしむる爲め、如何なる援助も之を吝まざるの覺悟を有せざるべからず。當市及其の背後地帯に於ける工業は、當市の經濟的動脈なり。幸に近時漸く其の股脈を見んとするに當り、此の災厄に際會して殆んど全都の破壊を見たるは、其遺憾馨ふるに物なし。吾人は國家が此の如き工業の復舊に對し、至大の援助を與ふることを

疑はされども、之と同時に其の實現に對し、吾人は大々的の努力を致さざる可からず。吾人は今回の災害に遇うて、偏に天意可畏の感を禁ずる能はず。各人速に内に自ら省み、相警め、相悛め、眞摯實の大義に據り奮勵努力、商工の復興を計り、禍を變じて福となすの決心を定め、之を實行せざれば、恐らくは天意に悖らん。吾人は茲に帝國の國運を負うて、當市の復興進展を期するの覺悟を表明せんとす。

右議決す。

大正十二年九月十八日

横濱商業會議所

これらの決議等は、全く當時に於ける不撓の精神を發露し、又一面には政府及正金銀行の援助と共に、前途には益、光明を見出すに至つたのである。かくして萬端の施設も著々歩を進め、同日原氏を會長に、市長を商業會議所會頭になし、市會議員等は協力して、前記工事中の本町通り組合會館向側に急造バラック百五十坪を設け、同日生絲取引開始の共同市場を設くるに至つたのである。倉庫には保税倉庫第二號を充て、八十坪、二十九室ありて、優に藏入五萬梱の餘地あり、而して正金銀行は一梱八百圓の保證に立つ外、總ゆる金融の便を計ることとなり、中央生絲市場の體裁を具するに至つた。事務所は税關倉庫より舊市場に移し、原渡邊井上三井商店、芳賀生絲検査所長、市商工課、其他當

業者、輸出業者、問屋、賣込商等多數參集し、即賣方三名、委員六名を設け、直段折衝の結果、

- 最優等 二、一五〇圓
- 羽子板 二、一三〇圓
- 毬 二、一〇〇圓
- 矢 二、〇七〇圓
- 八王子子 二、〇五〇圓

の相場を現出し、米國に於ける相場五割の奔騰を見たるに、何れも僅かに百五拾圓高を示せるは、商況極めて健實の將來を祝福するに至つた所以である。

已上の初手合以來、毎日一萬六千斤餘の入荷あり。何れも武州、埼玉、茨城、下總等自動車の開通運轉し得る方面よりの入荷にして、最近東高島驛にも入荷を見るに至つた所から、同方面よりの鐵道移入あるのみならず、二十四日は清水港で積込んだ百五十梱の入荷があつた。尙ほ同港からは弘濟丸、博愛丸等順次入荷、搭載來港する豫定にて、在荷品は漸次増加の見込みも立つた。一方輸出状態を見ても、嚮に三井物産より三洋丸にて輸出されたのであるが、米國に於て十九日以來、商談成立を見たので、輸出も漸次増加の傾向を呈したのである。前記の如く横濱貿易の發達上、原動力とも云ふべき正金銀行の生絲金融の援助は、多大なるを以て、他方生絲業者も焦眉を開けるのみならず、生絲

(生絲) 生絲貿易の復舊諸對策運動と其成果

の先高を見込、繭値段上騰の傾向を呈した。而して以後生絲取引外人は主として神戸に避難したのであつたが、神戸港に於ては到底取引不能であるのと、既に取引との關係もある所から、漸次本市に歸還する状況であつた。既に甲九ボシヤート二六四番英一番九二番二四二番一九五番等の商館員は歸濱し、ナンセン號に一箇月餘の食糧を塔載し、取引に参加してゐる向もある。而して取引高は、

九月十七日

三三、五〇〇斤

九月十九日

三三、五〇〇斤

九月二十二日

三〇、〇〇〇斤

右の如くである。十八日二十日二十四日は休業したのであるが、以上の如く入荷高の相當なると、米國に於ける商況が良好に向ひつつあるのと、外人は續々歸濱するのと、復興會の絶對的奮闘と、政府筋の援助と、これらが相俟つて全く今後益、順調に向はしむる主因となつたのである。

尙ほ其後に於ける、本市生絲取引の景況を見るに、益、順調に好況を呈し、毎日七八百梱乃至二千梱の取引を示し、九月二十八日の概況を聞くに、參拾圓高にして、貳千貳百拾圓四萬斤の取引を示してゐる。

前記の如く、震災直後は偏に地方製絲家の出荷を促がした不撓の努力の結果、九月中の入荷は實に五千九百三十八梱であり、十月十五日の現在は二萬二千四十梱で、合計二萬七千九百八十三梱に達してをるのである。

かくの如く追日の活況を示し得ることになつたのであるが、一方夫れから夫へと寸毫の休息もなく、對策運動に勉め、十月十八日は、更に政府生絲検査所設置を陳情した。

陳情書

曩に帝國蠶絲會社解散の當時、生絲検査所の擴張及倉庫建設資金に、更に國庫より八拾萬圓を支出し、大正十二年度以降三箇年の繼續費を以て、生絲検査所の擴張及倉庫の建設に著手せられ候様仄聞致候。然るに今回の震災に依り、全市焦土と化し、今や朝野死力を擧げて、之れが復舊に没頭しつつあり。申す迄もなく生絲貿易は當市の生命にして、一時も速かに復舊を要するに付、右資金は一時に支出し、一箇年間に工事の全部を完成せられ候様、特別の御詮議相成度、此段申請候也。

大正十二年十月十八日

横濱復興會會長

富太郎

農商務大臣

田

健

次

郎殿

(生絲) 生絲貿易の復舊對策運動と其成果

更に二十七日には横濱生絲取引業者の代表澁澤原氏外十數名は、農商務省に出頭し、田農相代理長場局長に面會を得、本市復興上交通至便なる波止場より海岸通りの一帯を畫して、生絲町となし、横濱港繁榮の一助としたき方針なれば、本省が生絲検査所其他重要機關の建設に際しても、この點を十分に考慮せられたき旨を陳情した。之に對して局長は其意を諒として、極力之が實現に助力すべき旨を答へられ、一同は満足して退出した。

さて横濱に於ける生絲の在荷は、逐日増加し、又政府筋との交渉も順調を呈したが、ここに交通機關の缺陷と、金融に關する産地製絲家は、正金銀行が應急的施設として開始した。内地向き荷爲替取組に就ては、未だ充分利用するに到らず、産地に於ては正金の右計畫を以て、輸出生絲外の在荷品に對する金融をも引受けたものの如く思惟するものもあつたが、此間種々の誤解があり、延いて横濱に對する出荷上の故障も少くないので、横濱輸出商や、生産地の製絲家中には、目下の生絲金融状態を一層改善し、營業者の利便を計り度いと云ふので、寄々銀行とも、交渉中であつたが、右につき横濱に於ける正金以下六銀行は、十月十二日午後、東京集會所に代表者の集會を催し、種々意見を交換する所あり、其の結果、目下の場合銀行としては出來得る限り、生絲取引者の便宜を計り、金融

を疏通する外なしと決した模様である。併し正金の内地荷爲替取組に就ては、それが横濱産地間の生絲取引を主としてゐるに拘らず、一般金融の安定するに従ひ、種々其職分につき非議するものがある位だから、いづれ之を普通銀行の活動に俟たねばならぬだらうが、罹災後一般銀行に對する信用に就て、製絲家中尙不安を抱く者もあるから、此際製絲家は正金の活動につき充分の理解と、信頼を以て、出發の目的を達すべきを知らしめた。

已上の如く本市生絲貿易の復興は、漸くその萌芽を發することを得たのも、偏に愛郷の有志竝に市當局の渾身の努力に外ならないのである。横濱市日報、市商工課、蠶絲復興會市内版各新聞記載記事。

四 生絲貿易と金融

横濱の經濟的復興の原動力は、いふ迄もなく、金融にある。然して横濱金融の中心は、何と云つても正金銀行である。従つて正金銀行の復興に對する態度如何は實に横濱の經濟的復興の鍵である。生絲貿易復興は種々なる機關の一致の働きに因て、その運轉を開始したるに相違なきも、その中心動力は正金銀行が九貫目八百圓の荷爲替を無限に受拂ふべしと聲明したる一大決斷に因りたることに何人も疑を挟まないものである。この聲明に因て、生絲貿易は燒原の焦土の内より、一週間を出でずし

て復活したのである。余(原富)は九月十一日、兒玉正金頭取を訪問し、頭取から「生絲貿易に奉仕のために、この際生絲の入荷に對し、無限の荷爲替の受拂をなすべく、その貸付價格についても、復興會と協議して、援助を惜まざるべし」との言明を聞き、心中一種の感動と、限りなき感謝を禁じ得なかつたと同時に、横濱の復興なるべしと思つた。併しその夜東京からの歸途、この如き喜びが往々難喜びになつてしまふ事があるのは、曾て幾度も経験した。かかる聲明が最初の非常に寛濶なる態度に似ず、いざ實行の場合となると、平時と同様、用心や事務上の繁雜なる形式や、事の緩急を辨ぜぬ事務員の取扱振によつて、實用の範圍を狭められ、その實行が聲明に伴はざる事になるまいかと考へた。然るにその後事業の進行と共に、兒玉頭取の態度は、嚴として初めの聲明の如く更に變らず、九貫目八百圓の價格も快諾した。信用狀も地方の各銀行にも製絲組合にも荷受の電報を發して呉れた。その他諸般の便宜を計つて呉れた。總て形式や手續を省略して、實効を擧ぐる可く努めて呉れた。總て簡潔を旨として、殆んど凝視するに暇なかつた程の快速力を以て、事を處理して呉れた。余は今後再び會すべからざる最大快事として、非常なる興味を以てこの成行を見たのである。かく正金銀行は横濱に於ける生絲貿易に於て多年の義務を盡すを怠らなかつた。無論正金銀行は生絲貿易の増大に伴つて其大を來した。當然の義務とは云ひながらその決斷と敏速とにおいて、余は貿易復興會の理事長としてここに深く敬意を表するの至當なるものがあると思ふ。世界未曾有の大戦を経て、各種各様の研究を経たる結果、一致と協調と生存との三點を必要とすることに歸著したるは、世上識者のともに

認識する所である。殊に今回の如き突差の事變に會し、復興事業を樹立する場合に於て、最も然りとす。正金銀行今回の美舉も、また此の意義を實行したるに外ならぬのであると思ふ。併し横濱復興の問題は、將來尙甚だ澤山ある。皆主として金融の中心たる正金銀行の協調と、共存共營の態度に待たなければならぬと同時に、自餘の銀行も亦皆その態度を同うし、此と協調し合奏すべきは當然の事である。復興ならずして、金融業者獨り榮ゆるの道理なく、金融業者滅びて、復興獨り成るの理なきは自明の理である。金融業は云ふまでもなく、株主の銀行なり、預金者の銀行なるに相違なきも、今回の如き災厄は、誠に人類に稀有の不幸なれば、この場合に於てその共存共榮の途に就くがために必要と認めたる行爲は、株主や預金者と雖も、その忍ぶべきを忍んで、滿腔の同情を表すべきである。若し彼等にして共存共榮の道理を忘れて、漫に自己の利益のみを主張するに於ては、これ同情なきものとして世上の擯斥を受くるは勿論、その結果人を傷けて、自らも傷くに至るものを思ふ。今や共存の上に於ける同情の觀念は、その株式會社たると、公共團體たると個人たるを問はず、皆一様であり、この觀念を基礎とする奉仕の義務に就て、何等輕重の差なきものたるは多言を要せざるべし。余は横濱復興のために、横濱に於ける金融業者は勿論、各種の事業家も、工業家も、皆その共存共榮の道を講ずるに於て吝かならざるを願ふて已まざるものである。(十二月二十四日 原富太郎氏述)